

## 【参加学生レポート：本学学生】

### 「コミュニティ」を考える

#### 1. 国際的交流的側面

今回、国際学生フォーラムに参加するにあたり、2名の学生のバディを担当し、主にこの2名との交流の機会が多かった。アメリカ・ヴァッサー大学からの学生と韓国・釜山外国語大学の学生である。ここでは、特にこの2人との交流を通して気づいた相違点を挙げる。

まず、共通点として、2人とも以前日本への留学経験があったということだ。そのため、日本での滞在に不自由が無く（電車の乗り継ぎなど）、また既に日本での交友関係が築けていた。これは、自身のバディに限らず、多くの海外からの学生も同様であったという印象がある。国際学生フォーラムの準備期間中は、毎日バディ達と遊んだり、日本らしい地を観光したりなどするもの（韓国語研修がそうだったので）だとばかり意気込んでいた。しかし、蓋を開けてみると、久しく会っていなかった友人達と再会するなど予定が詰まっており、想定していたよりも交流する時間が少なかった。また、学生の多くは、いわゆる「日本らしい」場所は既に行ったことがあり、どこを案内すればかなり困った記憶がある。全体として、普段交流することの少ない海外にルーツを持つ学生と交流の機会が与えられ満足している反面、意気込んでいた消化不良になってしまった感触がある。

次に、異なる点であり、自身が課題だと感じたこととして、国際学生フォーラムのプログラム全体を通して、欧米圏とアジア圏にコミュニティが二手に分かれてしまったことである。これは、この後の項目2で述べる予定の言語レベルや母語、興味のある日本(のジャンル)の側面、そしてイベントの主旨に起因するものと考えられる。はっきりと2つに分かれてしまわぬよう、せめて日本人が加わることで疎外感を与えぬよう、一人の日本人として、積極的に「欧米圏のコミュニティ」の方々との交流を図った。その影響で、あまり韓国の学生と長い時間交流をできなかったことは後悔している。さて、欧米圏の方々には日本のポップカルチャーやサブカルチャー、和食などの文化的側面に興味を持たれていた印象がある。特に、自身がバディを担当したアメリカの学生はアニメや漫画に造詣があり、自身もそのようなジャンルに非常に詳しいと自負していたため、交流がスムーズであった。実際、コアなアニメファンが訪れるような場所を案内できたり、作品を紹介できたり、学生のニーズに応えることができたのではないだろうか。一方で、アジア圏の方々には、日本の音楽や俳優などの文化的側面に興味を持っていたり、日本で働くことを視野に入れている人もいるのではないかという印象があった。自身と同じくらい日本についても詳しく、1対1で交流する際には、母語が違うだけであまり外国人と「国際的な」交流をしているという感覚はなかった。ただ、フォーラムに参加している韓国学生が非常に多かったこと、大山寮などお茶大に在籍している韓国人学生も一定数いることなどから、アジア圏（主に韓国人同士の）コミュニティが形成されてしまったと考えられる。韓国人コミュニティという多に対して1人で交流することに少し消極的になってしまったかもしれない。同族で固まることは、異文化地では安心できるものだと重々理解している。ただ、国際交流を図る場ではとても勿体無いことであり、ホストであるお茶大生がこの2つのコミュニティの架け橋となれるようさらに尽力する必要性を感じた。

以上のことから、普段交流する機会のない海外の学生とのコミュニケーションをとることができて満足している一方で、課題も見えた。日本をある程度知っている学生にも楽しんでもらえるようなアクション、欧米圏とアジア圏を分断しないようなより質の高い国際的な交流が求められる。

#### 2. 言語使用・学習の側面

ここでは、自身の言語使用について、また外国人学生の日本語使用について気づいたことをまとめる。

まずは、自分の言語使用を振り返る。英語は、アメリカ人のバディが日本語の意味がわからなかった時に英語で少し説明する時に使用した程度である。基本的には、海外学生のせいかく日本滞在なのだから、極力日本語での交流を考え、日本語の使用を努めた。そもそも、アメリカからの学生のバディに志願したのも、自身の英語力を向上させながらも、学生の日本語をサポートできたらと考えたためである。英語圏の学生達が英語で赤裸々に話している内容も、ほとんど理解できたのでとても興味深かった。韓国語は、自分の知っている韓国語を韓国人学生達との交流のトリガーとして使った程度で、韓国語でのみの交流は無かった。これは自分の語学力不足によるものである。この、外国語の使用差は非常に興味深い。言語能力の高い外国語ほど必要な時や困った時のみ補助的に使用し、能力の低い外国語ほど自分の知っている限りのものを絞り出してまで積極的にコミュニケーションの中に取り入れようとするのだ。前者の方がより自然で理想的な外国語のコミュニケーションではないだろうか。結局、結果としてはフォーラムの行程の殆どで日本語を使用していたことがわかる。学生の大多数がある程度の日本語力を有していたことを踏まえれば妥当であ

る。今度似たような機会があれば、英語の次に、(日常会話程度ならば) 学習しているドイツ語やロシア語を使用してみたい。

次に、海外から参加した学生の言語使用も少し考察する。フォーラム期間中は基本的に日本語を使用していたが、同じ英語圏同士、中国人同士、ポーランド人同士、韓国人同士で難しい話やお茶大生にあまり聞いて欲しくないような赤裸々な話をする際には母語を使用していた。母語の方が話しやすいということもあるが、それ以上に他の学生に理解されたくないという思いもあるのだろう。印象的だったのが、英語圏の学生とポーランドの学生の間では英語で交流を図っていたのに対し、英語圏の学生とアジア圏の学生は日本語で会話をしていたことだ。欧米圏は同族としてのコミュニティ意識があり、アジア圏の人は「他」として認識しているのかもしれない。また、質問の際も、英語圏の学生が英語で質問している場面が散見された。実際に、学生達本人にシンポジウムの内容を理解しているか聞いたところ、かなりアジア圏の学生と遜色ない程度理解しているようだった。英語で質問をするのも、元々の積極性が高く発言数が多かったり、英語でならば他の人全体にも通じるのではないかという意識があるからなのかもしれない。さらに、欧米の学生が韓国・中国からの学生の日本語力に圧倒され、自分の日本語力を過小評価してしまっている傾向もあった。欧米圏の言語を母語とする人々にとって英語を習得しやすいうように、日本語と韓国語は文法が似ていたり日本語と中国語は双方とも漢字を使用することなどから、韓国人や中国人にとって日本語は学びやすいものなのかもしれない。実際、自身も世界各国から学生が集まって英語で行うプログラムの際、自分の英語力に自信がなくなってしまった経験がある。各学生がより対等に話し合える環境作りを、ホスト校側が積極的に行っていくべきである。

このような、意識や使用言語の違いが、先の項目で挙げたような欧米圏の学生とアジア圏の学生との壁の一因になっていると考えられる。

以上のことから、その言語の能力によって使用方法が異なること、また言語がアイデンティティやコミュニティを形作る大きな要因だとわかる。その上で、そのコミュニティを越えて交流し、より大きな共同体ができるような意識づくりが必要なのだと再確認した。

### 3. 学問的学び

基調・招待講演やシンポジウムでの学生の発表を受けて、多文化主義への意識と情報をどう受け取るかが異文化共生を果たす上で課題となるのだと認識した。

まず、多文化主義への意識づけである。小松先生の講義では、(先の項目でも言及した) アイデンティティを形成する要因となり得る言語教育的側面より共生を図るベルギーのケーススタディを教わった。一つの国に、様々な民族が存在するだけでは多文化共生には繋がらない、一国家の中でも民族の対等性を制度上で示す必要があると学んだ。山本先生の講義では、そもそも共に生きるとはどのようなことか、多文化共生の本質を教わった。我々のアイデンティティは単純なものではなく、他者に影響を受け、他者の介入のもとで形成されているのだと分かった。また、既に多文化主義を実践しているニュージーランドからの学生の発表を聞き、どのような意識を持って様々な人と接しているか、またその実践方法を学んだ。

以上のような学びを通して、自分たちの意識が多文化主義から如何にかけ離れていたか痛感した。私を含め、多くの日本人は日本人であることや日本文化・伝統にある程度誇りを持っている。そのアイデンティティ、ルーツ、文化や伝統は日本固有のものだと信じて疑わず、他者の影響を受けたとは思えないだろう。しかし、文化が文化となり得るのも、他者の存在があってこそであり、他者を認識・容認する必要があるだろう。また、日本の社会が日本人以外を異文化、自分たちとは異なる人々として遠ざけていることを再確認した。ニュージーランドからの学生に質問した際、彼らはアフリカ系の人々をも同じ共同体の一員として認識していると話してくれた。日本ではどうだろうか。「在日」はあくまで「在日」として扱われ、帰化したとしても純日本人とは区別されていないだろうか。そもそも、ニュージーランドのような多文化社会において、アフリカ系の人々も共同体の一員であるから、アフリカ系文化は異文化ではないと言う。同じ社会に住む人々と同じ共同体を形成し、その共同体内の多様な文化を異文化として距離を置いてしまうことのないような意識作りが必要だと感じた。

さらに、情報・報道をどう受け取るか、ということである。東アジア内の対立は、メディアによる表現方法の差が一因とされている。韓国の学生の発表にもあったように、一つのニュースでさえも国によってその報道の仕方、言葉の選び方は変化する。メディアを通して一般市民の感情を煽ろうとする政治的意図、そして勿論制作側の自国への尊重により偏った報道がなされてしまう。そのような現状を踏まえ、中国の学生からは東アジア全体の情報機関の設立が提案されていた。ここから、既に多くの学生がメディアに対して問題意識を持っており、変えようと努力していることが分かった。

ただ、まずは我々一人一人のリテラシーを高めることが再優先だろう。招待講演でのディスカッションや国際結婚をしている先生方のお話を通じて、自分たちで情報を選択する必要性を学んだ。同じ事例についても、多方面・多言語の記事に当たってみることが肝要であり、そのための外国語教育である。ヨーロッパ

では母語プラス2言語の3言語学ぶシステムがあり、これは非常に理にかなっていると感じた。というのも、日本と韓国のような対立している問題の記事を読む際、日本側と韓国側の報道では自分たちを優位に立たせるような情報が掲載されるものと推定できる。そこに、ポーランド語のような第三者的な立場の言語で書かれた記事をさらに読むことで、中立的な立場からの視点も見えるはずだ。故に、外国語を3つ以上学び、リテラシーを高めることが共生への一歩となると学ぶことができた。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

今回、この国際学生フォーラムを学生代表として参加し、他系の準備段階などを見てきた視点からこのイベントを評価してみる。

まず、良かった点である。1つは、ホスト校として、海外からの学生を歓迎し、サポートすることはできた点である。歓送迎会やツアーなど皆でイベントを楽しむムードは作れていたし、実際楽しかったという声もたくさん聞いた。お茶大生がバディをしっかりサポートし、時折外へ出かけている姿も散見されたので、大きな問題・不満は無くイベントを終えられたのではないだろうか。2つ目に、各国からの学生の発表を通して、学生側の視点からの現状や問題意識などを交換し、しかも日本語を統一言語として交流できたのは良かったと考える。ニュース記事などからは分からない、学生の視点からの意見はとても貴重である。学生同士で思いの丈を話し、それを自分の中で反芻しさらに考えるなど、イベントが終わってからも何かを持ち帰ることのできるイベントになった。この一連の流れを、英語といういわゆるグローバルな言語では無く、皆が日本語で意見交換できたことも共生への一歩と言えるのではないだろうか。3点目は、イベントの準備・運営を学生主体で行なった点である。勿論、森山先生をはじめ、先生方のお力なしには成功しなかったと考えている。お茶大生主体で行うことで、一人一人真摯に仕事と向き合いより良いものにしようという意識が高まった。学生視点での運営だからこそ、お茶大生は自分の行動に責任を持つことができ、海外からの学生から好評だったといえよう。

次に、限界点や改善が見込まれる点である。1つは、東アジア内の共生をテーマとして掲げていたために、アメリカ・ニュージーランド・ポーランドの学生が少し蚊帳の外であり、おいていかれている印象があったことだ。原因としては、欧米圏の学生が韓日・中日・中韓の情勢にあまり詳しくないこと（歴史上の言葉などをあまり理解できていない）、日本語能力に対する自信の喪失（代わりに英語で対応してしまうこと）、そもそも東アジア内の話だから関係が薄いと考える意識などが挙げられる。これはシンポジウムに限らず、他の交流の場面でも欧米圏とアジア圏の分断が見られてしまった。確かに、世界の共生のためにはまず東アジアの課題を解決する必要がある。ただし、（たださえ、異文化地ではアジア圏と欧米圏での分断が起りやすいので）世界の共生を最大目標と掲げる限りは、誰も外れることなく皆で話し合えるような環境づくりが求められる。2つ目として、日本文化をかなり知っている人でも楽しめるようなイベント作りである。高度な日本語力を必要とするこの国際学生フォーラムに参加する学生の多くは、日本での留学経験のある者など、日本に精通している学生が大部分を占める。開講式での説明やツアーで訪れる施設などは、東京をよく知る学生とそうでない学生とでは対応を分けるなど、双方が楽しめる工夫があると良いかもしれない。3点目は、（これは自分の反省でもあるが）学生代表というのも名ばかりで、他の係に比べかなり仕事に余裕があったため、さらに多く仕事を回してもらっても構わないと感じたことである。具体的には、各系の進捗状況の把握や、いつまでにどの係が何をすれば良いかという仕事の明確化などを担っても良いかも知れない。今回、学生代表としてパンフレットを作成したのだが、かなり余裕があった（普段から似たような仕事を行なっている）ために、（各係から頂いた英語の原稿を）日本語に翻訳し、英日の2つのバージョンのパンフレットを作ったわけである。対して、他の係の仕事が本当に大変そうに見えたため、仕事を代表に分担してもらえるとスムーズになるのではと感じた。

#### 5. 趣味と国際的交流

少し脱線した話にはなってしまうが、今回のイベントでの国際的交流を通して感じたことをもう一つだけ述べたい。

項目1でもあったように、自身は重度のアニメオタクである。漫画を読んだり、アニメを見たり、ゲームをしたり、絵を描いたり、声優のイベントに行くことがこの上ない幸せなのである。同じ趣味を共有できるような友人の多くはSNSを通して知り合った本名を知らない人たちばかりである。大学では、自分がアニメオタクであると悟られないように、理解の無い人にきみ悪がられないように、初対面では殆ど話題に出さず、身に付けるものにも気を配っていたものだ。というのも、いわゆるアニメオタクは暗い、社会性の低い印象を与えてしまうからである。

ただ、今回のフォーラムに参加し、自分の趣味は隠すべきでは無いと確信した。むしろ、日本に興味のある海外の学生にとっては、自分は良いコンテンツを提供できる存在であり、趣味を強みにできるのだと気づくことができた。学生のニーズに応えることができるだけの知識を有していたことが、これほど満たされた

気持ちにつながったことはない。実際、今回のフォーラムでも、自分の知識をフル活用してコアな日本文化を紹介したり自分にとっては生き慣れた場所を案内するなど、学生とともに趣味を共有できるなどした。趣味の一つであるイラストもバディが帰国する際にプレゼントしたところ、かなり喜んでもらったようで大変嬉しかった。自分の趣味は隠すべき恥ずかしいものではなく、積極的に公開して良いものだと、認識を改めるきっかけになった。

今回のように、日本側がホスト校として日本を案内する場合、学生が日本のある側面に精通しているとより参加学生を楽しめることができよう。自身のようなポップカルチャーだけでなく、茶道や漢字が得意なだけでも大変なアドバンテージになるはずだ。国際的な学問を主に学んでいるため海外に視点が向きがちであるが、たまには日本国内のことや自分自身を振り返ってみて、自分の糧にしても良いのかも知れない。

## 6. 東アジア・世界がともに生きることについて

項目3と重なる点もあるが、東アジア・世界がともに生きるために、「より正確な情報をもとにした対話」及び「多様性の中で生きていく意識」の2つが肝要であると考えられる。

まず、「より正確な情報をもとにした対話」についてである。現在のメディアでは、主に事の結果や映像映えするような切り取られた過激な場面が大体的に報道されている。それらに惑わされる事なく、事のプロセス（交わした条約の移り変わりなど）や全体像を見ることのできるようなリテラシーを各々が養う必要がある。外国語学習による多言語での情報獲得、政治的・文化的な海外への興味、東アジアや世界の問題が自分にも関わるものだと捉える「当事者意識」などがメディアリテラシーの向上につながる。政治的な対立に疑問を持ったり、その国の文化へ単純な興味を持つだけでも、その国の報道があった際にアンテナが働き、自分でさらに調べようという気持ちになるものである。このような興味や、旅行でその地を訪れたことがあったり、海外に友人がいるなどの個人的なつながりなどが「当事者意識」につながる。東アジア・世界の問題を他人事として捉えなければ、より正しい情報を掴もうとするものだ。（実際、自分も知り合いができた土地のニュースは無意識でも気にしてしまうものだ。）その上で、対話を重要視する。現在、韓日や中日の対立では、意見が異なった場合にはお互いに非難するだけで、言葉のキャッチボールが成立していない。お互いの真意やそう発言する背景がわからないのである。だからこそ、学生の我々がお互いに対話をし、なぜそう考えるのか赤裸々に言い合うと良いだろう。時には喧嘩になるかもしれないが、ある程度までの妥協点は見つかるのではないか。話し合った上で、自分たちに非があったと分かれば、その時に謝れば良い。全くもって悪く無いと思えば謝らなければ良く、建前の謝罪は必要無いのだ。率直に言えば、平和的な共生は理想であって、意見のぶつかり合いなしには共生は果たせないと考えられる。お互いに面と向かって対立することを恐れて、陰口を言い合うよりも、衝突をする方がずっと良い。以上のことから、より正しい情報・知識を獲得した上で面と向かった話し合いが共生に不可欠であると考えられる。

次に、「多様性の中で生きていく意識」についてである。ニュージーランドの学生の発表を聞き、共生を果たすために我々に最も欠けていると感じたものである。というのも、民族的多様性に限らず、日本の社会において他と少しでも異なる人を奇異の目で見たり、排除する傾向が無いだろうか。しかも、直接的に喧嘩をするのではなく、気味悪がって距離を置いたり無視するなど一切の関わりを断とうとする。実際、自分自身も海外から帰国し日本の小学校に戻ってから、少し英語ができたり、自分のアイデンティティの中にアメリカの文化が流れ込んでいたので、クラスからかなり浮いてしまったりいじめ紛いの経験をしたものだ。同じ日本人でも変わった人を排除してしまうのだから、国籍やルーツが違えば尚更である。この価値観・認識の傾向を変えていかなければ、東アジア・世界の共生は叶わない。多様性に寛容になるためには、先ほども言及したような、様々な人と知り合い、個人的なつながりを持つことや自分から旅行などを通してマイノリティになる経験が役に立つ。そうして、同じ共同体を構成するメンバーとして多様性を容認する姿勢を養っていけば良いのだ。

この国際学生フォーラム（の主にシンポジウム）を通して、日本語を学習している親日的な学生の視点からも日本に悪い点があるのではという指摘があり、その他の国々にも改善すべき非はあるのだと判明した。中国の学生が提案してくれたような組織の設立はあくまで理想かも知れないが、学生たちは政治家が動くのを待っているばかりではいられない。これまで出会った海外の人々のつながりを大切にし、海外への個人的なつながりを維持する、ネット上で積極的に対話の機会を設けるなど実現可能なことはたくさんある。個人が世界の問題を自分と結びつけて、自分ごととして行動に移せるならば、少しは世界は変わるのでは無いだろうか。

## グローバルな市民として東アジアの共生に向けてできること

### 1. 国際交流的側面

国同士を超えた学生同士の交流を通して、あらためて心を開いて積極的に話しかけに行くことの大切さを学んだ。例えば話しかけるための特別なトピックが無くても、ファッションのことや日本食のことなど話しやすいトピックで、親しげに自分から話しかけに行くこと、少なくとも話しやすそうな雰囲気を出すことを心がけて10日間過ごした。その甲斐もあって、海外学生全員とコミュニケーションを取れたのは勿論のこと、8割ぐらいの海外参加学生と一日のスケジュールを終えた後、プライベートで遊びに行くことができた。学生たちとコミュニケーションを取る中で、「笑い」を共有できたことがとても嬉しかった。笑いのツボは各国で多少異なるはずだが、これを言ったら盛り上がるだろうなという発言を私が行った際、本当に笑いがとれ、場の雰囲気を楽しくすることができたことには小さな感動を覚えた。

もう一点、海外学生と交流する中で気づいたことは、私自身が無意識に、「あなたの国ではどうなの？」と海外学生に頻繁に聞いていたように、海外学生は自分の国のことをよく知っているはずだという考えの元で、会話を進めていたことである。その際、回答してもらえない際には、なぜ自分の国の文化や制度等について知らないのかと残念な気持ちになった。そして、答えてもらえれば、その情報を大抵は信じてしまっていた。だが一方で、自分が他国を訪れた際、同様の質問をされた場合、私は母語以外の言葉（私の場合は英語のみだが）で日本について正確な情報を伝えることができるだろうか。ニュースを普段から見たうえで日本の状況を客観的に捉え、それを単純化しすぎずに英語で伝えることができるのか考えてみると、私自身まだまだ努力の余地があると言わざるを得ない。

後期から半期オーストラリアに留学するのだが、その前に自分が努力すべき点、今のままで良い点の両方を知れて良かった。

### 2. 言語使用・学習の側面

良かった点は、私自身が、第二言語で日本語を学んでいる人たちに対して、よりわかりやすい日本語を話す努力を休憩中もディスカッション中も、遊んでいるときも行っていたことである。特に、ディスカッションにおいては、専門用語や難しい熟語をいかに全員が分かりやすい言葉に置き換えるかということに頭を使った。バディとの会話も同様であった。私には、アメリカ人のバディと中国人のバディがおり、2人とも意思疎通が難しくなる時があった。アメリカ人のバディとの場合は、私が英語圏に留学に行くため、個人的にはもっと英語を使いたいという気持ちもあり、そのような時には英語を使って話をした。私にとってはそれで問題はなかったが、バディからは「英語ではなく日本語でもう一度話してくれないか」と頼まれることもしばしばあり、日本語を学びたいという本人の意思を尊重し、やさしい日本語で繰り返して話をした。そうすると、彼の場合はすぐに理解をしてくれた。中国人のバディの場合も、やさしい日本語で何度も言い換えるという方法がもっとも意思疎通を簡単にした。彼女の場合は、英語の方が分からず、やさしい日本語を話しながら、同時に紙に言いたいことを書くという方法を使ってコミュニケーションをとった。このように、日本語を話すネイティブの側が意識的に言語のレベルを変えたり、コミュニケーションの手段を増やしたりといった工夫をすることが、当然のことではあるが、より良い意思疎通に不可欠であった。

日本語を学ぶ海外留学生からは、言語を学ぶモチベーションをもらえた。勿論、海外の参加学生の中での言語レベルに差は無かったとは言えないが、第二言語を一から覚え、終始ほとんど日本語でフォーラムに臨んでいたことに感銘を覚えた。このような国際的なイベント時には、公用語として英語が使われることが往々にしてあるが、今回は、政治や歴史を扱う難しいテーマを日本語で話すという難易度の高いことを海外の学生は行ってくれた。彼ら・彼女らが普通に運搬しているように見える日本語の能力も、何千時間もの努力の上に身に付いたことだと考えれば、その努力は敬服に値する。参加してくれた海外学生は、どの方も日本語をよりうまくなろうという強い意志を見せ、今後も継続的に日本語を学ぶと述べていた。私自身も、英語は当然のこと、また別の言語も学ぶ必要があると認識した。

### 3. 学問的学び

フォーラムの開校式で、森山先生がフォーラムの意義を分かりやすく、ご自分の経験を基に話をしてくれたため、私自身も気を引き締めて10日間の行程に参加することができた。参加学生も、ただの遊びではない授業としてフォーラムの目的を再確認することができただろう。講演でも、ともすれば私たちは二元論的に物事を単純化し、理解してしまいがちだが、それを乗り越えることなしには、グローバル化時代において国家間、国民間の倫理的な関係性は作れないということを学んだ。

シンポジウムでは、多角的な視点で東アジアの共生について考えること、信頼関係を持つ友人同士が対面で議論することの重要性を学ぶことができた。参加学生の言語的なレベルのばらつき、東アジア（特に日韓関係

に横たわっている諸問題)に関する知識量の差を考えた時、「慰安婦問題解決のための日韓の学生の協働」というテーマであったら、よりプラクティカルで深い議論ができたかもしれない。だが今回、多文化主義を国策として行うニュージーランド、各国の政治に長年介入してきた、世界のリーダーを標榜するアメリカ、EUを構成する一国として血みどろの幾多の大戦を乗り越えてきたポーランドも日中韓に加えて議論ができたことで、双方の学生にとっても学問的なメリットを得ることができた。東アジア以外の国から来た学生は、自らが関心を持つ日本という国が抱えている東アジアにおける諸課題について議論しながら、その地域の共生について考える機会を得、東アジアに属する学生たちは、日中韓の外側の別の国の成功事例や思考を提供してもらうことで、新たな見方を獲得した。無論、同質性がEU圏内の国よりも少なく、移民に対して寛容でない東アジアの現実、また戦後責任についての日本側の不誠実な対応等を踏まえると、EUの事例や、「過去の問題と現代の政治を切り離すべき」というポーランド学生から出た意見をそのまま受け入れるのは乱暴である。だが、なぜポーランド学生がそう考えるのか、なぜEUが必要とされたのかという背景を共に考えることは、非常に示唆的であった。

次に、信頼関係を持つ友人同士が対面して対話する重要性について述べる。特に、慰安婦問題や歴史教科書の記述、靖国神社参拝について韓国人の学生と私で話をしたときに醸成された緊張感を感じた際にそのように思った。私にとってその緊張感は、有意義な対話のために不可欠であり、心地の良い物であった。なぜなら、その緊張感は、自分の大切な友人をできる限り傷つけない表現を選びながらも、相手との間に存在する壁を乗り越え、より親しくなるために、相手を不快にさせる意見をあえて言うために生まれたからである。相手との友好関係を維持、強化するためにあえてタブー視されている事柄を扱うと両義的な状況は、これを言ってもきっと友情関係が壊れないだろうと信じられるような相手との信頼関係が無ければ、乗り越えることが難しい。顔の見えない不特定の相手に対して、オンライン上で向けられている、日韓の間に横たわる政治的・歴史的な問題を扱った発言を見てみれば明白だろう。そこには、私が上記で述べた心地の良い緊張感は存在せず、ただ相手への怒りと自分の意見を絶対視する思いがつつられているだけであろう。この意味で、シンポジウムが初日や2日目というお互い交流ができておらず、相手を理解したいと思う衝動が少ない時期ではなく、共にツアーに参加したり、プライベートで遊んだりした5日目に行われた意義は大きいと言える。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

まずフォーラムの良かった点としては、フレンドリーな雰囲気の中、全員がバディやバディ以外の人と楽しい時間を共有することができたことである。その理由としては、歓迎会・ツアーをはじめとする海外学生と親しくなるために練りに練られた企画に加え、全体の雰囲気がオープンであったことがあげられると思う。特に韓国から来た学生らは大変人懐っこく、気軽に声をかけてくれた。彼らのおかげで国を超えた交流が容易になったように思う。もう一点は、シンポジウムにおける各大学の発表と質疑応答である。どの大学も、自らのバックグラウンドから興味深い意見、提案を発表してくれた。特に印象深かったのは、ポーランドからの学生が発表時や個人的に意見を問われた際に、繰り返し「ポーランドは戦時中に多くの大変な目に合い、凄惨な歴史を抱えている。だが、過去は過去のこととしてそれを現在の政治や国民感情には反映しないような政策をとっている。過去の出来事と現在の出来事は別個のものとして捉えるべき」と話をしてきたことだ。この考えを、今なお対立が根強くある日本・中国・韓国など東アジアの共生のために提言したのである。この提案は、ポーランドの歴史や政治を学んだ彼女らの立場から生まれたものであり、東アジアの共生のために相応しいものは置いて、彼女たちだからこそ言えたという意味で、貴重であった。また、韓国の学生が「韓国国内における日本との和解を妨げる要因」について批判的な発言をしてくれたことも、非常に価値あることであった。なぜなら、韓国側にも問題点があるにしても、韓国人と同じテーブルについて、話し合いをする際には、日本人としての私は、それに触れる前に、日本側が抱える多くの課題について思考しなければならないと思うからだ。ゆえに、私自身が思っても言いにくい韓国側の課題を韓国人の学生が詳しく述べてくれたことは、重要であったのだ。このような中身の濃い発表があったため、その直後の質疑応答では、予定していた時間を超えるほど盛り上がっていた。

一方で、フォーラムの改善点は、英語の資料を作ったり、英語と日本語の両方を資料に載せたりといった試みはあったものの、それでも日本語が中心となってしまったがゆえに、講演や議論についていけない学生が少なくなかったことである。具体的には、基調講演における小松裕子先生の講演や、シンポジウムの締めめのディスカッションでは、英語や易しい日本語の利用といった配慮が十分でなく、そのために学びの時間を有意義に使えなかったという意見が耳に入っている。今回の10日間のイベントは、勿論交流を深めるための観光的な側面もあるが、やはりメインは「東アジアの共生」について思考を深めることである。ならばやはり、日本語がまだ不十分な学生への配慮は、多少、手間と時間がかかってもさらに行うべきだったと考える。もし配慮がよりできていたのなら、ディスカッション後に、全員が「今後個人として何をしていきたいか」と問われていた際に、具体的で中身の濃い発言ができたのではないだろうか。また、東アジアの共生について議論をする際に不可避免的に出てくるだろう慰安婦や靖国神社参拝について、参加した学生全員が簡単にでも知識を得てお

く必要があったようにも思う。それがより深い議論には不可欠であったと今では振り返って思う。

## 5. その他（特になし）

## 6. 東アジア・世界がともに生きることについて

私が東アジア・世界がともに生きることについて学んだことをいくつか記し、その後、レポートの締めくくりとして、今後私が具体的に何をしていくのか宣言したい。

まず、東アジアの共生のために不可欠であるとフォーラムを通じて私が考えた 2 つの事柄について述べたい。1 つ目は、自国や自らの会社の利益のために動きやすい国内メディアの情報に流されないように、多言語でニュースを読み解く言語能力を身に付ける重要性である。韓国の学生の 1 人が、韓日関係を刺激するニュースが韓国で目に入った際には、すぐに日本語で同じ問題を扱うニュースを確認していると話していたり、ポーランドの学生が EU の方針の元、自国の教育機関で二カ国以上の言語を学んだことを生かして、多言語で情報にアクセスしていると話していたりした際に、羨ましさを感じた。東アジアの共生に向けて市民としてアクションを起こしていくためには、言うまでもなく、韓国語や中国語などの習得が必要であるが、まずは私が勉強に励んでいる英語で、BBC や CNN などの他国のニュースチャンネルを使って東アジアのニュースを調べていきたいと思う。2 つ目は、同徳女子大の学生が提言していたように「慰安婦問題を政治問題化しすぎない」という点である。たしかに、慰安婦問題の解決には、日韓政府の協働の利害の元、方針を一致させることが重要である。その意味で、慰安婦問題が政治問題であることには議論の余地がない。だが、その一方で、人権問題であり、私たちの問題だという意識は弱いように思う。日本において慰安婦問題が「大日本帝国の軍部によって、元慰安婦の人権が著しく傷つけられた人権問題」として十分認識されているとは言い難い。例えば、核兵器の廃絶という言葉が聞けば、真っ先に広島・長崎の被爆者が思い浮かぶ日本人が多数いることは対照的に、慰安婦に関しては、「日本政府と韓国政府の間の難しい話」とであると考えてしまう日本人は少なくないだろう。事実、日韓での和解を希求しながら、「日本において進行している戦時中に行った東アジア諸国での加害に対する忘却」に関心を持ち、慰安婦問題を調べている私自身も、シンポジウム参加前までは、慰安婦問題を政治的に捉えていた。

世界が共に生きるために、私が必要だと思うことは、EU のような共同体や、多文化共生を理想論として終わらせるのではなく、希望を持ってそこから何か学び取ろうとする姿勢である。今回のシンポジウムで得た情報だけで満足するのではなく、私自身がより詳しく貪欲に学んでいくことが求められている。

私は今回のシンポジウムでの学びを実践に移すために、3 つのことを主に行いたいと思う。

1 つ目が、先ほども記したように、言語の学習に献身し、メディアからの情報のバイアスを最小化することである。2 つ目が、今回のフォーラムに参加した日本人学生とナムムの家実際に訪れることである。たとえ元慰安婦に直接会えなくとも、彼らの経験を少しでも学ぶために、自らの足でフィールドに赴きたいのである。慰安婦問題を人権問題として捉えることの重要性を示す根拠として、同徳女子大学の学生はナムムの家を訪れた日本人学生の感想をとりあげていた。そこで、韓国の学生にナムムの家に行こうとしていることを話したところ、ぜひ一緒に行きたいというメッセージをもらうことができた。このメッセージをもらった時、心からこのフォーラムに参加したことに喜びを抱いた。現地でまた小さなフォーラムの続きができれば、これ以上に嬉しいことはない。このように、フォーラム終了後も、そこで得た学びと友情を継続させていくための取り組みを行っていかねばと思う。それがこの授業に参加できたことへの感謝を示す方法の 1 つであると思う。3 つ目が、現在所属している国際関係論のゼミで EU について調べたり、8 月から半期の留学を行うオーストラリアのシドニーで多文化共生の雰囲気と課題について学んだりすることである。今後も、主体的に学びを続けていきたいと思う。

## 世界・東アジアがともに生きるために ～私たちから行動しよう～

### 1. 国際的交流的側面

今回のフォーラムでは、韓国、中国、ポーランド、アメリカ、ニュージーランドの学生と10日間を共に過ごし、友好的な交流をすることができた。私はこれまでも、韓国や中国などのアジアの学生とはなじみがあった。なぜなら、お茶大の授業などを通して、話す機会が比較的多くあったからだ。しかし、ポーランドやアメリカ、ニュージーランドなどのアジア圏以外の学生と交流する機会はあまりなかった。そのため、今回のフォーラムは、私にとって新たな国際交流経験となった。そして、この交流の機会は、「東アジアの共生のために話し合う」という堅苦しい目的だけではなく、様々な国の留学生と友達になり、楽しい時間を共有し、心通う交流するという目的も達成することができた。

私は、フォーラムが始まる前、韓国の釜山外国語大学の学生のバディになりたいと申請した。なぜなら、私は昨年の夏に釜山外国語大学で韓国語を学び、日本語教育実習を行った経験があったからだ。自分の釜山での経験をバディの学生と共有したい、また、韓国についてさらに深く知りたいと思い、このような希望を出した。フォーラム期間中、私は目標通り、バディと密度の濃い交流をすることができた。フォーラム中は、ほとんどの時間をバディと行動を共にし、たくさんのお話を話した。大学生の生活、勉強、就職活動の方法、遊びに行くところ、食べ物を日本と韓国で比べ、その違いを見つけることを楽しんだ。私は、バディとの交流を通して、韓国の知らなかった一面について新たに知ることができた。

バディとの密度の濃い交流ができた一方で、私自身の国際交流の範囲がまだ狭い範囲でしかできていないことにも気が付かされた。私は、韓国の言語や文化についてある程度知っているため、交流の場面でよく話しかけたのは韓国人の学生になってしまった。しかし、他の国の学生に対しては、何を話題にすればいいのか、どのように接すればいいのか少し戸惑ってしまった。留学生が近くにいても、話しかける勇気が持てず、もどかしい思いをした。結局、日本の学生が話しかけている隣で、その話を聞いているだけの存在になってしまうことが多かった。本心では、様々な国の学生と友達になりたかったが、積極的に働き掛けることができなかったことを少し後悔している。私が積極的に話しかけることができなかった原因を、フォーラム後に自分なりに分析した。最も大きな原因は、私自身の「国際交流はこうあるべきである」という一種の思い込みがあったからである。その思い込みとは、国際交流をする際は、相手の文化について話題にするべきだというものである。私は、相手が〇〇人だということに目を向けて、相手の国の文化にばかり注目してしまい、狭い視点でしか相手を見ることしかできていなかった。そして、自分の知識が相手と共有するに値するかということばかり考えてしまった。つまり、相手を自分と同じくらいの年齢の学生として見つめ、深く知ろうとすることができていなかったのである。今回の反省から、今後国際交流の場では、日本人と友達になるときと同じように、相手に対して「知りたい」という思いを持って話しかけていきたいと思った。例えば、相手の家族について、趣味について、勉強していることについて、好きな食べ物について深く聞いてみるなど、相手に関心を持ってさまざまな会話ができればいいだろう。まずは、その人自身についてよく知り、そのうえで相手の国の文化についても理解していくことが積極的な交流につながるのではないかと考えた。

また、今回のフォーラムでは、自分自身が日本のホスト役になったことで、相手に自文化を紹介しなければならぬ立場になる経験ができた。留学生が日本や東京について疑問を持っていることに答えることの難しさや、東京の良さを紹介することの難しさを実感した。普段当たり前前に生活しているからこそ、東京の魅力などを改めて聞かれると、うまく答えることができず、はっとさせられることが多かった。ここでは、特にはっとさせられた具体的な体験を2つ述べていきたい。

1つ目は、バディに「東京で今流行っているものは何？」と聞かれたときである。予想外の質問であったし、普段あまり意識していなかったもので、すぐには答えられなかった。迷った末「タピオカとか、クレープとかかな…」と答えたが、それが正しい答えなのかわからなかった。2つ目は、留学生と日本人のグループで、原宿に遊びに行ったときのことである。原宿は、日本の若者文化を体感できる街というイメージから、一緒に歩くだけで楽しんでもらえるのではないかと考えた。そして、私たちは実際に原宿に行き、竹下通りを一緒に歩いた。竹下通りを一通り見て、確かに楽しかったが、お店がたくさんあるだけで、面白く日本文化を紹介することができたという満足感はあまり得られなかった。人がたくさんいること、派手な服装をした若者が歩いていることに、留学生は驚いてはくれていた。原宿で珍しいものを見たという経験が、留学生にとって楽しい思い出となってきていたら幸いだが、私自身、もう少し準備をして迎えた方が良かったと思った。

今回のフォーラムでの「ホスト役」としての自分の役割を評価すると、準備不足であったと言わざるを得ない。フォーラム前は、自分は日本人として留学生の質問に答えればそれで十分だと思っていた。しかし、それだけでは文化交流として不十分だ。なぜなら、自分の国の文化をうまく説明できないままでは、他の国の文化を相対的に理解することができないからだ。ホスト国として、自分の国について説明できるようにし



ておくことは、友達を自分の家に呼ぶときに準備することと同じようなことだと思う。自分が普段生活している家に招くときでさえも、友達のために何かしら準備をするのが普通だ。何のお菓子を出すか、何を一緒に過ごすかを考えておくように、日本のホスト役として準備をしておくべきだったと思う。

## 2. 言語使用・学習の側面

私は、昨年4月から1年弱、韓国語を学んできた。その結果、簡単な韓国語のやりとりや文章の作成ができるようになった。今回のフォーラムでは私は、バディと韓国語を使つての交流もしたいと考えていた。実際に、フォーラムのバディが決まって、こちらから初めての連絡をするとき、私は日本語、韓国語、英語の3言語でメールの本文を作成した。日本語に加え、今まで自分が学んできた言語を駆使してやりとりをしていくことにわくわくした。そこから数回のやり取りを通して、私のバディは、大学時代に日本に1年間留学して、日本語のスピーキングを身に着けたが、日本語の読み書きは苦手だということを知った。そして、私自身は、韓国語で複雑なことを伝えるほどの能力がなかった。このような双方の言語能力の事情により、フォーラム前のラインでのやりとりは、日本語や韓国語ではなく、英語で行っていた。そのため、バディに会うまでは、「韓国人」のバディとやりとりをしているという感覚はほとんどなかった。相手に伝えたい情報を正確に伝える、という点では、私たちにとって英語が一番便利な「手段」だったと言える。

バディが来日した日、私達は東京駅で待ち合わせをした。初めて会ったとき、「お茶の水女子大学の学生ですか。」と話しかけられ、なんと挨拶をすればいいのか少し戸惑った。今まで英語でやりとりをしていたので、“Hello.”と声をかけたが、「日本語でいいよ」と流ちょうな日本語で話してくれたので、少し驚いた。フォーラムが始まってからは、バディは私が話す日本語をよく理解し、彼女自身も日本語を使いこなしていた。そのため、私はバディが日本語を話してくれることに甘えすぎてしまった。バディと私は、韓国語についての話題に良く振れたが、韓国語で積極的に話すことまではできなかった。相手が日本語を話してくれるという安心感から、自分から韓国語を積極的に使っていこうという勇気を出すことができなかった。

一方で、フォーラムが始まった後は、ライン上ではお互いの言語を積極的に使うようになった。バディは日本語で、私はそれに対して韓国語で答えるなど、簡単なやりとりを互いの言語で行うようになった。バディから、英語のやり取りの合間に日本語のメッセージが送られてきたとき、私は嬉しかった。少しずつでも互いの言語を使うことが、お互いを尊重しあえているという実感になっているのだと感じた。

フォーラム期間は、日本の大学で開催されたということもあり、日本語が主に使用されていた。そのため、日本人学生にとっては「外国語学習になった」という印象はあまりなかったように思う。しかし、留学生との交流が、今後の外国語学習の大きなモチベーションにつながったことは確かである。フォーラム全体を通して、私は海外の学生の語学力の高さに圧倒されることが多かった。私自身今まで、たくさんの外国語教育を受けてきたが、どうしても外国語のスピーキングに抵抗感や難しさを感じてしまっていた。しかし、留学生は日本語を堂々と、そして流ちょうに、自分の言葉として日本語を使いこなしている姿がとても印象的だった。

## 3. 学問的学び

シンポジウムでは、さまざまな国の学生が、東アジアや世界での共生を目指し、自分たちにできることは何か、主体的に考えた成果を発表した。東アジア以外の学生以外にも、ニュージーランド、ポーランド、アメリカの学生から、東アジアでの共生の実現のために提案をしてくれたことはとても大きな学びになった。

例えば、ニュージーランドの発表からは、多文化主義国家として具体的に行っていることを学ぶことができた。ニュージーランドでは他の民族の文化を学ぶための教育や、文化を紹介する祭の開催、言語支援など、さまざまな多文化共生のための実践を行っている。日本でも、このようなニュージーランドの多文化主義政策を前向きに吸収していかなければならないと感じた。以前、お茶大の他の授業で、外務省入管局の職員が、「日本は、現時点では移民国家になることは現実的ではない」とおっしゃっていた。その最も大きな原因は、言語である。日本語はアジア圏の言語とは親和性が高いが、その他の地域の言葉とは大きく異なる点が多く、移民が習得するまでに膨大な資金や労力がかかるからだそうだ。確かに、ニュージーランドと日本では、移民や異文化の受け入れについての歴史的背景が大きく異なり、ニュージーランドで実現できたことを日本がそのまま応用できるわけではないだろう。しかし、ルーツが違う者同士でも、積極的に理解し合おうと努力することが大切であるのだと思う。

ポーランドの発表では、「過去の戦争や争いは現在の国際情勢に影響を与えるべきではない。」という主張に共感した。現在の東アジアでは、過去の対立や争いを解決できておらず、それが国際情勢に影響を与えてしまっている状況である。しかし、私たちは、過去の戦争や争いが国際情勢に影響を与えないために、過去の争いを「なかったこと」にはしてはいけない。韓国の同徳女子大学の発表にあったように、過去の対立や争いを「人権問題」として捉え、加害国は、被害者に共感し謝罪する必要がある。このように、過去の対立を解決したうえで、現在の国際関係を構築していくべきだろう。そのうえで、同徳女子大や釜山外国語大学の

発表にあったように、現在東アジアや世界で起きている環境問題について解決しようと努力し、次世代のために平和で持続可能な地球を作り上げていく必要があるのだと考える。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

このフォーラムでは、10日間という短い期間であったが、東アジアや世界の共生につながる1歩につながったと言える。その理由は2つ挙げられる。1つ目は、国境の壁を越えて、多くの学生と朗らかに楽しく過ごせたからである。初日の歓迎会では、互いに緊張してまだぎこちなさが残っていたが、最終日の送別会では、全体の雰囲気が朗らかで温かいものへと大きく変わった。最終日の送別会では、思い出を付箋に綴り、ホワイトボードに貼る作業をした。全員が思い出を楽しく振り返り、最後にはホワイトボードがカラフルな付箋でいっぱいになった。そして、10日間の楽しい日々が終わってしまうことを寂しく思った。このような国境を超えた楽しい時間を共に過ごしたことで、私たちはフォーラムが終わった後も連絡を取りあうことができるような仲になった。また、互いの国に遊びに行き、再び会うことができるだろう。私たちは、何か困ったときは互いに助け合えるような、国を超えたつながりを作ることができた。これが、ともに生きることの第一歩につながるだろう。2つ目は、楽しい時間を共有するだけではなく、今世界にある問題に目を向け、前向きに活動していこうという意識を共有できたからである。普段の学生生活の中で、世界がともに生きるために国境を越えて協力したいと思っても、行動に移すことはなかなかできない。なぜなら、世界や東アジアでともに生きることの重要性を認識している仲間を集め、平和への一歩を踏み出すには大きなエネルギーが必要だからである。しかし、今回のフォーラムを通して、私たちは互いに「ともに生きていきたい」という思いを共有することができた。そして、具体的な解決策も考え、互いに意見交換することができた。この経験から、私たちは同じ志を持つ仲間がいることを確認することができた。このフォーラムで意見交換をした仲間や共有できた意見は、今後の東アジアや世界の共生のために動き出すための力になるだろう。今後、このフォーラムでできた仲間を今後も大切にして、そして具体的な行動に移すことこそが重要になっていくだろう。

次に、フォーラムの次回に向けての改善点について述べたいと思う。1つ目は、フォーラムでの主要言語が日本語であったということだ。使われる言語が多くが日本語であったことは、来年度以降改善すべきだろう。フォーラム参加者は全員、日本語ができる程度であるという前提のもと、フォーラム中に行われたシンポジウムや連絡では、日本語が主に用いられていた。しかし私のバディは、フォーラムの募集が、「日本語と英語を用いる」ということを聞いて応募したそうで、思ったより英語を使う機会がなかったと言っていた。このことを聞いたとき、留学生の日本語のレベルがどの程度か、日本語学習者にとって、言語学習に最適な内容になっているかまではあまり考慮されていないように感じた。例えば、私のバディは、日本語で日常会話はできるが、読み書きや複雑な話題について話すことがあまりできないというレベルだった。そのため、フォーラム全体でわからないことが多かったという。これは、言語の問題を乗り越えるために、お互いに助けあえることのきっかけにはなったが、留学生がこのフォーラムの目的を十分に達成することにはつながらないだろう。このフォーラムは、政治問題などの複雑な事項を本音で話し合うことが大きな目的だった。お互いの本音で話し合うには、互いの話す言葉を十分に理解したうえで、相手の考えを理解しなければならない。このことから、シンポジウムのときは特に、通訳は必須だったのではないかと考えた。すべての言葉を通訳するのは2倍の時間がかかってしまうので、発表言語は日本語、パワーポイントは英語など、聞くか読むかのどちらかで理解できるような工夫をもっと行うべきだと思った。そして、質疑応答などについては、すべて通訳を付けるべきだと思った。来年度からは、通訳の係があってもいいかもしれない。また、日本語表記だけの配布物や連絡が多かったことは問題であると感じた。例えば、ライングループの連絡はほとんど日本語で行われていた。私のバディは漢字が苦手なので、いつも読んでいなかったと言っていた。重要な連絡は、私自身も言葉で確認するようにしていたが、あらゆる連絡や発言を日本語と英語の2言語で行うことを徹底すべきだと感じた。これは、留学生への配慮という役割だけでなく、日本人の学生自身の英語力も向上するのに役立つだろう。

2つ目は、フォーラムに参加するにあたって、私自身も含め、参加者の心構えの共有が不十分であったように思う。10月から、フォーラム参加メンバーは定期的集まり、準備を進めていたが、各自の仕事の進捗状況を確認することだけが集まる目的となってしまう。フォーラムのイベントがそれぞれどのような目的を持っているのか、どのような思いを込めて計画を立てたのか、フォーラム開始までに共有する機会があってもよかったのではないだろうか。例えば、ツアーの計画してくれたメンバーがどのような意図でツアー場所を決めたのかなどを共有することができていれば、日本人もホスト役として案内する準備がしやすかったのではないかと感じる。また、フォーラム中に日本人参加者の遅刻が多かったことが気になった。スタディーツアーや日本体験ツアーで集合時間があるのにもかかわらず、連絡をせずに遅刻をする学生が少なかつた。留学生は、いつも時間までに集合しており、よく待たされることになってしまっていた。海外では、日本人は「時間に厳しい」というイメージを持たれているという話をよく聞く。私は、そのイメージを

守らなければならないという義務があると考えているわけではない。日本人の友達同士ならば遅刻はよくあることだからだ。確かに、国際フォーラムで日本学生と留学生は互いに友人になることができた。友人ならば少しの遅刻はあっていいと思うかもしれない。しかし、日本学生は、留学生と友人であると同時に、日本のホスト役でもある。このホスト役としての意識が少し足りなかったように思う。大学主催のフォーラムという行事の中で、日本側で集合時間を公的に決め、留学生に守るように示していた。留学生に集合時間を示したのならば、その責任として、少なくともホスト役である日本人は時間を守るべきだったのではないかと思った。

## 5. 東アジア・世界がともに生きることについて

先日日経新聞で、日本人への主要国・地域への友好意識調査についての記事を読んだ。北朝鮮について「嫌い」と答えた人は、「どちらかと言えば嫌い」と答えた人を含め84パーセント、中国については76パーセント、韓国については61パーセントだった。これらの国と日本は、地理的に近い関係にあるのにもかかわらず、互いに好意的であるとは言えない。それは、歴史認識の問題があったり、外交関係があまり良好ではなかったりする現状があるからだという。確かに、この結果と分析は現在の世論を表しているのだろうが、記事を見て、フォーラムの参加国の学生を思い出し、悲しい気持ちになった。この世論調査に回答した人の多くは、北朝鮮や中国、韓国の人と交流したことがないまま、イメージで回答しているのだろう。少なくとも、私は現在、中国や韓国に対してマイナスイメージは持っていない。それは、これまでの交流を通して、それぞれの国の学生とともに話し合い、理解し合った経験があるからである。しかし、私自身も現在、北朝鮮に対してはあまり良い印象を抱いていない。なぜなら、北朝鮮については知らないことが多いからである。ニュースなどのメディアで報じられる北朝鮮は、核ミサイルの開発など恐怖を与える存在である。私たちは、メディアの受動的な情報収集だけでは、根拠が少ないまま、相手に対して負のイメージや偏見を持ってしまわないだろうか。マスメディアによる受動的な情報収集だけではなく、北朝鮮の核ミサイルの開発を行わなければならない事情を主体的に理解しようとする中で、北朝鮮に対しての印象が変わるかもしれない。また、北朝鮮に暮らす国民がどのような暮らしをしており、どのような考えを持っているのかについてももっと知っていくべきではないだろうか。このように、無知による偏見や負の感情をなくし、互いに共感することが共生のための大きな力になるに違いない。

これを実現するには、まず、東アジア地域のすべての人が、互いの人権を尊重し、現在起こっている問題を解決していこうという共通認識を持たなければならない。例えば、現在はグローバル化が進んでおり、様々な事情により日本国内に移住する外国人が増えてきている。2019年4月からは改正入管法が施行され、さらに外国人の人数が増えるだろう。そうした状況下で、日本人と地域に住む外国人は、職場、学校、地域コミュニティにおいて、互いに協力しなければならない。互いの人権を守るために、賃金格差をなくしたり、災害が起こったときは協力し合って命を守らなければならない。グローバル社会になりつつある日本で、東アジア地域の対立を超え、互いに協力し合わなければいけないことは明白であろう。

そのためには、現在の東アジアの対立の原因を見つめなおす必要がある。そしてそこには、東アジアの過去の対立があるだろう。現在の国家レベルでの東アジアの対立は、過去の条約によって、「解決した」とされているものも多い。しかし、条約で解決したとされている問題であっても、互いに納得できていないからこそ、現在の対立を生んでいるのである。このように、現在まで対立を生んでいる条約に固執し、それを解決の根拠とする価値があると本当に言えるのだろうか。過去に結んだ条約は、その当時の考えに基づいたもので、それが絶対的に正しいとは言えない。過去に「条約を結び、解決した」という理由で、現在の対立を取るに足らないものとするのは、現在の相手の考えを無視した一方的な主張である。相手国の言い分を聞き、改めて互いが納得できるまで話し合うべきだ。しかし、このような国家同士の対立は、個人である私たちが働きかけて解決できることではない。

それでは、私たちは個人としてどのように行動すればよいのだろうか。それは、東アジア人としての他国に対する責任を持ち、常に東アジアの他国について知ろうとする努力をすることだ。私たちは、メディアで取り上げられる東アジアの国が抱える対立や問題を、自分たち自身の問題として捉えなければならない。そして、互いの言語を学び、各国のメディアを比較し、互いの考え方を理解することが偏見をなくしていくことにつながるだろう。また、東アジア地域の人同士の文化交流を積極的に行っていくことが必要だ。現在でも、日本、中国、韓国の3国は地理的に近いことから、互いの料理や建築・美術、音楽などの分野では、文化交流が盛んである。しかし、それらの交流は文化だけであり、人同士の交流自体はそこまで活発ではない。今後は現在盛んにおこなわれている文化交流を利用し、人同士の交流を盛んにしていきたい。

そして、これらの行動を先頭に立って、行っていくべきなのは、フォーラムに参加した私たちである。私たちは、平和な東アジアを、そして世界を築いていきたいという共通意識と、それを実現するためのアイデアを一人ひとりが持っている。私たちが意識的に活動が続ければ、そこから大きな変化をもたらす可能性が十分にある。まずは、フォーラムに参加した私たちがこれらを実践して、考えを家族や友達と共有してい

たい。そして私たちの周りから、人々の東アジアの国々への考え方を少しずつ変えていき、「ともに生きる」ことを広めていきたい。

## 6. 結びに

この場をお借りして、今回のフォーラムを開催してくださった森山先生を始めとし、講演をしてくださった大学の先生方、サポートをしてくださった国際センターの井上さんや長塚さん、そしてフォーラム参加者の皆さまに感謝を述べたいと思います。ありがとうございました。

### <参考文献>

『周辺国への好感度低く 中国「嫌い」7割 本社郵送世論調査』、日本経済新聞、2019-1-21、日本経済新聞電子版（最終閲覧 2019-2-24）

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ040237280Q9A120C1905M00/>

## 理解から尊重へ

### 1. 国際的交流的側面

バディ制度が大変良い経験になった。LINEでの挨拶からドキドキしながら東京駅にお迎えに行った初対面と、どうしようも無い名残惜しさに駆られたお別れは、終わってしばらく経った今でも忘れられない。短い限られた時間ではあったが、最終日の夜には、食事をしながらお互いの将来について語り合えるほど仲が深まったことを大変嬉しく思っている。また、10日間、一緒にご飯を食べたり、講義を受けたり、ディスカッションをしたり、ツアーに参加したり、放課後遊びに行ったりと、一緒に過ごし色々な話をすればするほど、バディの母国である韓国に対する興味も自然と深まっていった。韓流ドラマやアイドルにもあまり詳しくない私が、韓国への興味をここまで高めていることに自分でも驚いている。このつながりを大切にしていきたいし、韓国へ近い将来必ず会いに行きたい。

今回の国際フォーラムでは、人と人としての交流の中で、自然と世界に目が向けられたような気がした。また、そういった国際交流を通して、より広いグローバルな視点で物事を考えることができるきっかけになった。今回の実習を通してできた世界との繋がりをこれからは絶やすことなく、互いを知り、互いの国を知っていきながらこの交流を続けていくことがお互いの国の尊重にもつながるだろう。私たちにできることは交流のなかで、相手への理解から尊重へと発展させていくことである。この発展は、人として接していく中で自然に怒るものであることもフォーラムでの交流で体験できた。国際交流を通して相手に対するポジティブな捉え方のシフトが可能であるのだ。未来のより良い東アジア関係、そしてもっと広いスケールでの国際関係を築いていくために、個人レベルでの国際交流の場をもっともっと増やして共生実現のために活用すべきであると考えている。

### 2. 言語使用・学習の側面

まず言語使用について。発表やディスカッションの多言語な空間が日常とは少し違ってとても新鮮だった。もっと大学の普通の授業でもこのような環境があったらいいのと思った。(例えば留学生とお茶大生と一緒に授業を受ける国際交流や多文化共生の授業などにおける講義やグループワークにおいて)韓国語やポーランド語で、「お腹が空いた」「寒い」「ありがとう」などなどちょっとした単語を教えてもらう時間がとても楽しかった。少し単語を教えてもらって使えるようになるだけで、グッと心の距離が縮まったような気がしたからだ。そして、各国の学生が積極的に日本語を話してくれていることに尊敬の意を覚えたとともに、自分が英語や日本語でしか返せないことにもどかしさを感じた。

また、言語学習に関してヴァッサー大学の発表で、外国語を学ぶとその言葉での思考回路にシフトすることができる、言語学習の重要性を示してくださったが、まさに外国語を学ぶことは自分の凝り固まった狭い視野を広げてくれる最も身近なツールであることを改めて認識した。翻訳も検索したらすぐにできてしまう今だからこそ、新しい言語を学んで自分のものにするには、国を超えることができる様々な可能性があると感じている。完璧に話せることをゴールにしようとしたり難しそうと躊躇せず、様々な言語をかじってみようと思えるようになった。

### 3. 学問的学び

講演では山本先生の「ともに生きる」の定義が印象的だった。「お互いに、相手がいなければできなかった形で何かを達成すること」。東アジアの共生をテーマに発表準備を進めていく中で、メンバーと議論を深めなかなか納得いく答えが出せなかった点だったので、山本先生の定義を聞いて、なるほどと思った。東アジア人としてのアイデンティティを持てたとして、果たしてそれが「ともに生きる」ことに直結するのかが疑問だったからである。その上で、一緒に何か達成して、お互いが必要不可欠な存在であるという認識が必要になってくるのだろう。それは実施したアンケート結果にも明確に現れていたが、やはり東アジア人としてのアイデンティティやつながりが希薄であることを改めて認識した。この認識が薄いことに加え、何かと一緒に達成する経験が少ないので、「ともに生きている」感覚が得られないのだ。国際フォーラムのような場で何か一緒に達成するという成功経験を積み重ねていくことが個人レベルで、共生実現のためにできることなのだと考える。

シンポジウムでは各国の特色が出た発表で大変勉強になったし、東アジアの共生についてそれぞれの国が熱心に考えてきたということがひしひしと伝わってきた。中でも印象的だったのがアジア圏外であるニュージーランド、アメリカ、そしてポーランドの発表である。自らの国の歴史や生活環境での経験を紹介しながら、東アジアがいかにして対立を乗り越えて共に生きることができると提案してくださった姿に感動した。そして東アジアの国の発表も共生への道が遠く無いと思えるような前向きな発表で希望が持てるような内容であった。世界の様々な考え方をきく中で、国一つ一つ、そして人間一人一人違いがあるのは当たり前

であり、共生のために必要なものと気づかされた。その違いがあることで、多様な物の捉え方が生まれ、それらを上手に組み合わせることで、世界中の人々が納得して、共生できる世の中を作りあげていけると考える。

そして、今回のフォーラムにおいて担当した発表が印象に残っている。発表準備で、これほど東アジアの現状や問題点について考えたことがなかった上に、答えがないテーマであるからこそ、つまづくことも多々あった。様々な文献を読みながら、一緒に担当した2人と夜遅くまで頭を抱えながら、真剣に共生についてたくさん考えて話し合った時間はフォーラムにおいてもっとも印象深いことの一つである。また、発表前に森山先生と山本先生からアドバイスやフィードバックをいただいたことも大変良い経験になった。1、2年生の他の授業では先生から個別でこんなにもしっかりアドバイスいただけることはなかなかなかったからである。卒論を考える上でも、こういった経験ができたことが大変ありがたく思っている。そして、英語で発表したこと、また共生について深く考えたことは、自分にとって自信につながった。フォーラムという国際的な場で発表させていただいた経験は今後の将来の糧になると確信している。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

よかった点としては、バディ制度やツアー、ディスカッションなどを通して他国の学生と密に交流できる時間が多かったことである。そして実際に集まるとともに過ごすことで、行動をともにして楽しみながらも、時には国家間が抱える難しい問題と一緒に頭を抱え、何ができるのかをそれぞれの視点からシェアして話し合うことができた。また、先生方や国際教育センターの方々の手厚いサポートが大変ありがたく、LINEなどで気になったことはすぐに相談できたのがよかった。

改善点としては、3つあげたい。まず1点目に発表に関してであるが、事前準備の段階で、参加する日本人同士でも発表内容についてディスカッションする場がほしかった。担当になった3人で準備をすることで集まりやすく、話し合いが進めやすいという利点ももちろんあるのだが、発表者3人だけの提唱になってしまった。漠然とした大きな難しいテーマのなかで、つまずいてしまう場面もあったので、他の人の意見を積極的に取り入れたり、もしくは準備したものを担当外の前で発表し、意見をもらう機会を増やすことで、シンポジウムでの発表内容も濃いものに、またディスカッションにおいてももっと深い議論ができたかと思う。2点目に他担当の情報共有（特にツアーと送別会）がもっとあればよかったと思う。小さいことではあるのだが、送別会でのバディへのお土産であらかじめ買っていたクリアファイルと被ってしまい、対応に焦ってしまった。サプライズ要素があるのは日本側の参加者にとっても楽しいことではあるのだが、必要になりそうな情報はあらかじめ共有してもらえると心構えができて担当外の人にも積極的に動けると感じた。3つ目に、交流する学生が固定化してしまいがちだったことである。10日間という短い時間は全ての人と交流するには足りなかったため、プログラムの中でもっと「ごちゃまぜ」になれるような機会が欲しかった。特にディスカッションに関しては、したりない！と思えるほど内容の濃い前向きな議論ができたので、もっともっと議論がしたかったと感じた。シンポジウムだけでなく、基調講演の際にもみんなでディスカッションができると、学びをアウトプットしつつ意見をシェアでき、輪も広がると思う。

#### 5. 東アジア・世界がともに生きることについて

私たち一人一人がいつまでも国や政府の問題に目をそむけていては、本当の意味で東アジアが近づく日はいつまで経っても来ないだろう。ともに生きることを政府レベルの外交にばかり頼ってはいけない。私たち個人が東アジアや世界の歴史を学び、事実を知り、そしてそのことについて深く考える努力をしなければならぬと改めて感じた。一見大きすぎる問題で、自分たち国民にできることはないように思える。しかしこのフォーラムで、その国の人が好きだから、その国の人と友達だから、という単純なことが、社会問題に対する危機感を感じるきっかけになるということを体感した。

フォーラムという環境が恵まれていることに終わってから改めて感じている。それは、互いを理解するだけでなく、理解の発展としての相手の「尊重」が実現した環境であったからだ。尊重するということは、相手を理解した上で関わり・つながりを築いていくことである。最終日、思い出のポストイットでいっぱいになったホワイトボードはまさにつながりの証拠であり、尊重の証拠であると思う。ともに生きるとはまさにこういうことなんだな、と心から思った。世界が私たちのような尊重しあえる関係やつながりを築けていければ、対立なんて解決できてしまうのではないかと、軽率ではあるかもしれないが本気で思えたのだ。集まったメンバーが、理解し合い、友情を結び、一人の友人として交流をつづけることは、国際理解・親善を進め、世界をよりよいものへと変えていく大きな希望になると改めて感じる事ができた。

また、前期に受けた森山先生の釜山外大とのリモート授業を受けるまで日韓問題を直視してこなかった私にとって、今回のフォーラムで日韓よりも広い東アジアスケールでの問題に向き合い、様々な国の人々と話し合えたことは大変大きな収穫だった。どうして私たちのように、国と国同士は仲良くなれないのかと疑問が残るばかりである。歴史上や政治上のわだかまりを超えて交流できる私たちから、共生の第一歩ははじま

るのだと強く考えさせられた国際学生フォーラムだった。

#### 6. 最後に

フォーラムに参加できたこと、そのために関わってくださった方々、新しく出会った学生に感謝申し上げます。準備を進めていく中で、また本番の10日間を通して、自分自身の共生や平和に対する意識が強くなり、自分ができることは何なのか真剣に考えるきっかけとなった。自分が見聞きして感じたことや学んだことを忘れず、今後の学生生活や人生に生かしていきたい。

## 国際学生フォーラムを通しての学び

### 1. 国際的交流的側面

このフォーラムを通して、そしてこのフォーラムについて振り返る機会を利用して、国を越えた交流と、国を超えない交流に対する、学生である私の姿勢の共通点・相違点に関して考えた。フォーラム中は国や大学、生活、文化など様々な興味が湧いてきて、沢山質問し合い、お互いを知ることによって関係を築いた。相手のことを知って、もっと仲良くなりたいという思いで交流していた。この姿勢は、国を超えても超えなくても同じであるということに気づいた。日本人同士であっても、お互いのバックグラウンドや趣味などを話すことによって、交流をしていくからだ。ただ、私の場合、国を超えると、相手自身だけではなく、相手の国事情に注目しやすい傾向がある。対して、国を超えない場合は、相手自身に関する質問や話題が多いように感じる。これは、外国が余りにも未知の世界であるため、違いが大きく、どのように違うのか想像できない、という意識が私のなかにあるからだと思った。

政府レベルの問題が交流に影響を及ぼすのは、やはり国を超えた場合である。例えば、韓国からの学生と交流する時には、日韓問題を理由に日本人のことが嫌いなのではないかと、仲良くなることができないのではないかと、日韓問題関連の話題を出してもよいものか、というような心配や不安を抱いたことがあった。配慮するポイントが、政府レベルの問題に依るものであったのだ。そのような心配や不安を、韓国人全体に抱くことになることが多いのだ。一方で、これまでの、あくまでも私の日本人とのつきあいの中では、その人自身のバックグラウンドに対して、配慮して発言すべきだなと感じたポイントが多かったように思う。配慮すべきポイントが、相手固有なのである。

これらの考察から、私自身が外国人と「国対国」で交流していることもあるということが分かった。その姿勢を全否定する必要はないと思う。その国のことを知りたいと思う好奇心は尊重されるべきだからだ。しかし、その姿勢が、時にはマイナス要素をもつこともある。否定的な決めつけは、相手との交流の妨げになることもあるからだ。ただ、私の中に、政府レベルの問題に依る心配や不安があっても、乗り越えることができたのは、それでも仲良くなりたい、楽しい話もシビアな話もしてみたい、という前向きな気持ちがあったからだと思う。一緒に考えるために集った学生が相手だからこそ、前向きになりやすかったという側面もあるだろう。

### 2. 言語使用・学習の側面

留学生の皆さんの日本語が上手であったため、日本語を使用できることに甘えていた自分がいたことは反省点である。これまで最も熱心に取り組んできた英語で会話をしたり、韓国語で自分の名前を言ったりして、留学生側の言葉を積極的に使用することもできたと思う。また、留学生の意見・真意を最も詳しく理解するためには、彼らに母国語で話してもらうことが一番であると、今回の交流・シンポジウムを通して感じた。相手を理解するためにも、相手の母国語を理解できることや会話で使用できることは大切であると改めて思った。

これまでは興味・好き嫌いを理由に外国語を選び、学習してきた。大学生になってから勉強し始めた外国語は、難しい・思ったほど楽しくないという理由でやめてしまった。しかし、フォーラムに参加し、議論を重ねるなかで、相手の一番詳しく率直な意見を聞くために、あるいは外国語で書かれたニュースを読むために、外国語の習得は非常に大切であると身をもって感じた。それらのことをするために、特に今回一生懸命考えた東アジアについてこれからも考え続けていくために、私自身が韓国語や中国語を学ぶ必要性を感じているとともに、習得したいという情熱が湧いてきた。

留学生のなかでも、日本語レベルにばらつきがある。議論や会話になると、どうしても話すことができる人が中心になってしまう。そのときに、わかりやすく言い換えたり、ゆっくり話したりすることによって、皆が理解できるように努めること、皆が議論に参加できるようにすることが大切であると分かった。私自身は、やさしい日本語でゆっくり会話するように意識した。意識することに大きな労力は必要なく、大変ではないし、嫌な気持ちもない。ただ、相手のことを温かい気持ちで配慮している、という認識は自分自身にあった。私が、ネイティブと英語で話す際にも、相手は理解しやすいように、思いやりの心をもって英語を発してくれているのだらうと改めて感じた。私にとって分かりやすい英語で話そうと努めてくれる人に対して、感謝の気持ちを忘れないようにしようと思った。同時に、英語に関しては、相手からの心優しい配慮が必要にならないほど、ネイティブ並に話すことができるよう、これからは英語の学習に邁進していこうと思った。

### 3. 学問的学び

シンポジウムで非常に驚きが大きく、印象に残った学びは、ポーランドの強い未来志向についてである。ワルシャワ大学の学生2人によると、ドイツから謝罪を受けたというはっきりとした認識はないという。しかし、過去は過去、歴史は歴史であるという理由で、過去の出来事は置いておき、今現在のことを考えるべ



きだと繰り返し述べていたことが印象的であった。その未来志向の背景には何があるのか、どうしてそのように思えるのか、EUが関係しているのか、気になった。また、「過去を“置いておく”」「過去を“考えない”」という言葉のまま鵜呑みにしてはいけないようにも思った。過去の対立における問題の一応の解決を経た上で反省材料として扱うのか、問題は未だ解決していないが触れていないのか、によって、大きく言葉の意味合いは異なってくる。このトピックに関して、東アジアに注目すると、全体討論において、日本が今過去を“置いた”場合、日本にとって都合が良すぎる結果他国に反感を抱かせてしまうという意見が出た。過去を“置く”際にも、きっと相互に理解・妥協しなければいけない。ポーランドの姿勢をそのまま日本及び東アジアに応用することは難しいだろう。現に、戦時中から続く問題が完全に解決していない状況のなか、経済・産業面における協力が進んでおり、人・文化の移動もさかんである。東アジアの場合、戦争関連の問題が取り残されているという言い方もできるかもしれない。

これまで、グローバル文化学環所属の学生であることや国際関係に興味があることを理由に、日韓問題や日中問題について考えていかなければならない、と感じていたのは事実である。しかし、今思えば半強制的な義務感であったと思う。実際は、そのような問題について考えなくても、私自身は、特に何事もなく生きている。今回、フォーラムで議論するなかで、東アジアの問題に限らず、環境問題や社会問題、日米関係などあらゆる課題に関して考えていかなければならない責任感を感じた。そして考え続けていきたいという強い思いを自分のなかと感じた。これは、理性的に理屈があるというよりは、感情的にわきあがった思いであった。これこそが、山本先生がおっしゃった「責任感」である。そしてこの責任感が、小松先生の講演にあった言語教育、同徳女子大学の社会問題を共に解決しようという姿勢、ニュージーランドの多文化主義の背景にある移民へのサポート、大連理工大学が提案した非常に具体的な事業グループ、世界的にリーダーシップを示すアメリカが何ができるか考えたヴッサー大学の発表、釜山外国語大学が紹介したバケツチャレンジ、ワルシャワ大学による未来志向的に一緒に将来をつくりあげるべきだという主張、私たちが発表で唱えた、東アジアの共生及びシティズンシップに関する考えにあてはまる、もしくは通ずるのではないかと考えた。

フォーラムの準備期間及びシンポジウムを通して、言葉とその言葉が含みもつ実際のアクションに対する解釈の仕方について考えさせられた。発表を内容を考える上で、まず「共生＝共に生きること」とは何だろうか、という疑問にぶち当たった。多文化共生、異文化共生、ともに生きる・・・様々な場面で使われているが、非常に抽象的な言葉であることに気づいた。「共生」とは、実際にどのような考えをもち行動することを指すのか、が分からず、3人で意見を交わしながら固めていった。私たちのなかで「共生」が何なのか明確になってくることによって、提案内容やその背景にある問題が具体化していった。シンポジウムでは、真の謝罪とは何なのかというテーマを皆で議論し合った。謝罪のあり方に対する解釈が、日本と韓国の間で異なっていること、慰安婦問題の被害者が求める謝罪を日本側は行なっていないということ、一方で日本側は謝罪をしたつもりだということなどが分かった。ただ単に反省と謝罪の言葉を述べれば良いのではなく、相手の心に響く謝罪をしなければ意味がないのではないかと考えた。フォーラム全体を通して「解決」という言葉に関しても考えさせられた。日韓問題の解決とは何なのだろうか。今国家レベルでもめていることが全て収まれば解決なのだろうか。個人個人が一緒に問題を考えていこうという気持ちをもつことができれば解決なのだろうか。一方で、日本の過去の行為、つまり戦時中に韓国人や中国人を残酷な形で搾取したことについては、これからも反省と償いの気持ちを持ち続けなくてはならず、解決という言葉を用いることは難しい、適さないのではないだろうか。容易に用いることができる熟語の意味合いや解釈の仕方について考えることの重要性や面白みに気づいたフォーラムであった。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

良かった点の一つ目は、各担当がしっかりと仕事を行なったおかげで、いずれの活動においても担当者を信頼して安心して活動に取り組むことができたことだ。不快感や不安感を感じるものがほとんどなかった。お茶の水女子大学側全体に、快く迎え入れようという精神があったように思う。また、留学生側も進んで活動に参加していこう、交流していこうという姿勢が見受けられた。良かった点二つ目は、シンポジウムだけではなく、スタディツアーや自由研修、歓送迎会など、仲を深める活動がしっかりと確保されていたことだ。日程のなかに組み込まれていたことによって、必然的に留学生と一緒にいる時間をもつことができたからだ。一年次に履修したサマープログラムでは、日程に交流機会を含めていなかったため、多くの留学生は各自東京観光や友人との約束を日中に入れていた。その結果、予定が合わず、プロジェクトワークの予定をたてるのが難しかったという声も私の周りにはあった。日程を決めて、ある程度参加学生を拘束しておくことは、学生間の交流やワークの充実度を高めるために、必要なのではないかと考えた。

難しいと思った点は、留学生間の交流が少なかったことだ。欧米からの学生とアジアからの学生の間で溝があったわけではなかった。しかし、ご飯を食べるときや移動するときは、やはり同じ国及び大学同士でかたまっている行動が多かったように思う。また、お茶大生－留学生の交流はさかんだったが、留学生同士の交流は相対的に少なかった。バディはあらゆる面で必要であるが、バディがいることによって、どうしてもバディ

ィ及びお茶大生一留学生の交流の場が増えてしまう。もう少し留学生同士の交流がさかんになってもよいのではないかと思った。ただ、これには当人の性格やその場の流れなども背景にあるだろう。また、歓迎会・送別会・議論以外は、強制的に様々な国籍の人々が話さなければいけないという機会はない。新しく人間関係をつくっていく必要のある環境に置かれたときに、誰か知っている人と一緒にいると安心する気持ちも分かる。自由研修や日程外の交流時に、お茶の水女子大学側が複数名集まることによって、必然的に留学生同士も、より近い距離で同じ時間を過ごすことができているため、受入側に、そのような意識があってもよいのではないかと思った。

改善点は、発表者以外のお茶の水女子大学学生に、シンポジウムの内容に関して、考える時間が少なかったことだ。フォーラム前に考える機会があるのとならないので、学びが増減するとは思わない。ただ、これまでの大学での授業全体を通して、自分なりにしっかり考えて挑む議論や論文テストほど、得たものや充実感は大かかったように感じている。また、東アジアの学生として、主催者側の学生として、フォーラムに向けて皆が事前に考える姿勢はあっても良いのではないか。一方で、それぞれ担当していることがあるため、全員が発表者のレベルまで熟考することができる機会を与えることが難しいということも事実である。発表者がシンポジウムのテーマに関して熟考できるのに対して、他の担当者は国際イベントを運営するという経験ができるという点では、各自メリットを得ていることには間違いない。そこで、お茶の水女子大学学生同士で（グループに分かれる/全体で）、テーマについて考えていることや疑問に思うことを話し合ってみるのはどうだろうか。テーマが難しく、うまく言葉にできないこともあるだろう。しかし、うまく言葉にできないモヤモヤや知りたいことを自覚した上で、シンポジウムに臨み、モヤモヤを解決しようと努力することによって、各自学びの成長をはっきりと実感することができるのではないだろうか。

## 5. 東アジア・世界がともに生きることについて

東アジア、そして世界の人々が、様々な問題を一緒になんとかしていきたい、一緒に考えていきたいと心の底から思い、何らかの形でアクションを起こしたいと思うことこそ、ともに生きることだと私は思う。シンポジウムで多くの人が言っていたように、政府間の対立を解決することは非常に難しいと考える。そのなかで、個人レベルの対立を解決するため、そして東アジア、世界がともに生きるためには、直接交流と対話をするのが一番重要であると考え。なぜなら、個人レベルの対立は、政府の対立を理由にした心の問題であると考えたからだ。相手を憎悪して、自分の一方的な考えに基づいて相手を非難して、相手の意見を聞こうとしないのは、冷たい心であるからだ。他の国の人に冷たい心をもってしまうのは、メディアや教育、差別用語などによって植え付けられる否定的なイメージがあるというのが最も大きな理由であるだろう。この冷たい心を温かい・優しい心に変えていくために、つまり、相手を尊敬して、相手の意見に耳を傾けて、意見の背景も理解しようと努めて、自身の考えについて反省もすることができるようになるために、直接的な交流と対話が重要なのだ。直接交流することによって、相手の様々な側面を知ることができ、否定的なイメージは減るだろう。実際、私は、はじめて韓国人と直接交流したときに、韓国人全員が日本人のことを嫌っているわけではないと実感することができた。対話は、相手の意見と自分の意見について考えて、前向きな方向性を見いだすことができる上に、互いの距離をさらに縮める。友人と喧嘩をした際には、お互いの悪かったところを反省して、互いに謝ったものだ。直接交流と対話を通じて、相手は大切な存在になる。大切な存在になると、国家間関係が悪化したり、相手の国で災害が起こったりすると、心配し、何かできることをやりたい、なんとか改善していきたい、という強い思いがこみ上げてくるはずだ。この思いは、前述した「責任感」と通ずるところがあるだろう。慰安婦問題についても、政府の問題ではなく、人権問題として受け止めることができるようになるのではないか。もしメディアから自国中心的な情報が流れてきたとしても、内容を批判的に受け止めることができるだろう。確かに、偏見や対抗心をうみやすいメディアや教育を改革していくことも大切である。しかし、今回の直接交流と対話を通して、自分の五感で情報を得て、実際に自分で対話したり考えたりするという実体験は私の心や考え方を大きく動かしたと感じている。深く共生について考えたからこそ、様々なメディアの情報を得ていく必要と得ていきたいという思いをこれまでの人生で1番感じた。お茶の水女子大学にまで来てくれた留学生と一緒にフォーラムの準備をしてきたお茶の水女子大学の学生の皆さんとの絆を大切にしたい、これからも交流を続けていきたい、再会したいという熱い気持ちも生まれた。したがって、私は東アジア、そして世界がともに生きるために、直接交流と対話が最も有効な手段の1つであると考え。科学技術の発展を利用した遠隔授業や交流プログラムが人々の身近なところが増えていったら良いと思う。また、そのような機会に挑戦したいと思う人が増えたら良いと思う。そのために私自身は、今回のフォーラムを通して感じたことを周囲の人々に広めて、彼らの東アジアに関するイメージにプラスの影響を与えるだけでなく、直接交流や対話に興味をもってもらえるようにしていきたい。これから本格的に実習を開始するだろうグローバル文化学環の後輩たちに勧めたい。また、今回出会った皆さんとの交流をこれからも続け、問題について対話もしていく。直接交流と対話を通して皆が温かい心を持ち、ともに生きていくことの重要性を感じていけたら嬉しい。

## 国際交流を通して感じた言語教育の重要性

### 1. 国際交流的側面

私は国際交流に関するイベントに今まで全く参加したことがなく、今回のフォーラム参加を決めたのも自分にとっては大決心でした。国を超えた学生交流は自分にとって非常に新鮮なものであったとともに、ツアーなどで海外学生に対して日本の文化について説明をする機会を通して日本について今までよりも詳しくなることができたように思いました。さらにこの機会に、自分は日本に住んでいる身でありながら日本の歴史や文化についての知識を全然持っていなかったということを実感しました。また、講演の合間や討論で海外の学生と話している時に、日本人の歴史認識について聞かれることが何度かありましたが、そこでも自分の認識の甘さを感じました。まずフォーラム前の段階では、自分の認識云々以前に日本と東アジアの国々の時事問題に対する関心が薄く、どのような問題が起きているのか全然知らない状態でした。国際交流の場で海外の学生が自分の周りの国に対する認識を語っているのに対して、自分があまりにも無知な状態でいたということを痛いほど感じてかなりショックを受けました。

### 2. 言語使用・学習の側面

今回のフォーラムでは、あまり英語を使う機会がなかったのですが、海外学生の方々が母国語ではない日本語を非常に上手く使いこなしている様子を見て、大変刺激を受けました。特にバディのワルシャワ大学の学生の方々は英語も日本語もとても上手で、フォーラム期間中たくさんお話しする中で、語学ができることによって触れ合える世界が広がるということを学ぶと共に、積極的に言葉を発していくことの重要性も感じました。また、私は後期の月曜日の昼休みに行われていたポーランド語講座に参加して、今回のフォーラムに備えてポーランド語の勉強をしました。ポーランド語を学ぶのはもちろん初めてで、こんにちはやありがとうなどの初歩的なあいさつも全く分からない状態からのスタートでしたが、あいさつや文法の初歩を学ぶうちに少しずつ身体に言葉が定着していく感覚を味わうことができました。言語だけでなくポーランドの文化について触れたことによって、ポーランドという国自体をより身近な存在に感じることはとても良い経験になったと思います。現代では英語ができれば世界中の多くの国の人たちと会話ができるため、英語だけ勉強していれば語学学習は十分だという考え方もできると思います。しかし、私がフォーラムを終えてみて感じたのは、今まで全く触れたことがなかったような言語を勉強してみることで見えてくるものが増えるということです。私自身が体験した例を挙げると、Twitter や Instagram など覚えただけのポーランド語をいろいろ入力して検索してみても、初めて見るような行事や食べ物の画像に出会うことができました。ほんの数か月勉強するだけでも、ネット上で見た簡単なポーランド語の文の構造が分かるようになる喜びが感じられたり、テレビなどでポーランドについて放送されているのを見ても親近感が湧くようになったり、自分の心の中でも大きく変化が起こったような気がしています。外国語を自分で自由自在に操れるようになるにはとても時間がかかりますが、初歩を学ぶだけでも非常に多くのものが得られるということが分かったため、これからもっと積極的にいろいろな種類の言語を学習してみようと思う気持ちが強くなりました。

### 3. 学問的学び

まず、小松先生による講演ではベルギーとカナダの言語教育について学びました。ベルギーにはオランダ語話者とフランス語話者がいることは何となく知っていましたが、対立が起きていたということはこの講演で初めて知りました。複数の言語を身に付けることを積極的に評価するという「複言語主義」が欧州の言語政策として紹介されていましたが、私はこれを聞いて日本でもこの考え方が定着すればもう少し他の国への理解が深まるのではないかと思います。イマージョン教育についての話も初めて耳にしましたが、今後のベルギーでこの制度がどのような展開を見せていくのか注目していきたいです。山口大学の山本先生の講演は周りの人と話し合う機会がたくさん設けられていて、頭を使いながら楽しんで講演を聞くことができました。私たちはつい物事を二元的に捉えてしまいがちですが、そこまで世の中は単純にはできていないということを深く感じました。共に生きるために、私たちそれぞれが色々な影響を受けて自己の精神や思想を形作っていると考えれば、もっと互いに歩み寄ることができるということを知りました。各大学のプレゼンテーションではいづれにおいてもいろいろな視点から共生についての提案がなされていて、どれもとても興味深かったです。東アジア以外の国々の発表では日本との歴史的背景や文化的背景の違いも感じたものの、それぞれの国が共生のためにどのようなことに取り組んできたのかを知ることができたのに加えて、各国の歴史や文化について詳しく知る良い機会になりました。特にポーランドの歴史については知らないことだらけだったので、プレゼンテーションを聞いて非常に勉強になりました。

### 4. イベントとしてのフォーラムについて

このフォーラムの良かった点は、海外学生とのパーティーやツアーなどの交流の機会がたくさんあったことで、濃い時間を自分のパディと過ごすことができたということです。期間中にイベントがずっと入っているわけではなく、自由に予定を決められる日があったのも各々の希望に沿ったプランが作れたという点で非常に良かったと思います。また、良くなかった点は、シンポジウム、特に招待講演で学生ではなく先生が主体となって質疑応答の時間を進めるような形になってしまったということです。学生からの意見もいくつかは出ていたものの、シンポジウム初日ということもあって全体的に雰囲気もかたく、私自身も少し身構えすぎてしまっていたというように感じました。最初だと思って身構えることなく、もう少し学生が質問者として積極性を持ってシンポジウムに参加していくべきだと思いました。また、このことに関連して私はフォーラムの前に東アジアの問題についてもう少し勉強してからシンポジウムなどに臨むべきだったということを少し後悔しました。フォーラム前はどうしても他の準備のことに意識が行ってしまって、なかなか自分で時間を割いて調べる作業をしなかったのはあまり良くなかったと思いました。もちろん東アジアの問題だけでなく国際情勢に日頃から興味を持ったり、いろいろな分野の知識を取り入れたりした上でシンポジウムに臨めばもっと討論を盛り上げることができたと思いました。

## 5. 東アジア・世界が共に生きることについて

現在は、日中関係が温かい関係になりつつあるとともに、日韓関係はあまりよくない状況であります。日中韓の間での互いの理解を深めるために私が最も重要な事項だと考えていることは、言語教育です。今回のフォーラム中に出た意見として、学生の間で国連のような組織を作るということがありましたが、積極的に国際問題に注目していく学生がいる一方で、学生の大多数を占めているのは、国際問題は自分がかかわる問題ではなくて政府をはじめとする国際問題に携わるような人たちが何とかするものだろうと思って当事者意識を持っていない人たちばかりであると考えます。共生ということで他の国と本当に友好的な関係を築きたければ、大多数の人の意識を何とかする以外に道はなく、その大多数の人のほとんどが通る道として教育があります。その中でも言語教育は国際的な会話を行うツールとしてなくてはならないものであるとともに、言語を学ぶことに加えてその言語圏の国々の風土や生活習慣について理解を深めるということが共生を目指すうえで重要な意味を成すと考えられます。言語の授業の在り方としても、ただ文法事項の教育を行いその理解を測るテストをするだけでは教育として足りないはずで、言語教育では、ただ暗記したり文章を作れるようになったりすることをゴールと考えるのではなく、言語の習得とともに自国とは違った文化についての知識を得ることを目指していくべきだということを、今回のフォーラムを通して学びました。言葉が通じると通じないのでは人間同士の間心の距離が大きく変わるように思います。東アジア・世界が共に生きるために、まず日本人が色々な国の言語に触れたり、言語教育の場でもっといろいろな国の文化や風土に触れる機会を作ったりする必要があるように感じました。

## 共通点と相違点の見方と国家間の問題と個人間の問題の区別

### 1. 国際的交流的側面

国が違うということは、何かの違いを生み出すということになり、争いを生む原因となりうるが、国際的交流の面からは、話題を作るという点では、違うということはメリットになった。何かの話になった際に、「韓国ではどうなの？」などという発言に繋がり、話が広がると共に知らなかったことを知る絶好の機会になった。また、これらのことから違う点だけでなく、同じ点などを知ることができた。韓国でも日本の音楽が聞かれていること、いのしし年と豚年で違いはあったものの干支が韓国にも存在していることなど、違いを楽しむだけでなく、同じことを喜ぶこともできた。しかし、自分の国についてあまりにも知らないことを思い知らされた。バディがよく質問をしてくれる人であったこともそう感じる大きな理由であると思うが、「なぜ駅名、電車名が数字でないのか」「その駅名、電車名はどのような由来なのか」「今のはやりの有名人は誰か」などと聞かれ、すぐ答えられなかったことが多かった。当たり前であるからこそ、何も疑問に思わない面もあったことも事実であると考えられ、また調べることで自分の知識が増えたこともあるが、国際交流をするにあたり、日本についてよく知っておく必要があると考えた。私が日本人であるからこそ聞いてきたことであるからこそ聞いてくれたはずであるのに申し訳ない気持ちと恥ずかしい気持ちが入り混じった気持ちになった。バディは私がバディの国の話を振ればすぐに答えられるのにも関わらず、自分は答えられなかったことが多かった。また、自分の国についても知識不足を感じたが、それと同じくらい相手の国についての興味があまりにもなかったと感じた。韓国人は日本の俳優やアイドルの話をしてくれたのにも関わらず、私は韓国のドラマやアイドルについてはほんの少ししか知らなかった。もっと事前に韓国について調べるべきであったな、と感じることが多かった。

### 2. 言語使用・学習の側面

外国語の使用に関して、まず英語については自分から使用しようという気持ちがなかったことを感じた。韓国の学生はニュージーランドやアメリカの学生に対して英語でコミュニケーションを取っていたりしていたのにも関わらず、私はアメリカの学生とニュージーランドの学生が英語でコミュニケーションを取っていても日本語で対応してしまうことが多かったので、このフォーラムは日本で行われ、日本語を話すことのできる海外の学生とともに過ごした10日間であったが、英語でコミュニケーションを取っている時ぐらいは積極的に英語で会話をすべきであったな、と感じた。私は英語に自信がなく、だからこそ日本語を使ってしまふところもあったが、日本語以外の言語を使つてはいけないというルールもなく、私がアメリカにインターンをした時は日本語を話すことができるアメリカ人が完璧でなくても日本語で時々話しかけてくれることがあり、それは私にとってとても救いになったので、もっと英語で話しかけていれば相手にとっても少し楽であったのかな、と思った。

また韓国語に関しては、私は学習したことがないので、あの10日間のみで韓国語で会話できるようにすることは非現実的であるが、韓国語の単語をもっと積極的に聞いていくべきであったな、と思った。韓国から来た学生が、「寒い」を韓国語でなんというのか、というのを教えてくれた時、外に出で、韓国語で「寒い」といったところとても嬉しそうな表情を浮かべていた。今思うとアメリカでインターンをしているとき「～は日本語でなんというの？」と聞いてくれた時とても嬉しかったことを覚えている。国際学生フォーラムでは、聞いたとしても覚えられなかったらどうしようという心配をしまい、聞くことを怖がってしまったが、自分が聞かれたときは自分の文化に興味を持ってくれたのかとただただ嬉しかったので、もっと聞いてよかったな、と思った。国際学生フォーラムが後半戦になっていくと積極的に聞くことも増えたが、もっと早くするべきであったなと思った。

### 3. 学問的学び

学問的な学びとしては、自分が当然と思っていることに対して他の国にとっては常識ではないことに気が付いた。私がこれに気付いたのは、フォーラムでの韓国の発表で、独島(竹島)の文字を見た時であった。私は、もし表記するとしたら竹島(独島)になるので、このような点から異なるのだな、と思った。韓国からの発表で、独島とだけ書いて竹島を表記しないこともよいことではなく、また、日本からの発表で竹島とだけ書いて独島を表記しないこともよいことではないが、竹島(独島)も独島(竹島)もカッコ表記の部分が一応書いておく、というような意味合いに感じられるので、もし国をまたいだ共通の教科書を作るとすれば表記の問題はからんでくるのではないかと、思った。非常に些細なことであるために気にしない人は気にしない問題であり、かつカッコ表記による表現以外に何かがあるのかというのも私には分からないが、もしその点に焦点を当てるとしたらどのように解決するのだろうか、と思った。

また、どの国であっても自分にとって不都合である歴史はあまり学校では教えられない傾向にあるのではないかと、思った。領土問題などでは、韓国や中国と主張が食い違っていると教科書に書かれていたので、日本の領土であると書かれていないため、日本の教科書は中立的な書かれ方をしているのだと勝手に思っていたが、今回のフォーラムでそれは誤りであったな、と考えた。私は竹島や尖閣諸島という名前ではしかこれらの島を把握していなかったが、日本で竹島と言われている島は韓国では独島と呼ばれており、日本で尖閣諸

島と呼ばれている島は中国では釣魚島と呼ばれていることについて無知であり、また、日本の教科書では韓国での呼ばれ方や中国での呼ばれ方が書いてあったとしても竹島(独島)や尖閣諸島(釣魚島)という書かれ方であり、独島や釣魚島と書けなかったとしても竹島や尖閣諸島と書いていけば問題がない。また、戦争に関しても原爆や東京大空襲など被害の歴史については小学校から学ぶが、中国や韓国などへの加害の歴史は中学や高校になって少し触れられるほどであり、慰安婦問題に関しては今回のフォーラムを通じて自分が極めて無知であることに気付かされた。今の日本の教育では、被害と加害の歴史を両方学んでいるとは言いがたく、日本をよいものとして教え込もうという姿勢が感じられた。日本にとって都合のいいものだけでなく、都合の悪い面も吸収していくことが重要であると感じた。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

今回のフォーラムについて、良かった点と悪かった点は表裏一体であるように感じた。今回のフォーラムは少人数で構成されていたからこそ、お茶大生だけでなく、海外の学生とも多くの方と交流を持つことができた。特に同徳女子大学の学生とはバディだけでなく、他の同徳女子大学の学生とたくさんコミュニケーションを取ることができたと思う。日本にいてこんなにも海外の学生とコミュニケーションを取るのはなかなかないのでそのチャンスを今回はよく掴めたと思う。これに関しては今回のフォーラムでの良い点であると思う。しかし、仲良くなったからこそ、私の中で今の関係を壊したくないと思い、自分の意見を素直に言えない部分もあったな、とも考えている。これはこのフォーラムの問題ではなく、私個人の問題でもあると思うが、シンポジウムの中で、同徳女子大学の学生が日本の韓国への謝罪を要求した時に、もう少し柔らかい口調で言ってもよいのではないか、とってしまった部分があった。もちろん、間違いなく慰安婦の問題は韓国にとって辛い歴史であり、謝罪を要求するのは当然であると頭ではわかっている、仲良くなったからこそ少し奥まった話をして問題ないという思考回路になるのではなく、仲良くなったはずなのにどうしてそのようなことを言うのだろうという考え方になってしまったことに気が付いた。自分の中で、日本と韓国の間での歴史や、今の問題などは触れてはいけない、わかり合えない部分であると考えてしまっているところがあることが分かった。ただ、この問題はきちんと解決をしなければならない問題であり、あまりお互いのことをよく知らない間柄でこのことについて話し合うのもよくないと思うので、どのようにしたら相手の意見を受け入れられるのか、これは私の問題でもあると思うので、これからもっと考えていきたいと思う。

#### 5. 東アジア・世界が共に生きることについて

イスラム国など文化や宗教の違いや物理的距離を越えて世界が共に生きることが東アジアが共に生きることよりも強調されていたように感じるが、今回のフォーラムを通じて、東アジアが共に生き、そこから世界が共に生きるようにするという順番であるのだと考えた。ゆえに今回は東アジアが共に生きることについて述べていこうと思う。今日東アジアには領土問題や歴史的問題など様々な問題が起こっている。それに対してはうやむやになっているのが現状であり、解決には程遠い状態であろう。それを解決策を講じるのは私にとって難しいことであるが、東アジアが共に生きる第一歩になるのは、シンポジウムの討論の中でも上がっていたが、言語教育にあると思う。今回のフォーラムを通じて、日本は外国語教育が遅れていると感じた。日本は小学校で第一外国語である英語を教わることがあるが、それはあまり本格的ではなく、きちんと始まるのは中学生になってからである。そして第二外国語においてはほとんどが大学生になってからで、学びはするものの実際に使いこなせるようになる学生はほんの一握りである。それに比べてフォーラムに参加した学生は小学生の頃から本格的に第一外国語を学び始め、中学生には第二外国語を学ぶようになる。日本もこのように、今よりも早い段階で外国語を学ぶべきではないか、と考えた。また、お茶大では、中国語については多くの授業が開講されているが、韓国語についてはあまり多くの授業が開講されていない。同じ東アジアであるのなら、もっと多くの授業を開講するべきなのではないかと考えた。このように、第一外国語は今世界の共通語になりつつある英語を学ぶことはある意味やむを得ないことであるが、第二外国語を今よりも促進し、かつその中でも東アジアの言語を充実化することによって東アジアの言語を学び、話すことのできる日本人を増やすことで、中国や韓国など東アジアに住む人々とコミュニケーションを取りやすくなり、東アジアは共に生きやすくなるのではないかと考えた。

#### 6. その他

今回のフォーラムでは、最初のお迎えの時に同徳女子大学の学生が全員で来たことにより、バディだけでなく、海外の学生とたくさんコミュニケーションを取ることができ、非常に充実したものとなった。しかし、何か自分にとって都合悪いことや、私の性分に合わないことがあると自然に「この人は韓国人だから」と思ってしまうことにも気づいた。今回の国際学生フォーラムでは東アジアが共に生きるためのというのがテーマであったために自分に合わないこと理由を全て国籍のせいにするのが誤りであることに気付くことができたのかもしれないが、それでもその考えに至ってしまうことはよくないことであるので、このような思考回路になってしまったときはそれが本当に国籍のせいであるのかよく吟味し、自分の性分に合わないからと言って無理して合わせる必要はないかもしれないが、国の問題でなく、私とその人個人の問題であると自然と考えられるように努力していきたいと考えた。

## 国際学生フォーラムで考えさせられたこと

### 1. 国際的交流的側面

一度の機会に様々な国の人と、不自由なく日本語で会話できるのは素晴らしい機会だった。当初は外国人1人に対して日本人2人がバディに付くことは手厚くサポートできる分、一対一で関わることができないので悲しいと考えていたが、パートナー以外の人とも仲良くなるために合理的な仕組みだったと思う。実際、パートナー以外との交流も多くできた。連絡先も交換し、これからも続く関係を築くことができた。

ただし、私は雪が降るほどの寒さのため体調を崩してしまい、最後の閉会式まで参加することができなかった。国際交流を行うために、もっとタフな人間になろうと努力する決意をした。

### 2. 言語使用・学習の側面

フォーラムにおける発表・質疑応答は英語だったので、英語の使用機会を得ることができた。それ以外では外国人参加者の日本語能力が非常に高かったため、英語より日本語の方が得意な人も多く、基本的に日本語を用いた。相手国の言語使用能力を高めたいと思う意識が高まった。

学習の側面としては、普段社会学専攻の人間として、国際関係論についての洞察を得られたことに価値があった。社会学でもグローバル側面を扱うことは少なくはないし、自分の学問の学びにおける相乗効果が期待できそうなので、来年度、グロ文の科目も履修してみたいと思った。

### 3. 学問的学び

いくつかの講演の中で、山口大学の山本准教授のレクチャーが最も印象に残っている。絶対的な正しさは世の中になくことや、みんな正直でないからこそ本音と建前を見極めることの重要性、わかりやすい意見に飛びつくことの危険性に、改めて気づかされた。また、複数設けられたグループでの話し合いの時間が非常に有意義で、導入に従いながら話しぶり内容に踏み込んでいった。

フォーラムでは、発表に関してはポーランドの三度の分割を経て悟りを開いたような態度を鮮明に記憶している。また、愛国心についての話も、ナショナリズムと地球主義の兼ね合いについて考えさせられた。最も印象に残った議論については5章で後述する。

### 4. イベントとしてのフォーラムについて

良かった点としては、たった一週間という限られた時間の中で、お互いについて名前と簡単な性格を把握できるほど仲良くなれたことが挙げられる。充実していたプログラムに加えて、空き時間にお茶大図書館で話したり、東京近郊に出かけたりした人が多かったことがその要因の一つだといえる。短い時間を「ともに生きる」ことができた。

良くなかった点としては、ボランティアだからこそホスト側としておもてなししなければならないのに、「自分が楽しんでやろう」という意識を持っている自分勝手なお茶大生が多すぎたことだ。個人的に、心の甘えによる凶々しい行為をたくさん見受けられて悲しくなった。自分が担当するその時間帯は、責任を持って仕事をやり通すのが筋なのに、先頭を切らず皆に無駄な時間を過ごさせる人や全員の状況確認をしない人などがいた。

私は「ボランティアならば徹底的に尽くせ」と言いたいわけではない。ただし、節度を持って、皆が気持ちよく過ごせるように団体行動に協力する心構えが大事だと思う。自分勝手な人はどこにでもいるので、その自覚を持って我慢する力を持ってほしい。また、面倒なことを避けて別の人にやらせようとするのではなく、自分が悪者になってもはっきり物は言って行動できるお茶大生が増えてほしいと思った。ただ楽しいという経験で終わってしまうのではなく、互いを高め合えるように努力することを目指してほしいと言いたい。何事も経験であるから、統率力がないなど、個人の能力についてとやかく言いたいのではない。フォーラムを成功させるために、皆がそれぞれ周りに目を配るようにしてほしい。

### 5. 「真の謝罪」について

フォーラムにおける話し合いで、「真の謝罪」について討論したことが印象的だった。私は同徳女子大学の学生の発表で、日本に「真の謝罪と賠償金」を求めることについての発言が引っかかった。そこで、近くにいた韓国人に聞いてみると、その子の個人的な考えとして「慰安婦のおばあさんに賠償金が支払われなかったのは韓国政府にも責任がある。だから私は謝罪の方だけ必要だと思う。その謝罪は政府同士の謝罪対応ではなく、あくまで慰安婦のおばあさんに対する謝罪のことを指す。また、日本政府は行動と言葉が伴っておらず、心がこもっていない」と述べた。私は、大学生訪韓団として渡韓した経験があり、日本の外務省

見解と韓国の外交部見解をたたき込まれていたもので、国民の1人としての個人的な考えを伺えたのは新鮮な経験だった。私個人的には、歴代の何人かの首相が今までの談話やスピーチで「痛切な反省と心からのお詫び」を述べていたので、韓国側はその事実を無視していつまでももめごとを継続しようとするのか不思議に思っていたけれども、その謝罪は政府同士のもので慰安婦のおばあさんに対してではないだろうという新たな見解を得られた。また、韓国国民の多くがその文書の存在を知らないことが問題だと問うたら、日本国民の間でもあまり広まっていないならその文書は存在していないも同然だ、と言われ、論点のすり替えに呆れながらも少し納得してしまった。また、私の頭はかたいとも感じたので、共生の道を一緒に探るために、国としての考えから離れ、学生だからこそ何のしがらみもなく心から話すことの重要性に気付いた。

正直、参加者みんなと仲良くしたいからこそ、対立が起こりそうな面倒な話題には触れたいなかったが、フォーラムの存在意義と自分の関心に対して誠実に生きることが大切だと思い、今回遠慮せずタブーに切り込んだ。そもそも、難しい問題を腫物のように扱ってしまうことに問題を感じる。そのような問題に詳しいと、変な人や怖い人だと思われ、近づきたくないという意識が働くことも珍しくない。過去の私は、そのように感じてしまう1人だった。私自身が変わり日韓関係に関心を持ったのは、先述の訪韓団に参加したからで、そのきっかけがなければ詳しく学ぶことはなかったと思う。今回のフォーラムが参加者にとって変化を生じる機会となり、私とその働きかけをできたのであれば嬉しい。

## 6. 東アジア・世界がともに生きることについて

東アジア、そして世界がともに生きるために求められることは、大きく二つある。

まず一つ目は、相手の国の立場を相手の言葉で知ることができるようにできる限り努力することだ。翻訳には限界があり、また他国の言語を学ぶことは他国の文化を知ることでもある。そしてメディアの情報操作に従わないためにも複数の言語を身につけることは重要だ。今回のフォーラムでは、相手に合わせてもらって日本語で議論したので、我々が改善しなければならない課題の一つだ。ただし、使用言語が日本語だとしても、一緒に話し合える機会自体が貴重であり、存続してほしいと思う。

二つ目は、若いうちから知識を身につけて、それを基に話し合いに参加することだ。インプットとアウトプットのどちらかが欠けると、もたらされる効果は半減以上になる。知識を身につけるためには、教科書や学校の授業だけでは不十分で、自分で情報をつかみに行くことが大事だ。特に難しい外交問題については、教科書に載せても、授業で教えても、それが問題化してしまうので、その情報の入手については個人に委ねるしかないのがつまるところだ。また、話し合いの時、政府見解を聞きたいわけではないのはわかっているが、前提知識として知っておくことは重要だ。たとえば、韓国側が「日本政府は謝罪をしていない」と述べるのに対し、そのまま鵜呑みしてしまうのは無知であり、「日本政府としては謝罪をしていることになっている。しかし、果たしてそれは本当に韓国が求めていた謝罪なのか、一緒に考えよう。」と言えるまでになる能力が求められる。



## フォーラムでの学び

### 1. 国際的交流的側面

学生交流は2つの点でとても良いと感じた。第一に相手の国を知る上で優れている。なぜなら、友達として接しながら、ラフにいろんなことを聞くことができるからである。例えば、電車に乗りながら、同徳からのヒジンさんに北朝鮮と韓国の関係について聞いた。韓国の人は北朝鮮に対してあまりいいイメージを持っていないと語っていた。統合したい人としたくない人は半々くらいで、したくない人は「いまさら統合する必要はない」という意見だそう。これは普段の交流、例えば観光客との交流では話せないことである。フォーラムの目的が世界の共生であったからこそ、お互いがそのような繊細な話題について、興味を持ち、そして冷静に話し合うことができたのではないだろうか。

第二に、学生交流は自分の国を見直す機会にもなる。一番興味深かったのが、バディの学生さんが日本の電車の「痴漢は犯罪です」を「当たり前のこと」と面白がっていたことだ。韓国では、罰金などについて記されている場合が多いということだ。私は日本にいて、そのセリフについて考えたことは一度もなかったが、言われて考えてみると確かに当たり前のことだと思った。罰金について書いたほうが、痴漢を撲滅させる効果はありそう。このように、学生交流は、自分の国をクリティカルに見直し、その国をさらに良くしていく機会にもつながるのではないだろうか。留学に行くと、日本を外から見られるようになるという。私は留学に行ったことがないので、わからないが、海外の学生に率直な意見をもらうことの方が外から見るという点においては優れていると思う。なぜなら、留学に行っても、その人のベースは母国ででき、当たり前になっていることが多いからだ。ただ、母国について意見を聞く海外の人がその国が大好きで全く批判しなかったり、本音を言えない相手であったりしては意味がない。そのためにも、今回のフォーラムのように一つの目標を掲げて、本音で話すという暗黙のルールのようなものがあることはとても有効であると思う。

### 2. 言語使用・学習の側面

言語については、留学生の日本語がとても上手で、驚いた。人によって、レベルに差はあるにしても、全員が日常生活のやり取りについては問題がなかった。私は、彼らのレベルで英語を話せるかということ、そうではないということに気づいた。高校では英語部に所属していたため、ある程度は話せるが、シンポジウム中も通訳しても通じないことがあり、とてももどかしかった。このシンポジウムを機にさらに英語、特にスピーキング、リスニングに力を入れようと思った。また、今回は日本語が通じたので、交流や難しい話もスムーズに、そして奥深くできたと思う。まずは、日本語というこんなマイナー言語を学んでくれている彼らに感謝の気持ちでいっぱい。そして、今度は私が英語だけでなく、彼らの言語を学ぼうと思う。私はバディが同徳女子大学の学生であったこともあり、特に韓国の子たちと仲良くなった。バディの学生さんとフリーの日に吉祥寺に行った。そして、カフェで彼女がペーパーに日本語を書き始め私に聞いていたので、私は韓国語を教えてもらった。幼い頃からハングルは記号にしか見えていなかったが、思ったよりは簡単で、覚えるのが楽しそうだった。図書館で韓国語の本を借りたので、早速ハングルの本を覚えていく。

### 3. 学問的学び

シンポジウムで学んだことは3つある。

第一に、日本と韓国で大きく歴史問題について認識が違うことだ。特に衝撃的だったのが、釜山外国語大学の発表だ。韓国の20代115人に日本の好感度を調査したところ、5が一番いい中で2.58だった。また、日本で思い浮かぶ人物で伊藤博文、豊臣秀吉があがった。それに私は驚きだった。なぜならどちらも、朝鮮に侵攻した人だからだ。私は韓国に悪影響を与えた日本人と言われても、今までは、ぱっと思い浮かばなかったかもしれない。やはり、これは教育で形作られたものなのだろうか。確かに、中学校で習ったとき、侵攻した事実だけは習ったが、朝鮮でのひどい状況などは習わなかった。加害国である日本はその歴史を繰り返さないために、被害国のそのときの状況について、義務教育を通して次世代に伝えていかなくてはならないのではないだろうか。また、慰安婦問題についても学びが多かった。同徳女子大学の発表のときに、私は「韓国人は日本の謝罪が足りないというが、どういう点が至らないのか」と聞いた。すると、チョウソネさんから、「日本人は韓国政府に対して謝罪はしても、元慰安婦に謝罪していない。また、政治の観点からではなく、人権の点から考える必要がある」と回答をもらった。リアルな韓国人学生の意見が聞けて、考えさせられた。なぜなら、私はニュースを見るだけでは、もう謝罪は済んだのではないかと思っており、祖父を始め、私の家族もそういう意見だからだ。また、慰安婦像についても別の人が質問していた。そして、「慰安婦像は慰安婦問題を忘れないための大事な象徴」と韓国の学生が言っていた。全然視点が違って驚いた。私は「なんであんな像を作るの。見せびらかし？」と怪訝にまで思っていたのだ。慰安婦問題についてとても興味を持ったので、本田歩さんと5月に韓国に行き、ナムムの家を訪れることにした。これからまた

勉強してからそちらを訪れ、そこで現地の人のお話をもっと聞いてみたいと思う。その上で日本の主張と韓国の主張をクリティカルに見つめたい。

第二に、多文化主義には、努力が必要であるということ。カンタベリー大学の発表はとても刺激的だった。ニュージーランドの全人口の25%は海外で出生ということであった。ニュージーランドでは共生が当たり前になっているようで、様々な取り組みが行われている。日本は、これから、人口減少のため、外国人労働者をたくさん雇う。しかし、既に技能実習生の受け入れで、相互理解が上手くいかなかったり、受け入れ態勢が整っていなかったりなど問題はたくさんある。また、今回のフォーラムの目標である、東アジアの共生を考える上でも、相互理解が大前提だ。しかし、お互いがバイアスのかかった情報に左右され、互いを拒んでいるのが現状だ。そんな日本、東アジアがニュージーランドから学べる取り組みを3つ紹介したい。1つ目に、文化を理解するためのイベントだ。クライストチャーチでは、日本文化を体験できる Japanese Day や、中国のランタン祭りなどがあるそうで、楽しいイベントだそう。ニュージーランドの人は移民のおかげで、国内にいながら他の文化にも接しられるというふうにポジティブにとらえているそうだ。また、移民にとっては祖国を思い出すきっかけになるそう。2人は、「平和に暮らすためには互いの文化、信念の理解が必要」と語っていた。その国の文化に移民に合わせてもらうのではなく、移民にはそのままでもらいい、それを相互に理解し、違いを楽しむという姿勢が見られ、素晴らしいと思うと同時に、そんな世界はとても楽しそうだと思った。2つ目に、学校での教育だ。ニュージーランドでは、中学生から第二言語を学ぶそうだ。例えば、マオリ語、日本語、フランス語、スペイン語、中国語があるそうだ。言語の授業の中で、その国の文化についても学ぶそうだ。中学生では、歴史の授業で海外の国との歴史を学ぶ。先ほど挙げた、豊臣秀吉や伊藤博文についても学ぶ。そのような時期に外国語教育や異文化教育があれば、日本と歴史的に関係のある国に対しても、偏見を持つことが少なくなるのではないだろうか。3つ目に、行政の受け入れ態勢である。ニュージーランドでは移民へのサポートが充実している。例えば、移民が暮らすうえでのハードルを下げるために英語教育や求人情報を多言語で出すなどをしている。日本では外国人労働者の受け入れが急速に進み、自治体が言語教育に関して問題を抱えている。その問題は小学校でも起こり、移民の子どもたちが孤独を感じることもさえる。確かに、日本で生きていくためには日本語は必須だが、英語や相手の言語を学ぼうとせず、日本語を押し付けるのはおかしいと私は感じる。なぜなら、日本人は人口減少という問題を外国人労働者に助けてもらっているのだ。また、どこで生まれても「地球市民」であるから、どの国でも生活できるということは全員が持つ権利なのではないかと思う。国境など、単なる区切りでしかないのだ。この閉鎖的な日本とニュージーランドを比べたときに、いかにニュージーランドが寛容であるか。私はカンタベリー大学の2人の話で、ニュージーランドの多文化主義の素晴らしさを感じた。是非、現地に行って、多文化主義をこの目で見て、それを日本に広めたい。

第三に、シンポジウム司会として多くの国の意見をまとめるということ学んだ。特に最後のディスカッションの司会は難しかった。AとBグループで意見を出し合ったものの、それを一つに結論づけるのは難しいと感じた。それについてひとつ反省点があるが、議論を収束させる場所として、この「フォーラムのつながり」を生かして、自分たちは何ができるかを考えるべきだったと思う。例えば、大連理工大学がプレゼンテーションで出してくれたプランのように。そして、何かアクションを起こすまでを課題とすべきであった。そうすることで、もっと現実味を帯びた議論になり、より議論が活発化したかもしれない。また、これからのつながりを強くし、この機会がより良いものとなっただろう。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

まず、良かった点は、政治的なセンシティブな話にも、カジュアルに踏み込め、深い話ができただけである。これは、このフォーラムが「東アジア、世界の共生」をゴールとしていて、それに興味を持った学生が参加したことが原因であると思う。そのような話を冷静にでき、かつ意見の違いに興味を持って、相手の話を聞くことができる点は素晴らしいと感じた。これは文化交流だけを目的とした学生交流より、優れておりとても評価できる点である。政治的な問題を取り上げるのは、お互いが慎重にならなくてはならないが、このような取り組みがもっと広まれば、草の根から世界はよくなるのではないだろうか。市民が変われば、政治は変わるのだ。是非、お茶大のその他の交流プログラム（サマープログラムなど）でも、相互理解のために政治的な問題が取り上げられたら、交流の質が上がるのではないだろうか。このような交流をすることは、「大学人」としてのミッションなのではないか。

良くなかった点は、2点ある。第一に、一緒にいる時間がとても限られたことだ。留学生は、普段の生活から抜け、日本に来たが、私たちは普段の生活があり、アルバイトなどにも時間を費やさなければならず、放課後一緒に時間を使うことができなかったこともある。また、衣食住を共にすればさらにお互いの文化を知れたらいい。第二に、言語の壁だ。フォーラム中、留学生側は英語を話せる、ヴァッサー、カンタベリーワルシャワ側と韓国、中国でわかれてしまう傾向があった。特にシンポジウムの質疑応答の時間は顕著だった。もっと司会として、通訳をしてもらうなどアプローチができたはずだった。また、これからは自分が英

語を勉強して、今度このような機会があったときは、通訳をして両者をつなげられるようにしたい。

## 5. 東アジア・世界がともに生きることについて

東アジア、世界が共生するためには市民同士の交流が欠かせないと思った。上記のように、相手の国のバイアスのかかかっていない意見を直接的に聞くのに、一番優れているからである。

私は、そのために2つの提案がある。

第一に、留学生とお茶大生が各国で、多国間の政治的問題についてクリティカルに考える、ワークショップを催すことだ。例えば、日本であれば、慰安婦問題について、日本人と韓国からの留学生や移民を呼び、お互いの意見を言い合う。しかし、ここで気を付けなければいけないのは、ターゲットだ。大きく公表すると政治的団体なども絡んでくるので慎重になることが必要だ。でも、この企画であれば、フォーラム参加者が各国内での実践が可能で、市民の相互理解を深めることができる。これから外国人労働者が増える日本。出身国は、中国、韓国、フィリピンを始めとした東南アジアと、日本が歴史的に戦争で関係してきた国ばかりだ。このような取り組みは、お互いの偏見をなくし、気持ちよく過ごすために必要なことだと考える。是非、私もこの企画を実践してみたいと思う。またこの実践結果をフォーラムのラインで報告し合ったら、学びが広がるかもしれない。

第二に、留学生を講師とした多言語教育を大学外に広げていくことである。相互理解を深めるためには、相手の言語に興味を持つことが大切だ。それには2つの理由がある。1つ目は、言語を学ぶことで相手と話したいという気持ちが強くなるからである。私は英語が話せないときは、外国人を避けていたが、話せるようになってからは、話すのが楽しくなり、アルバイトなどでも積極的に声をかけるようになった。話したいと思えることが、対話の第一歩なのだ。2つ目の理由は、言語を学ぶことで相手の文化を理解しやすくなるからである。イングリッシュネイティブはジェスチャーが多いが、それには自由な国民性が表れていると感じる。高校のALTもジェスチャーが多く、感情表現が豊かだった。しかし、それを理解していないと「おおげさだ」という誤解が生じるのだろう。また、言語を習得することで、アニメ、映画などの文化やニュースなどのメディアの情報を相手の言語で受け取れるようになり、バイアスのかかかっていない情報を習得しやすくなり、さらなる相手の国の理解につながる。ここで、言語教育を大学外に広めることには意義がある。第二言語をフォーマル教育では学ばない、中高生、また社会人は他の言語に触れること自体が少ない。しかし、これからは日本にいても外国人と遭遇することが多くなる。その時に、例えば以前の私みたいに「ハングルは記号みたいで難しそう。変だなあ。」とっていては、相手を理解する前に障壁が大きい。そのため、私が今回感じることでできた、「ハングルって面白い」ということを多くの人を感じられたら、その人たちが日常生活で韓国人と出会ったときに、ポジティブに接することができるだろう。「大学人」として、自分たちが受けた教育を受けていない人に広めていくこともミッションである。この企画は留学生と知り合いであれば、簡単にできるはずだ。私も実践していきたいと思う。

## 国際学生フォーラムを経験して

### 1. 国際的交流的側面

今回私は同徳女子大学の学生のバディを務めたが、日本と韓国という歴史的に対立しあってきた両国の関係性について深く考えさせられるフォーラムとなった。バディの彼女は日本に生まれてから小学校低学年まで日本に住み、その後韓国に移り住んだ方なのだが、彼女が体験した経験などが非常に興味深かった。例えば彼女がシンポジウムで発表した事柄の中に差別用語があった。私は日本ではそこまで差別用語が使われていないと感じたためなぜそのテーマを選んだのか聞いたところ、日本では韓国人、韓国では日本人だと揶揄されることがあったという。差別用語は何か劣った対象を言葉にして人を貶めるものであるが、劣ったものとされた対象にとっても、それを言われた本人にとっても気分が良いものではない。日本では韓国人であること、韓国では日本人であることが劣っている、よくないものであるという認識が少なからずあることに改めて衝撃をうけた。実際私の身の回りではそういう認識は薄く、ヘイトスピーチなどがあることは知っていたが、そういう経験をした人が周りにいなかったため驚きであった。近いが遠い国、韓国といった言葉の意味を垣間見た気がする。

また、韓国と日本との政治的問題について語る時、緊張した雰囲気を感じられたのが興味深かった。それぞれわたしたちは日本、あるいは韓国の文脈の中で生きていて、それぞれの立場からのメディアのニュースを見聞きしており、また、自分のアイデンティティに日本人であること、韓国人であることは深く根付いている。であるから日本が間違っている、こういうところが足りないなど指摘されると自分の中でないと思っていたはずのいらだちや怒りに近い感情が湧き上がってくるのに驚いた。日本を否定されると自分が否定されているような気持ちになるのはやはり自分は日本人であるという感覚が根強くあるからであろう。講演でも述べられていたが、メディアの情報を鵜呑みにしないためになるべく違う意見、ほかの国のメディアの情報をその国の言葉で知ることが必要であると思う。そして日本側の主張を当たり前のもので受け止めるのではなく、他国の視点を意識し情報を多角的にとらえていくことがこれからの時代必須であると感じた。

またこのフォーラム中での会話で国を意識する会話や発言が多々あった。例えば日本人はこう考えている、ニュージーランドではこういう習慣、文化があるということだ。今回は国際フォーラムという場であり、国の違いを意識して発表したり討論したためこの意識が強くなったが、何回も国の違いについて話しているうちに逆に同じ人間としての一体感が感じられたのが逆説的で興味深かった。国の違いを話していくとそれは文化や環境の違いだけであり、私たちが根底で抱えている感情などは共通であり同じ人間なのだという感覚が強まった。国際関係について語る際、国ごとの差異について必ず話す場面があるが、その中で必ず分かり合うことができるという確信が自分の中で生まれたように思う。

### 2. 言語使用・学習の側面

今回わたしのバディは日本語がかなり上手いほうだったのでコミュニケーションに関する障がいはいとでも少なかった。しかし簡単な表現に言い換えたり難しい単語は使わないようにするなど配慮していたせいか、日本人に比べ100%言いたいことをいうことができたかというところではなかった。簡単なことや単語だけで表現できることは難易度が高くないが、専門的な話だったり微妙なニュアンスが必要な話だったりすると自分の伝えたいことを上手く伝えられない、または伝えてもわかってもらえないかわからないためニュアンスを切り捨てて伝えるということがあり、もどかしく感じた。

また、英語圏の留学生についてバディと話していたことだが、母国語である英語で話す時と、外国語である日本語で話す時とは留学生がする話の深さが違うということを感じていた。先ほど述べたニュアンスの伝わり方が違うのと、スムーズに自分が本当にしゃべりたいようにしゃべることができるためだ。言語はあくまでツールだとは言われるが、ツールだけだと割り切ることができるのではなく、言語の特性やその言語を有する文化の違いなどで話の内容、しゃべり方などが異なるものにもなると感じた。もちろんツールとしての完成度を高めることも大事で、自分がほんとうに言いたいことを相手に伝えるためには文脈も含めた言語の学びが必要になると実感した。

### 3. 学問的学び

山本先生の講演では二元的な立場にとらわれず、境界にとどまり世界を見るという視点を知った。特に日本は島国であり、アメリカなどといったあらゆるルーツを持つ人々がいることが当たり前という環境にはない。どうしても肌の色や顔つき、言語や文化が平均的な日本人と違うと、同質化の圧力が働くことは私も自分の体験として持っている。このことをタブーとしてではなく身近な問題として周りの人にシェアできる環境を作っていくこと、そしてその環境を作っていくためにはまず自分の中に偏見はあることを認めること、

そしてクリティカルに自分の考え、その考えを持つに至った経緯などを考察することが大事であると感じた。

また、小松先生の授業では相互理解のための言語教育という観点での考え方の枠組みを学んだ。日本では外国語は英語が中心でほかに身近である外国語の韓国語や中国語を学ぶ機会は少ない。言語を学ぶということは単に読み書きや話すといったコミュニケーションの手段を学ぶことだけではなく、その言語を有する文化的、歴史的背景を学ぶことでもある。自らがその意義を意識して外国語を学ぶと同時に、義務教育や高校でも英語以外の他言語の教育を日本でも実施すべきだと強く感じた。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

フォーラムを開催する大きな意義としては、対話により相互に文化、歴史的背景、主張を理解し、仲間意識が育てられることであると思う。普段留学生とそこまで一緒に過ごすことはないので文化的背景、もの感じ方、考え方などに触れられる機会となり自分の視野が広がった。また、勉強の面だけでなく文化的交流や他国の文化について同世代から体験を直接聞くことができるよい機会であったと思う。東京観光をしたりご飯を一緒に食べることで、実際に会って過ごさないとわからないもの見方や感じ方というものを学んだように思う。また、運営としてフォーラムに携わることでどうやったらスムーズに物事を進行できるか、どうやったらより活発な討論を促すことができるのかというノウハウを体験し学ぶことができたと思う。

今回シンポジウム係を担当し、最後の全体討論では司会を担当した。そこで感じたフォーラムの改善点はフォーラム全体の方向性が曖昧なのではないかということだ。本フォーラムは天災や人災などの大災害発生時、世界の若者は何をできるかということ、そして共に生きるにはどうすればよいか話し合うものであったはずだが、ともに生きることに焦点が当てられ、災害についてはあまり触れなかったことに対して疑問が残った。また、各大学の発表の内容も方向性が一つではなくいろんなベクトルを含むものであり、最終的な結論、方向性がうまく確認できていないように感じた。いろんなベクトルというのは例えば災害に関する対応、多文化社会、慰安婦問題などの政治的・歴史的背景と対話、ごみなどの環境問題などである。東日本大震災を契機に本フォーラムは企画されたものであるから、災害というテーマをはっきりと打ち出すか、災害から発展させたテーマ（例えば今回はともに生きるなど）を主軸にすることをもっとはっきりと示したほうが良いかと考える。また、ともに生きるというテーマに関して、サブテーマを設けたほうが良いのではないかと考える。ともに生きるというテーマだと漠然としすぎてどう考えればよいかわからなくなってしまいうからだ。例えば日本であるいは海外で災害が起こった際大学生として我々は何ができるか、人災に対して何ができるか、大学生としてどのように取り組めるかなどである。また、最終的にアクションを何か起こすことをゴールにしてもよいのではないかと考える。留学生の方を含め、自分たちが今できることはこのフォーラムで話し合ったことについて友人や家族と話し合うことだと述べる人が少なくなかった。そのことももちろん大変大事だが、そこでとどまるのではなく、なにか災害が起こった際や政治的なトラブルが参加国で起こった場合、我々は実際問題として何ができるのか、今から何ができるのかというアクションを起こすことを目的としてもよいのではないかと考えた。

#### 5. 東アジア・世界がともに生きることについて

まず東アジア、世界がともに生きるためには他者の立場にたって物事を考えるという姿勢が重要であるように思う。特に私たちはなにか外国のことや政治、歴史を知る際に自国の目線から見ており、しかもそうしているという意識が希薄になりがちだ。日本にとっては大きな問題ではないと感じられること（例えば慰安婦問題など）も韓国にとっては忘れることができない屈辱的な問題であり、ところ変われば感じていること、意見も異なる。そういった事柄に対し、学生である私たちは他者、他国の視点から考え、ともに解決方法を模索する必要がある。また、それはある意味二元的な立場にとらわれている見方だということもでき、国を超えた一人の人間として柔軟に発想を転換させるという姿勢も求められると考える。

また、国や地域に対する深い理解をしていくことが不可欠だと考える。ある国際的な問題等について何も知らないということはその問題を自分の中でないものにしてしまうと等しく、他者と理解しあうには根底から基礎が足りなくなってしまうからだ。そのためには先ほど挙げたような言語からの理解、そして世界の国の歴史、文化的背景、経済的側面について諸外国に行ったり人々と交流することで理解を深めることが欠かせないと感じた。

私も一大学生として、このような留学生との交流の機会を持つこと、そして他者の視点にたち物事を考察することを日々の学びの中で実践していきたい。

## 第8回国際学生フォーラムについての感想レポート

### 1. 国際的交流的側面

6カ国からの35名の学生が今回の国際フォーラムを機に、日本で会うことになった。わたしたちは一度も出逢えると思わない人と出逢い、そして、同じ教室に集まり、同じ所へ遊びに行き、同じものを食べて、同じ課題について討論した。私たちが話し合いながら、徐々に相手から現れた独特の視点や振る舞い、話し方に注意を向けるようになった。東アジアが共に生きるためののだが、「傍目八目」が意味するように、傍観する人がより正確に物事を判断できるかもしれない。森山先生も東アジア共同体を実現させるために、世界のリーダーとしてのアメリカの視点、2回の世界大戦の主戦場となったヨーロッパの共生のための努力、多文化主義で異なる文化に寛容するニュージーランドの歩みなどを挙げながら、それらの各国から学べる点があると述べた。それゆえ、当事者の努力はともかく、傍観者の視点やアドバイスも参考するべきだという。

とにかく、不思議に国が異なる私たちが縁を結ばれた。そう、私たちが前に一度も考えたことのないことは確かに起こっていたのだ。同じ目標のために、皆の知恵と力を合わせるという協力感が感じられた。短い十日しかなかったが、今回のフォーラムに参加することで、東アジアの現状と未来についての考えを深めた。非常にいい経験だったと思う。

### 2. 言語使用・学習の側面

2日間のシンポジウムで、各国の素晴らしい発表を聞いた。そして、たくさんの深く思わせる質問をした学生にも感心した。しかし、やはり言葉は限界があることを感じた。参加者の皆はバイリンガルであり、確かに感受性がモノリンガルより高く、たとえ相手が完全に言い出さなくても分かるかもしれないが、十分に納得できるとは限らないだろう。日韓中の学生たちが発表した後の質疑応答の時には英語圏の学生がほとんど発言しなかった。また、英語圏の学生たちが発表した時に聞かれた質問を日本語で自分の言いたいことを伝えるのも難しかったし、英語で答えたら、英語にそんなに自信のない学生達にも100%分かるのも難しかったのも事実ではないかと思う。さらに、ディスカッションの時も、英語圏の学生たちがあまり積極的に発言しなかったと感じた。東アジアの歴史や状況などにそんなに詳しくないとは分かっているが、言葉の問題もあるのではないかと考えられる。だから、やはり言葉の壁を潰す必要がある。私にとって英語の勉強、日本語の勉強、韓国語の勉強をしっかりやらなければならないと切実に感じられた。

### 3. 学問的学び

各国の発表を聞いて、いろいろと勉強になった。

まず、ヴァッサー大学のウィルさんは政府を変えられないけど、我々自身が国際関係を学び、外国語を勉強することを通して自分の考えを見つめ直すことができると述べた。「自分を変えれば、世界も変えられる」にすごく共感をした。

そして、ニュージーランドの多文化主義も印象深かった。お互いの文化を理解し尊重し合うことで、共同体意識が形成できる。自文化中心じゃなくて、もっと中立な態度や姿勢が必要だと示した。

また、ポーランドの学生たちは前向きな姿勢と積極的な態度を私たちに示した。もちろん、歴史を忘れるべからず。過去の経験と教訓がこれからの未来を造るための礎石である。しかし、過去と現在を切り離して考える必要もある。共に生きるため、仲直りして、一緒に将来を作り上げるという積極的な姿勢が重要なことだとわかった。

中国の学生たちは経済面と文化教育面について細かく提案をした。深いところまでよく考えたのに先生方々も驚かれた。この日中韓大学生連合国際事業グループの構想は一刻も早く実現されればと思う。確かに、我々個人の力では政府のことを左右できないのだが、我々学生達みんなの努力でこの東アジア共同体の案はただ青写真のままだけでなく、いつか必ず実現できると信じられる。

韓国の学生達は東アジアの葛藤を解消し、連帯を構築するために各国の人々の間に、対話と開かれた心が望ましいと述べた。ただの会話ではなく、率直に話し合い、お互いに相手の立場に立って考えることが大事だと述べられた。偏見や差別などを捨て、自分の認識を改めて考え、共同体意識を持つようになれば、東アジア共生のための重要な第一歩だと私も同感している。

最後、日本側の発表は教育とメディアという二つの面から東アジアが対立する原因を分析した。各国の歴史教科書の内容の違いや教科書に含まれた政治的主観的感情が勉強する学生達にも影響を与えている。また、自国のメディアも自国だけに有利な情報しか流さないのだから、国民は正しいと言える情報がなかなか得られないという状況も言及された。そのため、「シティズンシップ教育」の重要性が挙げられた。もしも、東アジアもEUのように統一した教育政策を実施し、復言語教育を行えば、国家を超えたアイデンティティを養成できる

のではないかという案が出た。共に生きるため、まず多様性を尊重して認めよう。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

今回のフォーラムを通して、各国の学生たちがこの場で集まり、東アジア共生のために考えていろいろな提案が出てきた。対立や葛藤の生じる原因を分析し、そして私たちが一体何ができるのかについて深く考えることができた。非常に緊張していたが、皆が自分の考え方や要求などを果敢に言い出せるのと相手の発言によく理解できようという姿勢にも感心した。それこそが問題解決に繋がると思う。普段の私たちがこのようにタブーな話題について深いところまで対話できる機会や場所はほとんどない。大学生は皆様々な文化と言語を勉強してきて、異なる文化や考え方に寛容性があるので、このような対話を大学生から始めるのが最も賢明な決定だと思う。

一方、今回のフォーラムを考えてみると参加者はこのような対立を解決したい、友好的な関係を結びたいという気持ちを持ちながら参加したのだと思い、ずっと日本、中国あるいは韓国に意見を持っている人々にはどうやって対話の場や機会を作ってあげたらいいのだろうか。そんなに簡単なことではないが、もしこのような人々にも落ち着いて対話させることができればいいなと私が思っている。

#### 5. 他の感想や反省など

各国の発表以外に、最も印象深いのは山本冨里先生の講演である。私はシンポジウム原稿を編集する担当の一人なので、前もって読んでみて非常に興味深かった。確かに私たちは常に「二元法」で物事を向こう側とこちら側に境界線を引いて認識しがちだ。私たちと同じな人間は仲間で、異なるのは敵とは言えなくても異類だと捉えることも少なくないだろう。また、境界の向こう側とこちら側に関する 5 つの質問も私にとって急所を突く質問だと思う。二つだけでも一度振り返ろう。

「あなたの国の人たちが、悪いイメージを持っている国は、どこだと思いますか？」

正直に言えば、残念ながら、好きではない国は私にはある。それは反省しなければならないことだと自覚している。自分の国に悪いイメージや偏見を持っている国はもちろんあるが、日本に来てからもある国の人が食文化の違いなどがあるためアパートを借りるときの難しさが何度も耳にした。非常に恥ずかしかったのは、振り返ってみるとあの時の自分がその国の人の立場を深く考えたことがないことだ。つまり、私の潜在意識の中にも、その国のことを異だと思ったのだ。

「あなたの意見は、どんな環境（メディア・家族・学校・友達・職場など）に影響されて作られたのでしょうか？」

私たちは常に身近な人々や物事に影響されていると思う。友達や家族との関係が近いので、いつもかれらを信じ切っている。それにとどまらず、自分が受けた教育、使った教科書などもずっと疑いなく正しいと信じてしまった。もし自分が大学の日本人先生に出会えなかったら、ずっと日本人のイメージを私の勝手に思った日本人だと思うほかなかった。自分が日本人先生はいかに私たち学生に優しくしてくれたのかを友達や家族にシェアして、皆が「日本人は皆中国人が嫌で、冷たい人ばかりではないね、本当にいい先生だね」と言った。私の親友の一人でも、前はすごく日本に意見を持っていたが、私が日本語を勉強しはじめ、日本に留学してから、今の彼女もいつか日本へ旅行に来ようと考えてようになった。だから人から人への影響は我々が想像したよりすごい力があるのだ。

また、講演の日に、「緻密で洞察力のある創造的な誤解」という文が出てきた。一瞬はこの言葉はなんか違和感が感じた。共に生きるために、誤解を解消すべきではないかと思った。しかし、よく吟味すると、なんか素晴らしい文だと不思議に思った。ちょうどこの前受験準備の時に、人の「認知」について勉強したものが頭に浮かんできた。我々人間は、物事を認知するときに、いつも自分の経験に基づいて、感情や想像といったものを加えて認識するのだ。人間はあくまでも主観的感情的な生物だと考えられている。それこそが、私たちの誤解を生み出す源泉ではないかと思い、なんか分かるような感じがした。確かに我々は完全に客観的になれない。皆は誤解のままで生きている。しかし、私たちは人や物事を認識する際に、まず、ステレオタイプや偏見を捨てて表象の異同だけを見るのにとどまらず、その異同が生じる歴史、文化や背景を深く考えて、その原因を分かるのが重要だと思う。

私たち皆はもともと同じ人間だ。いろいろな事情があって、異になるのだから。

#### 6. 東アジア・世界が共に生きることについて

この題目は非常に大きな課題である。歴史や政治などいろいろな面と絡んでいて複雑だ。自分の限られた力で一応自分ができることから考えようと思う。

共に生きるために、まず人間同士の心と心のつながりを作ろう。人が自分の国の人やことしか関連しないのは不可能である。あなたはA国やB国が好きではなかったかもしれないが、A国B国のおいしい食べ物を食べはじめ、その国の人と接触しながら友達になるにつれて、きっと相手国のものや人のいいところが見えてく

る。人が完璧なものではない。広い心でお互いに異なるところを認めて理解できてこそ、心の繋がりができたのだと思う。

その繋がりを私たち大学生から作ろう。まず自分の考えを反省して見つめ直そう。自己中心自文化中心など狭いところから抜き出して、もっと広い心で相手の気持ちや考えを理解しよう。対話が順調に進むため、皆が本音を言いだせるのは大事なことだ。だから心を開いて、穏やかな雰囲気を作るべきである。対話するときにも、たとえ意見が違っててもひどいことを絶対言わない。差別単語も絶対に言わない。

それから、自分自身から周りに影響を広げよう。人は近い関係を持つ人に影響されやすいので、まず、自分の態度や考えを積極的に身の周りの人に示して、他国のいいところや自分の見聞を伝えて、かれらもきっと少しずつ変わっていくのだらうと思う。さらに、かれらもかれらたちの身近な人に影響を与えて、徐々に波紋のように広がっていく。

私は東アジア、この世界が平和で人間同士が仲よく存続していくことを痛切に願望している。自分の力がいかに微小なのかは知っているが、この世界にささやかな変わりでももたらしたい。そして、われわれ一人一人協同に努力すれば、きっとバタフライ効果になり、大きな変化をもたらすのを信じている。各国の人々の関係が親しくなり、心の繋がりが結ばれば、共同体という名前がなくても、実際に私たちは共同体だと自然に思うのではないだろうか。長い道だが、せめてまずは東アジアにおいて、どこからのひとでも、言葉や国籍の境界線が感じられず、皆は自分と同じな人間だと思えるような日が1日も早くきて欲しい。



## 国際学生フォーラムを通して学んだこと

### 1. 国際的交流的側面

国際学生フォーラムではバディ制度があるため、特にバディとは話す機会も多く、より仲を深めることができよかったです。私は、フォーラムが始まる前の期間は“WeChat”を用いてバディと交流しました。中国ではLINEはもちろん、FacebookやInstagramといったSNSの使用が禁じられており、日本でアカウントを作ることもできず、驚きました。実際に中国の学生と話す、このようなインターネットの規制がある現状に対して強い問題意識がありました。中国の若者はSNSを使いたいと思っており、さらに私のバディは、せっかく容易に世界各国の人と繋がることのできるツールがあるにも関わらず規制することは勿体無いと言っていました。インターネットの規制が厳しい中国の現状は聞いていたため、私は中国に閉鎖的なイメージを持っていましたが、同世代の中国人は日本人と同じ様な考え方であることを知り、身近な存在に感じました。実際に会う前は緊張と不安がありましたが、初対面から笑顔で話しかけてくれ、日本に来られたことをとても喜んでくれたことが印象的でした。フォーラムで関わっていく中で、食に対してのこだわりの強さ、観光スポットで写真を撮る時の妥協しないところ、といった私とは違った感性を持っている一面にも気づきました。さらに、着物を着る体験を一緒にした時には、着物の色や柄を選ぶこと1つでも好みが異なり、文化や感性の違いに触れてとても面白い経験でした。一緒に様々な場所を観光することができて、とても楽しかったです。

歓迎会では、お互いの名前を覚え合うゲームや世界各国の事情を取り上げるクイズが、特にお互いを知るきっかけとなり面白い企画だったと感じます。

海外の学生と話した時に感じたことは、日本では当たり前の日常生活の小さなことが、他の国では当たり前ではないということでした。例えば年齢の数え方が違ったり、大学生活の過ごし方が違ったりしました。特に、受験や就職の話は私にとっても身近な話題であり興味深かったです。日本の大学受験はかなり厳しいものだと考えていましたが、韓国や中国はさらに厳しい学歴社会であることを知りました。また、韓国では大学生が1年間休学をしてワーキングホリデーや旅行、アルバイトに時間を費やすことも多いと初めて知りました。就職活動は大学を卒業してから始めることも多く、日本の就職活動とは状況が異なり、大学生の生活スタイルの違いに驚きました。さらに、韓国の学生の中には日本の企業に就職することも考えている人がいて、グローバル化を感じました。

今回の国際学生フォーラムは、私にとって海外の学生をおもてなしする初めての経験でもありました。どんなことに興味があるのか模索しましたが、日本の家庭で一般的に食べるような和食のリーズナブルなお店に行った時に、多くの海外の学生が気に入ってくれて嬉しかったです。海外の学生が、地元の人にお店に連れて行ってもらえると自分たちでは探せないお店に行けてとても良いと言ってくれたのを聞き、日本を知ってもらうために特別なことをするよりも、自分たちの日常に入り込んでもらうことが大切だと感じました。

### 2. 言語使用・学習の側面

現代では世界共通の言語として英語を使う場面が多く、英語を読んだり書いたり聞いたり話したりというスキルは必須であると感じます。しかし、日本語は世界的に見ればマイナーな言語であり、ひらがな・カタカナ・漢字を使いこなさなければならない上に文法も複雑な言語であると私は考えています。しかし、今回のフォーラムで出会った海外の学生さんは、意欲的に日本語を学ぼうと思ってくれており驚きました。さらに、日本語で会話することはもちろん、日本語でスライドを作り、自分の意見を正確に述べることのできるという海外の学生さんのレベルの高さに感動しました。私たち日本人も英語学習は中学校の時から6~9年間は続けていますが、海外の学生さんの中には大学に入学してから日本語を学び始めてここまで上達したという人もいたため、この上達の差は学習の方法に違いがあるのではないかと考えました。また、一緒に歓迎会を企画した韓国の留学生は、言語の壁を超えて素晴らしいコミュニケーション力を発揮し、日本語の司会で場を盛り上げていました。企画の時にも、様々な経験を通した私にはない発想で海外の学生さんを歓迎する方法を提案していました。そのことから、私も彼女たちの母国語である韓国語が話せたら、さらに面白い意見を出し合えるのかもしれないと感じました。海外の学生さんの中には日本に住んでいた経験や長期留学をした経験がある人もいました。やはり、その国の言葉を使って生活をした経験のある人は、言語スキルも高く流暢に話していると感じました。

### 3. 学問的学び

私はシンポジウムの1日目のみしか参加することができなかつたため、残念ながらディスカッションには参加できませんでした。しかし、各国の学生さんの発表を聞いて学んだことが多くありました。

まず、私が今まであまり知らなかつた国の歴史的背景や文化を学ぶことができました。

ニュージーランドはヨーロッパからの入植者の存在により、国ができた時から多文化共生の問題に直面していたことを初めて知りました。このような起源を持つニュージーランドでは移民へのサポートも手厚く、移民の存在によって多文化共同の意識が芽生えるという考え方を持っており素晴らしいと感じました。日本も同じ島国であり、北海道にはアイヌの人や沖縄には琉球の人もいる中で、多文化共同の意識が薄いのではないかと考えます。ニュージーランドでは、ラテンアメリカの人による問題に目を向けるだけでなく、ラテンアメリカのお祭りや食べ物、踊りといった文化を尊敬し認めようとする姿勢がありました。このような姿勢は、日本が東アジアの国々と共生していく中で必要であると感じます。

ポーランドは、第一次世界大戦時には国が分裂し、第二次世界大戦には最初から参加していたという歴史を持つ国です。その中で、沢山の苦しみを味わったことを知りました。しかし、そのような歴史を乗り越えて、地理的・文化的に近い国であるチェコ・スロバキア・ハンガリーとヴィシェグラード・グループを設立したり、EUに参加したりしている現状があり、他国との協力体制を築いています。発表の中では、自国の方が他国よりも優れていると評価するような国粋主義ではなく愛国心を持つことの大切さ、さらに過去の戦争は現在の国際情勢に影響を与えるべきではないという考え方を話していました。このような考え方こそ、今の日本や東アジア各国が持つべき考え方ではないかと考えます。

次に、世界のリーダー的存在として知られているアメリカについてです。アメリカは良くも悪くも第二次世界大戦を経て日本に大きな影響を与えた国であると考えます。しかし、今のアメリカの状況はあまり良くないとニュースを見ていると感じていました。発表の中で、今のアメリカについて、国の問題を解決することが他国に示すことであると話しており、その通りであると感じました。

最後に、中国と韓国の学生の意見から学んだことです。中国の学生も韓国の学生も今の東アジアの情勢を政治的な面から解決することは難しいと感じていることがわかり、このことは日本の学生と同じであると感じました。中国の学生は学生が東アジアの共生のために組織を作るとしたらどのようなものができるだろうかということについて発表していました。まずは、その詳細な組織設計と考えに驚きました。発表の中で災害時の支援についての話があり、中国の馬雲さんが熊本県・大分県の大地震の時に多額の義援金を支援してくださったことを初めて知りました。政治のしがらみをなくすことで、お互いの優しさを感じ、日中間の関係も改善できるのではないかと感じました。また、寄付金を集めて災害時の支援をするという組織を構築する考えは、自国の利益追求ではなく世界の状況を考えた行動であり、実現すべきだと感じました。韓国の学生の発表では、韓国人の日本や中国に対する好感度調査の結果を見て驚かされました。今までの私の正直な考えでは、日本の帝国主義だった時代のことや慰安婦問題、強制徴用について、なぜここまで引き伸ばされた問題なのかと疑問に思うことがありました。しかし、20代の韓国人の日本に対するマイナスな感情や日本人の中でも歴史的な人物が印象に残っていることから、いかに歴史が与えた影響が大きかったのかを感じさせられました。

日中韓の関係を良くしていくためには、互いの国を尊敬しあうための姿勢とその姿勢を育てる教育が必要であると感じました。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

今回の国際学生フォーラムを通して感じたフォーラムの意義は大きく2つあります。

1つは、フォーラムの事前準備の段階から他の国に対する関心が高まり、積極的に活動できたことです。私の担当は歓送迎会だったため、韓国からお茶大に長期留学している留学生と一緒に歓送迎会を企画しました。私には、留学生と共に1つの企画を立案しそれを実行するという経験が、今までにありませんでした。そのため、最初は意見がまとまらず、また言語的な問題もあったと感じます。私は韓国語を話したり聞いたりすることができなかつたため、留学生同士で韓国語の会話が始まった時には少し怖気付いてしまったこともありました。また、留学生の方にも日本語を使うことが難しい場面もあったと感じました。そのため、なかなか話が進みませんでした。お互いに自分の意見を主張したいところは時間をかけて伝え合って聞き合い、それぞれの経験を踏まえた考え方を尊重し合ったことで、最終的にとてもよい歓送迎会となりました。そして何より、お互いの絆が深まりました。国際フォーラムの良い点は、学生主体の企画が多いため、学生が主体的にフォーラムに参加することができることだと感じています。

2つは、国際学生フォーラムを通して世界各国の友達ができただけのことです。今までの私は、世界共通語と言われている英語学習でさえも難しいと感じ、苦手意識を持っていました。しかし、学ぶことが難しいと言われている外国語の日本語を学び、コミュニケーションのツールとして日本語を使いこなす海外の学生を見て、尊敬すると共に、私も何か言語を学んでみたいと思えるようになりました。大学で学んでいる専門とは関係なく世界各国のことを知ることは大切であり、刺激をくれた海外の学生の存在は大きいです。忙しい中でもフォーラムに参加した甲斐があったと強く感じました。また、私は昨年にアメリカの大学で行われた短期研修に参加し、実際に外国に行かなければ感じられないことがあると知りました。そのため、海外の学生が母国で日本語を学ぶだけではなく、実際に日本に来ることによって初めて分かることも多いと考えます。

そのような意味でも、フォーラムを開催する意味があると感じました。

次に、国際学生フォーラムさらに良くするための改善点について提案します。

昨年度までの反省を活かし歓送迎会ではバディ以外の多くの学生と交流ができるようにグループを工夫しました。しかし、やはりバディ以外の学生と話す機会は少なく、全体に対する日本人の学生の割合が多かったので日本人同士で会話してしまう場面も多かったように感じます。さらに多くの海外の学生と話したかったです。また、10日間という期間はとても短く、お互いのことを知るためにもう少し長い期間のフォーラムを開催できれば良いと感じました。10日間の中で様々な日程や体験を組み込もうとした結果、ハードスケジュールとなり海外の学生さんの体力的にも疲れが見られたと感じます。また、国際学生フォーラムは準備する過程でも学べることが多くあるため、日本以外の国でもフォーラムが行われ、さらに日本の学生が海外に行く機会も増えれば良いと感じました。

## 5. 東アジア・世界がともに生きることについて

シンポジウムを通して、なぜ東アジアにおいて日本・中国・韓国の3ヶ国の仲が深まらないのかということ深く考えさせられました。

特に強く感じたことは、歴史的な問題を引きずって今の状況をよりよくできないことは、どの国にとっても無意味であるということ、しかし、歴史的に日本が他国に対して行ってしまったマイナスな行動は日本人が思っている以上に他国の人にとって影響があったということでした。

ポーランドの学生の発表で、世界大戦下で国が分割してしまった苦い経験がありながら、それらを克服して今のポーランドをよくするために、他国との協力体制を築いているという話がありました。私自身の勉強不足で歴史的な知識は乏しいですが、世界大戦において誰が悪くて誰が正しかったかということを考えても、結局は自国の利益を主張しあうだけになると考えます。もちろん、間違った行動はしっかりと謝罪し考えを改めるべきです。その上で、互いに悪い面だけを押しつけ合うのではなく、互いの文化や考え方を尊重し合い、お互いの主張を出し合った上で一番良い方向に落とし込んでいく必要があると感じました。

他の国では第二外国語を小さな頃から学んだことによって新しい文化に触れるきっかけとなっていることを知りました。また、留学の促進によって学生が他国についての知識を深めて東アジア一帯としての共同意識を育むべきではないかとの意見がありました。私もこの考えに賛同したいと感じ、今までは英語圏以外の国に留学に行く意義を感じられなかったと考えていましたが、このフォーラムをきっかけに他国の言語を学ぶことには大きな意義があると考え方が変化しました。教育は国の政策の影響を直接的に受ける側面であり、その教育を受けた子供たちが作る未来に大きな影響を及ぼします。そのため、東アジアが共生していくためには今の教育制度を見直し、互いの国を尊敬し合えるような歴史の教育、考え方の育成を行うべきだと感じました。

## 6. まとめ

今回の国際フォーラムに参加したことで、私自身の考え方が大きく変わりました。海外の学生との交流は、視野を広げ自分の考えを改める良いきっかけとなります。特に、専門が理系分野であり国際情勢や言語学習に興味がなかった私のような学生は、日本にいながら海外の文化や考え方に触れる良い機会でした。これからもこのフォーラムで関わった海外の学生と繋がり、意見を交換し合えたら良いと感じます。また、さらに国際学生フォーラムが発展して、多くの後輩がこの企画に参加してくれることを願っています。

## 国家主義を超えて—多言語獲得の重要性

### 1. 国際的交流的側面

大学生同士の交流を通じて同じ年齢代の学生の考えを知ることができました。国境を越えて皆が共有し、共感できる点があることに驚きました。例えば、慰安婦や歴史問題のような敏感な部分において、「韓国人」や「日本人」としてではなく、同年輩の「大学生」として話し合うことができました。その経験を通じて、「共感」の大事さを感じました。現在の諸問題に対して、国家主義的観点ではなく、人間対人間として接する必要があると思いました。

### 2. 言語使用・学習の側面

フォーラム中は英語や日本語が使われましたが、英語学習に対するモチベーションを育てることができました。多くの部分において日本語で行われたため言語使用に不便はなかったが、日本人だけでなく他国の学生たちともより深い交流のためには第3言語の学習が不可欠だと感じました。また、英語やポーランド語など様々な言語を学習し、文化を知り、接することで見聞を広げたいと思いました。

### 3. 学問的学び

日本人学生の発表を通じて、「シチズンシップ」というキーワードについて学ぶことができました。国際化時代が到来した今、「韓国人」「日本人」「中国人」ではなく、「世界人」として私たちがどのような観点を持つべきか、知ることができました。日韓中の国家的対立は絶えず、対立している問題においても国家主義的な観点を捉えやすいと思われる。それは、私たちが「韓国人」としてのアイデンティティが確立しているため、自国中心的に考えやすくなってしまわないかと思えます。それは、国の義務教育として定められている歴史教育なども関係していると思えます。したがって、自国中心主義を捨てて視点を拡張するためには、多言語の習得が必要だと思えます。私も日本語を勉強してから、日本人の立場からの歴史、社会、文化などを知り、今まで「韓国人」としてだけ世界を認識した私自身の視点を広げることができました。一言だけできるということはその言語によってのみ情報を習得することができるということなので、世界人としての市民性を養うためには、多言語必須教育がこれからの課題ではないかと思えます。

### 4. イベントとしてのフォーラムについて

私は今回のフォーラムで、歓送別会担当として参加しました。最初は、このような企画がはじめてだったためとても苦労しましたが、チームリーダーと他のメンバーとの協業で歓送別会を成立させることができました。今回のスタッフとしての経験は、協力心と企画力など様々な方面で成長できる機会でした。反省点は、送別会の準備が不十分だったためイベントの流れがきれいではなかった点です。また、送別会を開く挨拶の言葉の準備が足りなかった点です。しかし、他のメンバーと国際教育センターの方々、先生のおかげで、送別会を無事に終わらせることができました。

### 5. 東アジア・世界がともに生きることについて

このフォーラムが終わって、二つの点に気付きました。一つは、東アジアと世界の諸問題を解決するには、現在の国家主義から脱しなければならないという点です。「韓国人」「日本人」の観点を捨てることで現在の問題を私たち個人の、身近な問題と認識できるからです。2つ目は外国語教育の重要性です。なぜなら、言語はすなわち文化であり、それは個人のアイデンティティにつながるからです。韓国語だけを話せられたら「韓国人」になりやすいですが、様々な言語ができれば国家主義的な「韓国人」よりは国家主義を越えた市民性を育てられる可能性が生じると思えます。外国語を勉強することで、単に色んな言語を使うだけでなく、一ヶ国語では見られない世界を見ることができるということを改めて感じました。

## 第8回国際学生フォーラムを終えて

### 1. 国際的交流的側面

フォーラムが始まってみるとバディと一緒に過ごす時間が思っていた以上に長く、私のバディは男性だったこともあって正直少し不安があった。しかし、これまで行ったことのない場所に行ったりバディを通じて他の海外学生とも仲良くなれたり、バディシステムのおかげでより深い交流ができた。

海外学生と一緒に様々な場所に出かけたが、ただ外国から日本にやってきたお客さんとして彼らを案内して回るというよりも一緒にいろんなものを見聞きしながら楽しむことができた。

江戸東京博物館では、どういうこと？と質問されるのに対して説明するために普段より熱心に展示を見ることができた。他にも、より多くのものに触れてほしくて、いつもと変わらない街中を歩いているだけでもなんとなく何か面白そうなものはないかと周囲を注意して見ている自分がいた。国際交流は自国・自文化を知ることだと言われるのをよく聞くが、こういうこともあるのだなと思った。

行く先々でこれは何か、とか日本語でどう言うか、といった話をしながら、同じように他の国や言語の話もできた。お台場を訪れた際に「自由の女神像」を日本語・英語・中国語・韓国語でなんとと言うか教え合っただけでも繰り返し言い合ったことが印象に残っている。

今フォーラムでたくさんの人と出会って気づいたことは、趣味や好きなものを持つことが人との関係を築く上で強みになるということだ。私はこれといった趣味がなく、ものすごく好きなものとかハマっていることもないのが悩みの一つだ。新しく出会う人同士でありお互いを知らない中、どんなものが好きかということでは会話のきっかけとしてよく使われる話題だ。なんでもないようなことだが、それは国を超えても変わらないのだなと改めて感じた。

ドラマ、キャラクター、学問分野など、好きなものについて話しているのを聞くのは楽しいしそれを通じてその人のことを知ることができる。私もバディと親しくなるのに彼の好きなキャラクターを知ったことがとても役立ったと思う。彼のためにそのキャラクターを探していたら私までそのキャラクターが好きになったような気がしてくるから不思議だった。

フォーラムが終わった今も、彼らが好きだと言っていたものを見つけるとその人やエピソードを思い出して少し嬉しくなる。別れた後にまで新しい思い出を作れるようで、なかなか会えない距離での友人だからこそ好きなものの伝染はすごく素敵な贈り物だと感じている。

### 2. 言語使用・学習の側面

私がこのフォーラムに参加した理由の一つに、海外学生との交流において彼らが学んでいる日本語だけでなく、自分が勉強している英語や中国語を使う機会が得られるのではないかと考えたことがある。しかし、フォーラム期間中に日本語以外の言語で完全な会話をすることはなかった。それだけ海外学生の日本語能力が高かったからだ。

初めてバディの学生とメールやラインで話した時から、その日本語力の高さに驚いた。後から聞くと日本の大学に数ヶ月間留学していたことがあるという人もいた。彼らと日本語で会話やテキストメッセージのやり取りをする中で、「日本語学習者」と一言に言ってもそれぞれその人らしい日本語の話し方の特徴があるということに気づき、面白く感じた。私がたくさん英語で話すのをネイティブが聞いたら、同じように私に特徴的な話し方や言い回しに気づくのだろうかと思った。

また、そんな日本語上級者の海外学生の中でもやはり他の人の日本語レベルが気になるらしく、英語圏の学生から「韓国人の日本語は特別だ」というような話を聞くこともあった。聞くと、韓国語と日本語は言語的に近いから韓国人の方がスムーズに自然な日本語を話せるということだった。よく英語は日本語とかけ離れた言語だからこそ日本人には習得が難しいのだと言うように、日本語を学ぶ英語話者も同じことを思うのだなと少し親近感を覚えた。

私の英語に対する苦手意識と海外学生の日本語力の高さによって、私が英語を話すことはほとんどなかった。英語で話されるのに対して相槌を打ったり、日本語で返したりということは多くあり、そんな時英語で返そうと思ってもなかなか思い切れなかった。やはり外国語で発信するのは能力としても気持ちでも難しいと感じた。

英語に関しては、些細なことだが、「遺伝」と言う言葉を見たバディに意味を尋ねられ、咄嗟に高校時代に使っていた英単語帳に載っていた言葉を思い出して”heredity”と答えたらそんな言葉は知らないと言われたことが印象に残っている。間違えたかなと調べてみてもやはり合っていて、私がネイティブに知らない英単語を教えたということでお互い驚いた。高校時代の英語の教員に会ったら、あの単語は普通使わないらしいですよ、と教えたいような楽しい気分になった。

### 3. 学問的学び

山本先生の「誤解」のお話がとても印象に残った。国際交流・異文化交流だけでなく、どの場面のどんな人間関係についても当てはまる重要な示唆だと感じた。

私は我が強くて頑固なところがあり、自分と反する意見を持つ相手に冷静に接するのが苦手だ。素直に他人の意見を受け入れることもなかなかできない。私は他人と接する時、自分との違いにこだわらないようにするためによく「所詮他人なのだから、完全に分かり合うということは不可能だ。私と相手は違うと認識した上で、相手を知ろうということに留めよう。」と自分に言い聞かせる。

そんな私にとって、あの言葉は力強いヒントに思えた。「完全には分かり合えないだろう」と自覚している点では似ているかもしれないが、大きく異なる考え方だった。「知る」という私の考え方は向こうからこちらに向く一本の矢印なのに対して、山本先生の「誤解」は向こうとこちら、互いに向く二本の矢印で表されるものだった。

また、自分の認識をあくまでも「誤解」と捉えるという謙虚さも私に足りないことなのかもしれないと気付かされた。私は相手の考え方を理解しようとする・理解できると思うことは傲慢で、「知る」に留めるべきだと考えてきたが、それは単に受動的で無責任な逃げの姿勢でもあったかもしれないと考えるようになった。

ただ自分から見えた部分だけを受け取るのではなく、注意深く想像力を働かせて、自分なりの認識を持つことを意識したいと思った。そのような意識を持つことが他者との関係をより深めるために有効かつ実践しやすいことだが、やはり反省や訓練が必要なのだということも改めて感じた。

小松先生のご講演を受け、日本で多言語主義を実践するならどの言語を取り入れるのだろうかということをはぼんやり考えた。今の日本では、例えば街中の言語表記をとってみると一番に英語、次いで中国語と韓国語、という感じだが、日本が共に生きている市民と考えるとそれでいいのだろうか。これから結びつきの強まる国があればその言語が浸透することもあるのだろうか。やはり、地理的・言語的な近さからも中国語と韓国語だろうか。言語教育なども実現すれば国家間の関係や国民のイメージなども変わるのではないかなどと想像した。しかし、外国語を取り入れようとしたらこんな反発があるだろう、というイメージもまた想像された。そこまできて、まだまだ日本は多文化共生を実現していくためには社会的に未成熟な部分が大きいだろうと思った。

小松先生が挙げられていたベルギーとカナダの事例から、社会が変わっていくためには市民の意識が必要不可欠だと学んだ。こうした学びの機会を得た私たちが、その意識を持つ市民になっていかななくてははいけないと思う。

### 4. イベントとしてのフォーラムについて

フォーラムが始まってからシンポジウムまでの数日間で参加学生と予想以上に打ち解けられたし、たくさんのお話を話せた。一方で私の中には、親しくなった分シンポジウムでデリケートな話題を扱うのに率直に発言しにくくなるのではないかと心配も生まれた。しかし、実際にはそれまでの交流があったからこそスムーズに議論を進められたし、友人だからこそ歩み寄りたいたいと思えて、互いの発言をより尊重し合う姿勢が持てたと感じる。また、それまで笑っておしゃべりしてきた友人たちの真剣で知的な一面を見られたことも新鮮だった。

短期間のうちに複数の国から集まった者同士が、楽しく親しめる友人と、国家間の問題について議論する相手を両立する関係を築けるとするのは、このように丁寧準備された環境ならではのだろう。

今フォーラム中、様々な場面で海外学生/日本人学生とか「〇〇人」というように、その国籍や属性で括られることが多かった。私はその点になんとなく違和感を覚えた。

今フォーラムで私が得た一番の成果は、偏った先入観で判断せず、まずは一個人同士で関わりあってみることで他人との壁が低くなると学べたことだと思っている。また、私はシンポジウムを通して、同じ国の人だからといって共通した認識を持っているとは限らないということを実感した。

だからこそ、交流や議論の際にむやみに「〇〇人」と分けたり選んだりすることは、その人個人と向き合うためにはあまり意味がないか、むしろ逆効果になりうることなのではないかと感じた。

国によってそれぞれ異なる常識や教育の中で育ってきた学生が議論するという点を要とするならば国籍・属性にこだわることは避けられないと思うが、国を超えた友情を結ぶことで連帯感を生むためには、やはり個人としての交流が一番であると考え、もう少し配慮できるのではないかと感じた。

### 5. ツアー担当として

私はホスト校の学生として、ツアーの企画・運営に関わった。学びが得られてかつ日本人学生も海外学生も楽しめるだろうという内容を考えるのは意外に難しかった。行ってみるまで参加者の反応が分からず不安で、みんなが退屈してバラバラになってしまうという想像も何度もした。しかし行ってみると友人同士で楽

しく過ごせているようで、大きなトラブルもなく無事に終わって安心した。

日本体験ツアーで私が引率したお台場コースでは昼食にたこ焼きを選んだ。もう一方のコースの昼食に比べて地味な食事ではないかという不安もあったが、当日、私のパディがいちばん好きな日本食はたこ焼きだと言ってワクワクした様子でたこ焼きを選んでいるのを見てとても嬉しい気持ちになった。

自分が企画して、行き先もすることも全て前もって把握していたけれど、実際にみんなで行ってみるとその場で生まれる会話や手助けのおかげで予想していたよりも充実したツアーになった。

自分自身もとても楽しめて、参加した人たちからも楽しかったと感謝の言葉をもらえて、ミスも多かったが、ツアーというフォーラムの大きな一部に携われてよかったと思った。

## 6. 東アジア・世界がともに生きることについて

シンポジウムでは自然と日韓関係の問題が話題の中心となったが、国家間の認識の違いが最も大きな障壁なのだと感じた。それについて話していく中で、利害関係が絡む政治での考え方と市民としての認識を一致させなくてもいいのかもしれないと思うようになった。

そういった話題に関して認識を形成する大きな要因は教育と報道だろう。私たちは一つの可能性として、歴史教科書において国家間で意見が対立する問題については両者の考え方を併記すること、当事者の証言を載せることを提案した。そうすれば、学び手は立場によって様々な見方をしているということを合わせて知ることができ、その上で自分がどう捉えるか、必ずしも自国の立場によらないその人なりの意見をより多くの人に持たせることができると思うからだ。私は数ヶ月前にジェンダー系の授業で慰安婦問題について教わるまで、日本は正式に謝罪し、日韓の間で解決したものだと思っていた。中学生の時、社会科教員に「日本は謝ってお金もたくさん支払ったのに、韓国はお金欲しさにいつまでも騒いでいる」と聞き、様々な報道で日本の政治家が韓国の慰安婦像などに対し苦言を呈する姿を見ていて、それが事実なのだと信じてきた。一方の考え方にしか触れられなければ、対立を深めることにつながるだろう。異なる見解を持つにしても、それに対する他の見解について触れることは必要だと思う。

また、歴史において加害した側面は隠されて被害者意識ばかりが強調されやすいのではないかという意見もあった。シンポジウム中にドイツの例への言及も度々あった。ドイツにおける負の歴史を風化させないための工夫が様々な施設や町中の風景に当たり前のように取り入れられていると聞いたことがある。日本は国家として非を認めないというだけでなく、国民の自覚も足りないと感じて改めた。日本人の多くは、先の大戦での自国の振る舞いについて現在の自分たちとは切り離して、愚かであったと冷めた目線を向けているように思う。注意深く見守っていなければ同じ過ちを繰り返す可能性を自分たちも内包しているのだという自覚を日本の中に根付かせなくてはいけないと強い危機感を持った。

今フォーラムには東アジアの外、アメリカ・ニュージーランド・ポーランドからの参加者もいた。彼らにとって東アジアの問題は遠いことだっただろう。しかし、彼らはシンポジウムにも積極的に参加し、自らの経験をもとにたくさんの可能性を示してくれた。例えば私がEUの抱える問題について日本の経験をもとにヨーロッパ人の前で発表しなさいと言われても到底できる自信がない。それだけのことをできる彼らの確立したアイデンティティや国際市民としての自覚などは見習うべきものがある。また、日本に興味をもって日本語を学んでいる彼らが日本の抱える国際問題についても真剣に考えてくれたということを嬉しくも感じた。このことから、世界で起こるあらゆる出来事を人ごとだと無視せず、少しでも自分に近づけて受け止めることが共生に必要なだと実感した。

## 東アジアでの連帯感を築く

### 1. 国際的交流側面

私は長期の留学経験があまりなく、今回の10日間のフォーラムは、短い時間ではあったが多くの留学生と初めて密に関わられた機会だと終わってみて感じた。特にツアーや自由研修では、1人の友達として相手をよく知る機会になった。母語ではない日本語を話す留学生と、自分たちの国の言葉を話す日本人では、どうしてもツールの不利・有利や心理的なギャップがお互いに生じているはずなのに、仲良くなればなるほど冗談や少し真面目な議論などもよくするようになって、個人的には必死で言いたいことを伝えてくれようとしている留学生に対して、申し訳ないという気持ちを感じてしまった。私が学んだことはもちろん数多くあるが、やはり立場的にはホストの側面が強かったのかもしれないと感じてしまった。それはもちろん一括りにお茶大生側といっても人それぞれで、英語に抵抗のないひとは積極的に使ってコミュニケーションをとっているものもいたし、やはりお互いの母語ではない言語で対話することは正確性には欠けるかもしれないが、心理的なギャップはやはり少なくなると感じた。だが、シンポジウム中などは特に顕著にみられたが、学生同士でまた得意な人が通訳や、わかりやすく言い換えていて、多少の言語能力差を対話することに重点を置いてカバーしようと協力しあっていたのは、本当に学生のフォーラムゆえの醍醐味ではないかと感じた。言語的な側面においての国を超えた学生交流では日本人学生として少し反省点はあったものの、行動や対話から学べることはとても多かった。もちろん各国のほんの一部の参加者でしかないのですが、それによってこの国はこうだと決めつけることはできず、個人の性格的な影響も多く個と個の関係として捉えるのが正しいが、韓国人は日本に慣れているからか、また友達が多いからかわからないがとても、人と人との距離が近く、フレンドリーで親しみやすくユーモアが溢れる方が多いのが印象的であった。その要因として若者文化や社会構成が似ていたり、日本人の仲良い友達と接する感覚と似ていて、日本語も上手であったので普段の会話ではあまり外国人だと意識することは少なかった。時々お互いの国の違いなどを議論する場面があり、とても興味深く面白かったのだが韓国では、日本以上の学歴社会・スペック重視の就活、小中高の部活動に対する考え方、習い事の意義など似ているようでやはり違う部分も多くて、異文化の人とだからこそ、一つのテーマについて話した時にとってもさまざまな視点や知識が得られて新鮮ですごく面白かった。またワルシャワ大学や大連理工大学の中国の学生は同じ学校の子同士で移動時間などは話すことが多くて、個人的にお話しする機会としては韓国の学生と接する機会が多かったのだが、東京観光ツアーや自由研修の時に、各国共通の話題で意見交換ができてとても面白かった。韓国人と違って友達との親しみ方に違いを少し個人的に感じたので、一緒に盛り上がるという接し方ではないが、ポーランドの文化や最近の中国に関する情報などを丁寧に話してくれて、お互いにとってとても有意義な時間になったと感じた。

### 2. 言語使用・学習の側面

言語使用に関しては、私は基本的に日本語を使用していたので特段苦勞することはなかったものの、だからこそ留学生の学びに比べれば得られるものは少なかったとは感じる。しかし、日本語能力が全員ものすごく高く、自分が英語も韓国語もまた中国語やポーランド語が達者でないにもかかわらず、こんなに多くの人とプライベートな話、学問的な話において意見交換できたのは、私にとってはものすごくいい機会となった。とても仲のいい他国の友達ができたことがあまりなかったもので、10日間をともにすることで過ごしている環境は違うけど、同じ人間としてお互いのためになるようなことができたらいいなという風な感情をすごく持つようになったことが1番の変化であった。

### 3. 学問的学び

国家の中で言葉の壁や、民族的な対立がもともとある中、それを教育や政策の中で乗り越えようとしてきたという話をはじめ、先生方や非アジアの国の学生達に発表してもらい、改めて、日中間には物理的距離はもちろん無意識のうちに「私たちはあなたたちとは違う」という排他思考が働いていることを改めて感じた。国内の外国人が増えているといっても、多文化政策や移民政策をとっているわけではなく、当然ではあるが基本的に1国家1民族のナショナリズム的な考え方があり、それに基づいて幼いころからアイデンティティが形成されるので、簡単にアジア国家の連帯意識を国家を超えて育むことはできず、とても難しいと感じた。それに加え、歴史的な出来事に基づく嫌悪感を抱いている人は、アンケート調査に基づくグラフにもあったように国民全体で見ればものすごく多く、国家間としてはやはり民意が政治に反映されるのでこのような共同体意識を育むためには、上からの政策にも支持が得られず限界を感じる可能性が高いことも改めて感じた。そのようなことを踏まえて、韓国・中国・日本の学生は草の根的なアプローチや学生主体となったアプローチで、解決しようとする案をとっても具体的に、実現可能性に近い段階まで緻密に練って発表していたので、私たちも、これは「仕方のない問題」と片付けることなしに、とても希望と期待に満ちた有意義な



議論ができたのではないかと感じた。

#### 6. イベントとしてのフォーラムについて

良かった点はまず最初と最後の歓迎会や送別会がとても良かったと思う。歓迎会においては、グループ分けをして、ゲームを数多く取り入れていた点です。司会の方が積極的に学生や留学生の方にマイクを回すことで、お互いの緊張が解け、みんなが笑いに包まれていたので、それを機に話しやすくなった子もたくさんいて、また直接話せなくてもクイズについて話している様子から、全体として仲が深まった感覚があった。また送別会ではお互いの思い出を中心に書き出すというテーマで、みんながこんな所に行っていたのだと知ると同時に、バディに直接感謝の気持ちを伝えたりだとか、思い思いの楽しみ方ができる企画でとても良かった。フォーラムの改善点としては、シンポジウムを三日にしてみてもいいと感じた。二日間を発表に当て、それを踏まえて軽く事前に課題を出してから三日目を丸1日議論に当てることで、さらにじっくり、深く、具体的に議論できたのではないかなと感じた。そこに当たって、本格的に午前は教室を分けて、議論し、午後大部屋に集まって全体で発表して互いに意見し合うという、かなりがっつりした議論を行ってもいいのではないかと少し感じた。

#### 6. 東アジア・世界がともに生きることについて

私はやはり若者や学生が中心になって行動していくことが最も有効な解決策かなと感じた。歴史認識を踏まえ、忘れるべき問題ではないが、これからのことに対して連帯していく必要性を若いの方が感じる点と、今後の政治や民意を作っていく主体となっている世代であるからだ。私たちが日常的にできることは数多くあり、大学でこのような勉強をしている学生だからこそ比較的異文化に寛容で、自国中心主義であることは少なく、意識している人も周りに多いように感じる。しかし私たちの行動が大人や国家としての意見に影響力を与えることは滅多になく、一つの組織を作ることの意義はとても感じた。最初は経済や法的な権限がなくとも、もっと大規模な形で、日中間の学生たちが具体的な歴史問題や教科書について取り上げることで、次第に協力してくれる人たちも出てくると思うからだ。

## 共生するための第一歩となった国際フォーラム

### 1. 国際的交流的側面

個人的なことではあるが、やはり韓国の学生とはすぐに打ち解けることができると改めて実感した。もちろん他の国との学生ともすぐに仲良くなるが、なぜか初対面でも盛り上がるのは必ず韓国の学生だ。自分でもまだ理由はわかっていない。しかし、韓国の学生にいつも私みたいな優しい日本人はいないよと言ってくれるのは本当に嬉しい。個人的な例ではあるが、このような心のこもった交流を韓国、中国、日本人の間で行えば東アジアで抱える問題もすぐに解決しそうである。今回の海外のフォーラム参加者は日本での留学経験がある学生が多くいた。関西で留学していた学生に関西特有の訛りがあることも驚きだった。また、全員が必ずしも日本語を学びたいと思って学習をはじめたのではなく第二希望ではじめた学生もいた。しかし、こうして主に日本語を中心にして行われるフォーラムに参加してくれるのは日本側としても嬉しかった。私は、ツアー担当だったが企画を立てたことは今後海外の学生を案内する時の良い経験になると思った。やはり定番とされる場所は必ず海外の学生も訪れている可能性が高い。限られた予算の中、おもてなしも心で場所を探すのは大変だった。しかし、ツアーの最中、学生が至る所で写真を撮って感動していた様子を見ることでやはりやりがいを感じた。今回のフォーラムで感じたことは、私たち日本側としてはホスト国として常に100パーセントのおもてなしをしなければならないということだ。このおもてなしが、相手国に対する信頼につながり、理解を深めることになる。これは、今後私が海外の人と接する時一番大切にしたい考え方となった。

### 2. 言語使用・学習の側面

海外の学生の日本語レベルの高さに驚いた。そして、日本人も第二言語、第三言語をより流暢に話す能力が今後の国際社会の中で問われていると感じた。やはり多くの言語を話すことができれば、その分自分の世界は広がっていくと思った。他言語が分かれば、その国の母国に関するニュースを母国語以外で読むことができより客観的に考えることにつながると思う。まだまだ勉強中であるが、私自身英語、韓国語はもちろんフランス語や中国語にも今のうちに勉強を始めたいと思った。学習面からは、海外の学生の母国に対する関心の強さを感じとれた。特に韓国の学生が慰安婦問題や徴用工問題を現代に生きる私たちが解決すべき課題だと挙げていたのは衝撃だった。日本人の学生は正直、政府や国に対しての関心が薄い。しかし、海外の学生は母国の歴史や政治に強い関心があり勉強している。これは日本が見習わないといけない点だと思った。私自身、大学生になりニュースや新聞をみる機会が減ってしまった。正しいニュースを知らなければ、このような海外の学生が集まる場で日本人の立場としての発言がしにくくなると思った。日本人が国際社会でより対等な立場にいるためにも、私たち自身が国内に高い関心を持ち続ける必要を感じた。

### 3. 学問的学び

#### 3.1 講演について

私が大学生になる前は、韓国の音楽やドラマは好きでしたが韓国人に対して良い印象が全くなかった。今になって考えてみると、これは全てメディアや家族など私の周りの環境によって影響されたものであった。当時の私は、周りの意見が絶対的に正しいと思っており疑う余地すらなかった。つまり、この意見は私自身の目で見えて考えたことではなかった。講演では「あなたの意見は、どんな環境に影響されて作られたものでしょうか？」という問いが提示されていたが、私の場合は上で述べているように100%、メディアと環境によるものだった。やはり改めて、メディアの影響力の強さを感じた。きっと私の家族もメディアに影響されていたと思うからだ。ここで思ったのは、先生も仰っていたが分かりやすい意見に飛びついてはいけないということだ。やはり、頼れることは自分の目しかないと考える。私は大学生になり、たくさんの韓国人と友達ができる。日本人の友達以上に仲の良い存在ができて、やっと韓国人全てが悪い人ではないと実感することができた。私は遅かれ早かれ大学生になって気付いてよかったと思っている。また、先生のお話の中でグローバル化について仰っている部分があった。私の周りにもたくさんの海外の人が生活しており、日々グローバル化を実感している。しかし、先生曰くこれは「ローカル化が同時進行している」と述べていたのは印象的だった。グローバル化により海外旅行や海外の人と接する機会が増えていると思う。私自身、今までにタイ、ベトナム、カンボジア、韓国などの国を訪れたことがある。また、お茶大に入り数えきれない海外の学生と接してきた。その時に、必ずいつも感じてしまうことはやはり日本は素晴らしい国だということだ。つまり私自身がグローバル化とローカル化が同時進行していると感じていたことだ。しかし、私はこの日本に対する思いが「ナショナリズム」ではなく「パトリオティズム」にならないといけないと思っている。確かに強い愛国心は排他的な考えを持つことになるが、国際人とはやはり母国のことを想っている人ではないと思う。母国を大切に考えることのできない人は相手国も尊敬することができないと考える。私は

この日本を大切に思う気持ちをパトリオティズムに捉え直し今まで以上に相手国を尊敬できる国際人になりたいと思った。

### 3.2 シンポジウムについて

全体を通して私が一番強く感じたのは、教育の重要性だ。個人をつくる核となるのは、やはり受けてきた教育の質だと思った。教育のあり方で私たちは世界中簡単に一つにまとめることができるし、簡単に相手国を憎むこともできる。だからこそ、歴史を正しく学ぼうとすることが私たちに必要だと思った。幼い頃から受ける教育だからこそ、国としてもより公正に教科書を作成してほしいと強く思う。反日感情も嫌韓感情も全て歴史の教科書で学んできたことをクリティカルに考えたことがなかった人が抱いているものだと思うからだ。歴史について正しく教育されてきたから、成功している例がドイツとポーランドだと思った。ポーランドの学生は繰り返し「昔のドイツと今のドイツは別である」と教えてくれた。また、祖母をアウシュヴィッツで亡くされたポーランドの学生アリシアさんも今のドイツもドイツ人も憎んでいないと言っていたのはとても印象的だった。東アジアに住む私たちも真の歴史を学び、互いのことを許し合う姿勢を持つことがともに生きるための第一歩だと考える。確かに悲しい歴史は忘れてはいけないことであり記憶し続けなければならない義務が現代人にはある。しかし、あるタイミングで過去と現在を切り分けて考えることがグローバルな中で生きる私たちに必要な能力だ。文化的共通部分をたくさん持つ東アジアの私たちだからこそ、結束した時の力は強いと思う。私たちは母国の歴史をクリティカルに見つめ、メディアを信じすぎないことが共生するための第一歩だと思った。

## 4. イベントとしてのフォーラムについて

### 4.1 良かった点

まず一つ目は、タブーであった歴史問題について中国、韓国、日本の学生が各自思っていることを発言できたことだ。中国の学生から出た意見の中で、「中国、韓国、日本、三ヶ国違う意識でもよい」と述べていた場面があった。これは、私の中で新鮮だった。今まで私は、歴史認識にしても各国統一すべきだと考えていた部分もあった。しかし中国の学生は私たちの歴史認識が統一されることは不可能だと述べながら、共生するためには違う意識のままでも可能であると意見していた。また、韓国の学生は慰安婦問題を人権問題として捉え日韓問題の改善を訴えていた。母国と日本の関係改善をこんなにも強く願う学生がいたことは、日本人の私も嬉しかった。二日間という中で、こんなにも東アジアの関係について濃く学ぶ経験は私の中で間違いなく一生の財産となった。

二つ目は、アジア以外の国が東アジアで生きる私たちにヒントを与えてくれたことだ。ニュージーランドの多文化主義の考え方、アメリカの自国第一主義の考え方は間違っていること、ポーランドのドイツに対する考え方についてだ。私の中で、一番参考になると思ったのが上でも述べたがポーランドの考え方だ。私たち東アジアにも互いを許そうと思う歩み寄りが必要でありそれが大きな解決策となる。また、ニュージーランドの学生が移民は国の心臓であると発言していたことも印象的だった。それほど他者を理解しようと思う気持ちが異文化交流に大切だと感じた。

三つ目は、約一週間という限られた期間だからこそ内容のつまった交流ができたことだ。毎日日本側と海外側の参加者は授業以外の部分で交流をしていた。私も終わりが見えている交流だからこそ瞬間瞬間で楽しんでもらいたいと思うことができたし、海外の学生もそれを感じ取ってくれていた。私にとってたいしたことではなかったが、韓国の学生に池袋を案内したときにすごく感謝されたことを覚えている。次は私が韓国に行った時に案内してね、おうちに泊めてねという韓国語の学生はもちろんと答えてくれた。サマープログラムでも同じような経験をしたが、この国際フォーラムの方が少人数でより質の高い交流ができたと感じた。来年もぜひ参加したいと思える、充実した学習と交流のバランスがとれたよい会であった。

### 4.2 改善点

一つ目は、ポーランドの「昔のドイツと今のドイツは別」という考え方が東アジアに当てはまらなないと感じたことだ。この考え方は共生のために確かに大切だ。しかし、私が思う以上に東アジア、特に中国、韓国の人々が抱える日本に対する歴史問題の意識は根が深く、昔の日本と今の日本を区別して考えることは不可能なのが現状だ。実際、韓国の学生がこの話を聞いていたときにとっても驚いており、韓国でそれは難しいかもしれないと言っていた。ニュージーランドの移民政策や、ポーランドの歴史認識は確かに素晴らしいと思った。しかしここで感じたのは、やはりヨーロッパの考え方とアジアの考え方は相容れないのかもしれないということだ。悲しい考え方になるのかもしれないが、アジア人同士の問題はアジアの例を参考にしなければならないのかもしれない。

二つ目は、解決策の一つとして言語教育を充実させるといった意見が出ていたがやはり現実性がかなり低いということだ。韓国やニュージーランドでは第二外国語を学ぶ機会が小・中学校であると話していた。し

かし、日本ではこの制度がない。また言語を通して考え方や文化を学ぶことが必要と今回のフォーラムでも話し合われていた。しかし、私たち日本人は小・中学校で英語を学ぶ機会があるが現実問題として英語圏の考え方や文化を学ぶことができたのだろうか。最終的には、その言語に興味のある学生が個人的に勉強を進めるしかなく興味のない学生は勉強することすら途中で諦めてしまうのだ。教育者の立場としては、興味を抱かせる言語教育を行うことが大切になると思うのだがこれもかなり個人差があると思う。結局のところ言語教育はやはり大切なのだが個人差がかなり大きいことが危惧されると思う。

三つ目は、東アジアの共生のために政府以外の道で探す方法をとるという意見に対してだ。例を出してみると、韓国の政治家は選挙公約などで日本に対する歴史問題の話を出す人が多い。つまり、歴史問題を利用して国民の意見を掴もうとしている。日本側としては、絶対に首相が歴史問題を謝ることなどはしない。この問題は戦後70年以上も平行線をたどっているままだ。このような流れを知っていれば、私たちは政府以外で探すしかないと考えるのは当然のことだ。しかし、政府が決めることはその国の方向性を決めていることであり、私たちは常にその意見に対して従う必要があるのだ。また、メディアも政府が決めたことを大きく報道するのだ。日本人の意見を代表する政治家が個人の利益を考えず、共生の心、許し合う心を持たなければ国同士の問題は解決することはできないのだ。そのためには、私たちのような東アジアの共生について深く学習した学生が将来政治家になることが大切なのかもしれないと考える。

四つ目は、今回のフォーラムに台湾の学生がいなかったということである。台湾も戦時中日本の統治下でありながら、現在は親日国としての印象が強い。彼らに話を聞くことで私たちが参考にできる部分があると思う。また、中国・台湾間の現在の話も聞くことで日本側としても客観的に考えるようになるんじゃないかと思った。来年からはぜひ台湾の学生も招待してともに考えを深めたいと思った。

## 5. 東アジア・世界がともに生きることについて

フォーラムを終えた今一番感じていることは、やはり教育の重要性だ。子供は、単純であり教科書や周りの環境の意見を信じやすい。一回植えつけられた考え方というものは、よほどのことがないと変わることがない。だからこそ、幼い時から受ける教育の中に国を憎む内容ではなくともに生きるための内容が含まれていないと世界中の人々が共生することはできないのである。また、学校で教科書を読むだけではなくこのようなフォーラムのように実際に東アジアの学生がもっと交流する機会を増やすことが大切だと考える。相手国を憎んでいる人は、その国の人と実際に交流したことがない人が多いのだ。私たちのように会って、話し合うことで印象が大きく変わるのだ。私は大学になってこのような機会があったが、小学生のころから言語を通じなかったとしても対面する機会があってもよいと思う。何よりも互いの顔を見て、触れ合うことが和解するための大きな一歩になると感じた。

## 6. その他

私は、たまに東アジアの歴史問題が解決しないことに対してどこか他人事のように感じてしまうことがあった。戦後70年以上も経ってどうしてこんなにも争っているのか疑問に感じていた。しかし、韓国の学生と交流していて分かったことがあった。私の最も仲の良い韓国人の祖母の例になるが、彼女は戦時中に日本人に強制的に北海道に移住させられたそうだ。また、その祖母は韓国に戻ることができず北海道で最後を終えたという悲しい話を聞かせてくれた。私はこの話を聞き、ひどく衝撃を受けた。戦後70年以上経ち、もう関係ないことではないかと思っていたことが私の大切な友達には大きく関係していたのだ。この時に、歴史が自分に関係ないということではなく必ずどこかでつながっているのだと感じた。だからこそ、私たちは特に東アジアの歴史について深く学習する必要があるのだ。また、森山先生が仰っていた「大切な人がその国にいたら、必ず互いの国が良い関係になってほしいと思うものだ」という言葉に深く共感した。中国、韓国の友達がいなかった小・中学生のころの私は、それぞれの国と関係が悪化しても何も感じなかった。しかし、大切な関係ができた今は、それぞれの国の関係がよくなって欲しいと強く日々思っている。また、大切な友達ができたからこそ、その国の言語を少しでも習得したいと思えるモチベーションになっている。私はこのフォーラムでアジア以外にもまた新しい絆が生まれたことに感謝している。世界中で友が日々日本との共生について考えてくれているので、私も各国に思いを馳せて学習しようと思えることができるのだ。

## 共感の力—文化的交流の可能性

### 1. 国際的交流的側面

私にとって、講義や発表を聞くだけでなく、様々な国の学生と討論し、意見を交換し合う時間が設けられていたことは非常に有意義であったと感じている。私は普段から新聞には一通り目を通しており、従軍慰安婦問題や領土問題など東アジアが現在抱えている問題に関する記事を目にすることも多い。しかしマスメディアが報道しているニュースを理解するだけでは、それぞれの国の政府がどういう意見を持っていてどう対応しているのかということとは分かっても、実際にその国の国民がその問題についてどう思っているのかということとはあまり分からない。これに対しこのフォーラムでは、韓国の日本大使館前に慰安婦像が設置されたことや、太平洋戦争中の侵略的行為に対する日本政府の謝罪は十分であるかという問題などに関して、海外の学生の率直な意見を聞くことができた。他国の同世代の国民が何を感じているのかということを通じて聞くことができたのは、非常に刺激になった。

また、留学生との会話を通して、日本と他国との違いや海外における日本文化の受容について知ることができたことも大きな収穫だった。例えば、私はポーランドから来た二人と会話をすることが多かったが、彼女たちと話したことで、ラーメンや寿司といった日本料理がポーランドでは人気であるということ、バレンタインデーなどのイベントの形式は国によって微妙な違いがあるということなどを知ることができた。私は将来、日本文学や日本文化について研究したいと思っているので、今回のフォーラムで日本を客観的に見る視点を得たことは、今後学習を進めていく上でも役に立つのではないかと考えている。

### 2. 言語使用・学習の側面

私は10月頃から学内で開かれていたポーランド語講座に参加していたこともあり、ポーランドの留学生のバディになった。その講座では、挨拶や自己紹介など初歩的なことを学んだにすぎなかったため、実際にバディの学生とポーランド語で会話をすることはほとんどできなかった。しかしほんの少しであれ相手の言語を学んでいたことで会話のきっかけを作ることができ、相手に親近感を抱くこともできたと感じている。バディの学生はフォーラムの最後の日に、もしこれからもポーランド語を勉強するならば、気軽に質問してほしいと言ってくれたので、これからも学習を続け、いつか彼女とポーランド語で話してみたいと思うようになった。そして、相手の言語を学ぶということが、相手と良好な関係を築くために重要なのだと実感できた。

また、このフォーラムでは基本的に日本語が用いられていたが、時には英語が使用されることもあった。私は英語サークルに所属しており、その活動の一環でディスカッションの練習をすることもあるので英語での会話にはある程度慣れてはいるつもりだったが、国際関係などという社会的な問題について話したことはあまりなかったので、いくつかの単語を聞き取るのがやっとだった。自分の語学力の無さを痛感すると同時に、留学生たちが日本語で社会問題について話しているのは刺激になり、言語能力を向上させたいという意識を高めることができた。

### 3. 学問的学び

初日の午前中に行われた基調講演では、東アジアの対立の原因が日本の過去に対する反省の不十分さ、自国第一という風潮、世界のグローバル化に伴う「国から個人へ」という視点の変化などであることを確認した。そして物事をクリティカルに見つめることの重要性についても言及された。

同日の午後は二つの招待講演があった。一つ目は「共生のための言語教育—ベルギーとカナダの例をもとに」である。この講義では、ベルギーとカナダという二つの多言語国家が扱われた。まずベルギーでは、フランス語圏とオランダ語圏との間に根強い対立がある。EUには、新たなコミュニケーション能力の創造のために「すべてのEU市民が母語のほかに2つのEU言語を習得する」という言語教育の目標が存在するが、オランダ語圏ではフランス語を必修として勉強するのに対し、フランス語圏ではオランダ語の習得は必修ではないなど、言語教育の不均衡が指摘されている。そしてカナダでは、制度的二言語主義が採られており、行政サービスは英仏二言語で提供されている。植民地戦争を経て少数派となったフランス系の住民が主権運動を行った時期もあったが、現在はフランス語圏の言語や文化を理解するために「フレンチ・イマジネーション」というシステムが整えられつつあり、相互理解のための努力がなされている。この講義からは、相手を理解するために相手の言語や文化を知ることの重要性を学ぶことができた。

二つ目は『『向こう側』と『こちら側』のあいだで』という講義だった。この講義では、現在の日本は、出身国や文化などのルーツを隠した方がうまく生きられる場合もある社会だということを確認したあと、世界を「向こう側」と「こちら側」に分け、「こちら側」を絶対的な正義とみなすことの危険性について学んだ。また、ナショナリズムとパトリオティズムの違いについても教わり、後者に見られる「自己を律する、

倫理的な態度」が必要ではないかという指摘があった。私たちは、「こちら側」からだけでなく「向こう側」からも影響を受けているのだから、境界にとどまることで「ともに生きる」ことができるのではないかというのがこの講義の結論である。

二日間にわたって開かれたシンポジウムは、アジア以外の地域における共生のための取り組みが発表された部分と、東アジアの学生が共生のための提案をした部分に大きく分けられていた。前半では、東アジアにはあまり根付いていないと思われる多くの発想を学ぶことができた。例えば、多民族国家ニュージーランドの「移民がいることで、自国の文化を客観的に見ることができ、移民の母国の良いところを取り入れることもできる」という考え方、世界のリーダーであるアメリカの「他の国の模範」を目指す姿勢、複数の国から度々侵略を受けてきたポーランドの「相手をも尊重する」愛国心や「歴史を学ぶことは重要だが、過去ではなく現在、未来を見るべきだ」という思想などである。

後半では、かなり具体的で刺激的な提案が多く見られた。大連理工大学は、「日中韓大学生連合国際事業グループ」という団体を設立するという案を発表してくれたが、どのような事業を行うことが可能かということが細かく考えられており、一見無謀にも見える「学生主導で三国が共同事業を行う」ということが実現できてしまうのではないかと思うほどだった。釜山外国語大学の発表では、紹介されたアンケートの結果から、日本にいてはわからない韓国人の日本に対する印象を知ることができた。また、交換留学、共通教育、SNSによるキャンペーンなどが欧米の事例を踏まえつつ提案されていて、多角的な視点を持つことの大切さを学ぶことができた。同徳女子大学の発表は、差別用語を知って使わないようにする、大学生主導で中高生に各国への正しい認識を教える、三国に共通する問題について共に考える、国際問題を政治的に見ずに人権問題として捉える、という四つの提案から成っていた。国際問題と聞くと、解決には国家レベルの事業が必要だと思いがちだが、これらの提案は日常に組み込めるようなことであったため、すぐにでも実践できることがあるのだと知った。そして日本の発表は、「シティズンシップ」をテーマとしており、会議や教育機関・情報機関の設立などを通して東アジア人としてのシティズンシップを育むことで、問題を解決しようという共通意識を持てるようになろうという提言がなされていた。現状では、歴史教育や報道の有り様がお互いの国に対する悪い印象を形成しているということを知ると同時に、東アジアの共生のためにこの二つを見直していくことが重要であるということを知ることができた。

全体として、相手の国の言語や文化を学んで相手に対する理解を深めることが重要だということ、時事問題や歴史を様々な視点から見る必要があること、自分や周囲の人たちの意識を変えようと努力すれば、私たち大学生も東アジアの共生に貢献できるのだということを実感できた3日間だった。

#### 4. イベントとしてのフォーラムについて

良かったと思うのは、お互いを否定しない形で討論を進めることができたということだ。フォーラムが始まる前、私は、歴史認識などのデリケートな問題を話題にすれば、「そっちの国がこんなことをしたのが悪いのだ」「いやそっちの国も、……」といったように、排他的な発言の応酬になってしまうのではないかと危惧していた。普段からSNSなどで、相手の国を徹底的に批判するような投稿を目にしていたからであったと思う。しかし実際に討論してみると、会場全体に「この国の人たちはこういう風に考えているのか」と、相手を理解しようとする雰囲気があるのが感じられた。振り返ってみると、招待講演で話があった「二分法ではなく、境界にとどまる」ということができていたのではないかと思う。

しかし一方で、課題もいくつかある。第一に、欧米を批判的に捉える視点が不足していたと思う。シンポジウムにおいては、EUが抱える人材流出などの問題やアメリカのポピュリズムについての質問が出されたが、その後の討論では、「エラスムス」などに代表されるEUの諸制度が理想的であるとされ、「ヨーロッパは上手くいっているのに、アジアはこういうところできていない」というような発言が目立った。EUのような地域の共同体は、二度の世界大戦を乗り越えて共生のために設立されたという意味では東アジアの共生にヒントを与えてくれるが、上手くいっていることばかりではなく、現に欧州では反EUを掲げる右派政党が台頭している。この点を踏まえ、「東アジアはヨーロッパからこのようなことを学べるが、ヨーロッパのこの部分はもっとこういう風にして応用した方がいい」というような考え方をした方が、より議論が深まったのではないかと思う。

また第二に、討論の議題が日韓関係に偏っていたということも挙げられる。折しも日韓関係が非常に悪化していた時期に行ったので仕方がない部分もあるが、例えば欧米の学生の中には南京事件を専門にしている人もいたので日中関係について話しても議論は深いものになっただろうし、米中の学生が参加していたのだから、両国間の貿易摩擦の問題から自国第一主義について話し合うこともできただろう。日程を工夫し、討論の時間をもう少し長く設けることができれば、これらも議題にすることができたのではないかと思う。

#### 5. その他（ツアーの企画・運営について）

私はこのフォーラムで、期間中に行われた「スタディツアー」と「日本体験ツアー」の企画や運営を担当

した。ここではこれらのイベントの良かった点と課題について述べる。

良かったのは、特に日本体験ツアーにおいて、日本の伝統文化とポップカルチャーをバランスよく配置したコースを設定することができたと思うことだ。このツアーでは銀座とお台場の二つのコースを考えたが、前者では歌舞伎や和食といった日本の伝統に触れると同時に、博品館で日本のおもちゃを見ることにより、今日本で流行しているものを知る機会を設けることができたと考えている。また後者では、お台場のフジテレビで文化の最前線を、浜離宮で伝統文化を感じることができたのではないかと思う。

当日の状況に臨機応変に対応できたのも良かった。私が担当した日本体験ツアーの銀座コースでは、募集をかけた後から参加を希望した人がいたため、人数が予定より一人多くなってしまった。しかし予約した店に問い合わせたり、追加で参加した人には迅速に指示を出したりといったことができたため、予定通りにツアーを進めていくことができた。スタディツアーでは、当日の天候が悪かったため、それに合わせて行動することができたと思う。

一方で課題としては、第一に、コースを決める段階で時間がかかりすぎてしまったことが挙げられる。前年のコースが見学より体験を重視するようなものだったこともあり、初めはどのコースにも体験学習を入れようとしていた。その結果、予算が足りなくなりなかなかコースが纏まらなくなってしまった。最終的には体験をごく簡単なものにするので予算を抑えることができたが、コースの最終決定が予定より遅れてしまったため、早い段階から前年にとらわれずに考えるべきだったと思った。

第二に、スタディツアーに対する目的意識が高かったとは言えないことも課題であると思う。悪天候のため仕方ない部分もあったが、スタディツアーで最後に訪れた横網町公園は施設をざっと見るだけで終わってしまった。敷地内には、関東大震災後の混乱の最中に虐殺された朝鮮や中国の人々を慰霊する施設もあったのに、特に説明もせずただ見るだけになってしまい勿体なかったと思っている。私たちが事前にもう少しこの公園について調べておき、天気が悪かったとしても昼食を食べたレストランで説明をするなどといった工夫をすれば、あの公園に日本と韓国や中国の学生が一緒に行くことの意味を皆が理解してくれたのではないかと思う。

## 6. 東アジア・世界がともに生きることについて

フォーラムの締めくくりとして行った全体討論では、東アジア・世界の共生のために私たちができることとして、外国の言語や文化、歴史を学んで理解すること、フォーラムで得た経験を身近な人に広めていくこと、外国語で自国の文化を発信できるようになること、国内でも国際問題について話し合いをすること、などが挙げられた。私は将来文学を専門にしたいと思っていることもあり、文化、特に文学を通じた相互理解というものに関心を抱いた。そのためここでは、この点についてもう少し具体的に掘り下げてみようと思う。

調べてみると、文化人たちによる文学を通じた東アジアの交流事業は、既に存在していた。「東アジア文学フォーラム」が、その一例である。これは日中韓の文学者たちが集い、作品を読み合うことで交流するイベントで、2008年に始まった。日中関係が悪化した時期に中断を挟みながらも10年続いており、前回の会合は昨年10月にソウルで開かれた。この事業を特集した昨年10月24日の朝日新聞の記事によると、日本作家団の代表を務めた平野啓一郎さんはこのイベントについて、「物語は国民ではなく、一個人から始まる。韓国や中国に生きるひとりの登場人物に読者は共感する。(中略)観光で行くのと違い、深い内面から理解しあえる。文学でつながる意味はすごくあると思う」と発言している。

無論、私たち大学生に、お互いの作品を読み合うといったようなことはできない。しかし私はこの発言を読み、文学作品に触れることを通して海外に生きる登場人物に共感することは、共生を実現していくためのきっかけになり得るのではないかと思った。私がこのフォーラムに参加して学んだのは、立場の異なる相手の考えを理解しようとする姿勢の重要性や、自分と相手との違いをことさらに強調することの危険性である。平野さんの発言にもあるように、本を読んで「中国や韓国に生きるひとりの登場人物に共感する」ことで、登場人物たち、ひいてはその国に住まう人々の置かれている状況やものの見方を理解しようと思うようになり、また住む国が違って、人々は同じような喜びや悲しみを持っているのだということに気づくことができる。文学というのはいわゆる虚構であるが、だからこそ現実の政治的問題を抜きにして共感や理解を深めていくことができるのだ。そして、例えば私がある韓国人作家の小説を読んでその登場人物に深く共感したとしたり、私はその本を周囲に薦めることで、共感の輪を広げていくことができる。このような方法は誰にでも実行することが可能であり、容易である。

今回のフォーラムをいい形で終えることができたのは、政治とは無関係の大学生が、政治とは違うところで交流し、話し合うことができたからだ。同じように文化を通じた交流は、それが政治とは離れた場所にあるからこそ可能性を持つ。まずはこうした形での交流を持ってお互いに共感を深めていくことが、東アジア・世界の共生につながるのではないかと私は考える。

<参考文献>

朝日新聞 2018年10月24日朝刊12版32面「文学でつながる日中韓 東アジア文学フォーラム、ソウルで開催」



## 【参加学生レポート：海外学生】

### 今回のフォーラムで感じたこと

#### 1. 国際的交流的側面

今回のフォーラムでは韓国、日本だけでなくいろんな国の大学生も参加して色々な国の多様な視覚が分かっただけでなくいろんな文化にも接することができて良かった。

私は以前にもお茶の水女子大学とのセミナーに参加したことがあったが、その時はいろんな話を交わすことはできたけど日程が短くてとても惜しかったけど今度は日程も長いし多様なプログラムも用意されて色々な国の学生達と交流をすることがもっと円滑だった。

最も良かったのは、日本の学生たちと宿舎が同じで、プログラムが終わった後も色々な話を交わすことができたということだ。単純にお互いの国に来たことがあるかから深い話まで交わすことができた。友達の家遊びに行き、一緒にネットフリックスを見たり、好きな芸能人に関する話をしたり、お互いの文化差について話したりした。国は違うけど、やはり同じ世代だから興味を持っているところも一緒だし、好みもかなりかぶっていて交流するのがもっと楽しかった。そのなかで初めて会った時は日本人の友達だったら、ある瞬間からはただの友達になっていた。フォーラムが終わる頃には10日ぐらいの期間があつという間に過ぎたように感じられ、最後にお茶の水学生たちが映像の手紙が流れた時には感動した。韓国へ帰る日、宿所のドアに手紙がかかっていた時は残念だったし、もう帰ることが実感できず、涙が出る場所だった。10日という短い期間の中でたくさんの思い出と深い友情ができて嬉しいし、これからもこの縁を続けていきたい。また会う日を待ちながら。そして、このような民間交流がますます増えて、東アジア全体に平和と連帯が一日も早くできることを期待する。

#### 2. 言語使用・学習の側面

このフォーラムに参加する前から日本語で発表を準備しながら学習的にはとても役立ったと思う。どうすればもっと意味がよく伝えられるかという色々な単語を調べたり、辞書を引いて見ながら初めて知った語彙もあったからだ。また、普段は日常生活でよく使う語彙だけを使うが、今回のフォーラムでは丁寧な敬語体の使用や、普段あまり話さないことに対して扱っているため語彙の使い方がもっと幅広くなったようだ。また、発表を準備しながらお茶の水大学の学生たちがこの言葉はこの文脈には似合わない、この単語がもっと意味伝達に良さそうだ、などの単純に辞書や本には受け取れないフィードバックをしてくれてもっと良い日本語学習になったと思う。

そして日本語会話の勉強にも役立った。韓国では日本語専攻とはいえ、日本語が使える環境が極めて限定的に、私の場合には日本語会話授業がなければ日本語を使う時間はほとんどなかった。しかし、今回のフォーラムではほとんどずっと日本語だけを使って最初は言おうとした言葉が日本語にすぐ出てこなかったりしたが、だんだん日本語を使うのが自然になって日本人学生を含め、他の国の学生たちとも活発に疏通することができた。

みんな国籍は多様だったが、日本語で疎通するというのが何か面白い経験だった。また、日本人だけでなく、他の国籍の学生たちもいたからこそ、その国の言語に接するのも楽しかった。私は2年前に中国に留学した経験があるので、その時の記憶を生かして中国人学生と中国語で話したり、ポーランド人の学生とは生まれて初めてポーランド語を習ったりしながらもっと親しくなることができてよかったと思う。言語学習が互いの文化を学ぶことで自然に繋がったのだ。

#### 3. 学問的学び

私も発表を一生懸命に準備したが、他の学生たちの発表を聞きながら、みんな本当に一生懸命準備したなと思った。特に釜山外国語大学の学生たちが発表した提案の中で、一緒に行動して連帯することがあったが、私たちが発表した内容にも似ている部分があり、やはり共にすることの重要性を認識しているのだという気がした。

発表が終わった後の質疑応答時間も非常に興味深かった。私に印象深かったのは、中国人学生の発表時間に日本人学生が中国人の日本人に対するイメージを聞いてみたことだった。中国人学生は、実は中国の若者は日本に憧れており、日本に否定的なイメージを持っているのは中高年層ということだ。そう言いながら、自分の母は自分が日本に行くと言った時、日本で殺されるかもしれないと言った話を聞いて、私は非常に驚いた。でも実は韓国と日本もあまり変わらない気がした。韓国でも若者の中で日本文化、日本食を好む人が多く、日本でも韓国ドラマ、韓国料理、韓国ファッションなどにとっても関心を持っている若者が多いからだ。特に、今回のフォーラムで会ったお茶の水大学生の多くがハングルを学んだことがあり、ある学生は韓国人